た。それから戰爭ではセテワヨを向うにして戰つたこともありますが、それからはずつとナタルで仕事をしてをりました。しかしそれももうあきて來まして、また北の方へ歸りたくなつたのでございます。どうしてもこの土地は私には向きません。私は金はいりません。しかし私は勇敢な男ですから、おともをさして、食べさしていたゞく値打ちはあると思ひます」

私はこの男やこの男の話しぶりが、どうもよくわからなかつた。話の模樣では嘘をついてゐるのではないやうだが、金はいらぬからつれて行つてくれなんていふところは、普通のズル人とあまりかはつてゐるので、少し信用がおけなくなつた。困つた擧句、私は、彼の話をサー・ヘンリイとグッドとに通譯して二人の意見を求めた。

サー・ヘンリイは、私に向つて、ウムボバを起ち上らせてくれと言つた。ウムボバは私の言ふとほりにした。そして、それと同時に着てゐた長い軍服を身體からするりと辷り落して、腰に卷いてゐる腰帶と、頸にかけてゐる獅子の爪の頸飾りとだけになつた。私はこれ程立派な土人を見たことがない。丈は六呎三吋もあり、それに應じて肩幅も廣く、身體の恰好も仲々よく整つて居り、色は、淺黑いといふ位の程度であまり黑くなかつた。サー・ヘンリイは彼のそばへ歩みよつて、誇りに滿ちた、美しい彼の顏をしげしげと見た。

「實によく揃つてゐますなあ」とグッドは言つた。「二人ともどつちが大きいとも言へませんぜ。」

「私はお前の顏が氣に入つたよ。ウムボバ、だからお前を私の從者にしてあげる」とサー・ヘンリイ

は英語で言つた。

ウムボバはわかつたと見えてズル語で「有り難うございます」と答へた。そして、この白人の體格と胸幅とをちらりと見て附け足した。「私とあなたとは二人とも男の中の男ですな。」

第四章　象狩り

ルカンガ河とカルクエ河との交流點に近いシタンダ村までダーバンから千哩以上もある。その長い旅の間に起つた出來事を私は一々こゝで話さうとは思はない。この間の旅の最後の三百哩程は、吾々は徒步で行かねばならなかつた。といふのは、その地方にはツェツェといふ恐ろしい蠅がゐるからだ。この蠅にさゝれると驢馬と人間と以外の動物は一たまりもなく死んでしまふのだ。

吾々は一月の末にダーバンを出發して、シタンダ村の近くに天幕を張つたのは五月の第二週目であつた。途中で遭遇した吾々の冒險は種々樣々なものであつたが、それはアフリカの獵師なら誰でも遭遇するものだから、讀者に退屈であらうと思つてこゝでは一切書かないことにする。併したゞ一つの例外があつたから、それだけ書くことにしようと思ふ。

ロベングラといふ王の治めてゐるマタベレ國の、商業地としては一番はづれにあるインヤチで、吾吾は乘り心地のよい馬車に名殘をしい別れをつげた。ダーバンで買つた二十頭の美しい牛の中で、この時まで生き殘つてゐたのは十二頭だけであつた。一頭はコブラといふ毒蛇に嚙まれて死に、三頭は

榮養不良と水の缺乏のために死に、一頭は道に迷つて行方が知れなくなり、あとの三頭はチューリップといふ毒草を食つて死んでしまつたのだ。チューリップを食つた、めにあとの五頭も病氣になつたが、チューリップの葉を煎じて服ませたので命をとりとめたのである。これは手後れにならぬうちに服ませると、よくきく解毒劑なのだ。

馬車と牛とは、御者及び案内者として雇つて來たゴザとトムとに見張りをたのみ、こんな處まで傳道に來てゐたスコットランドの宣教師に萬事を托しておいた。それから、ウムボバとキヴアとフェントフォーゲルと、此地で雇つた六人の人足とをつれて、吾々は徒歩で、無鐵砲な冒險の旅に向つた。私はよく覺えてゐるが、こゝを出發する時は、皆だまりこくつてゐた。皆の者は、今別れた牛と馬車とが再び見られるかどうかを氣にしてゐたのだ。私は萬々そんなことはあるまいと覺悟してゐた。しばらく無言のまゝで歩いてゐるうちに、先頭にたつてゐたウムボバがズルの歌を歌ひ出した。それは勇ましい人々が、生活がいやになり、平凡な世の中に飽きて、何か新しいものを見つけるか、それとも死んで終ふか、どちらかだと覺悟して、荒野の中へ旅立つと、荒野の向うには美しい處があつて、そこには美しい女や、肥つた牛や、狩の獲物や、殺す相手の敵などが澤山あたといふ歌であつた。

吾々一同はみんな笑ひ出した。そしてさいさきよしと勇み立つた。ウムボバは實に愉快な蠻人で、時々ぢつと考へこむ癖があるが、その時を除くと、吾々を元氣づけてくれる、こゝをよくのみこんでゐた。吾々はこの男が非常に好きになつた。

さて、これから一つだけ冒險の話しをしよう。といふのは私は狩の話が好きでたまらないからである。

インヤチから半月ばかり旅をつゞけて行つた時、吾々は水の豐富な、とりわけ美しい林のある地帶を通つた。小山の上には象の大好きなマチャベルの樹が茂つてゐて、象の歩きまはつた足跡がそこらぢうにあるのみならず、マチャベルの樹が處々折れたり、根こぎになつたりしてゐた。象がこの邊に出沒するまぎれもない證據だ。

或る日の夕方、吾々は、一日長い旅をして來たあとで、非常に景色のよい處へ來た。雜木林におほはれた丘の麓に、水の涸れた河床があつた。この河床には處々に水晶のやうな美しい水だまりがあつて、そのまはりには色々な獸の蹄のあとがのこつてゐた。この丘の正面は、公園のやうな野原があつて、色々な樹が茂つてをり、周圍は道もない雜木林になつてゐた。

吾々が此の河床の道へはひつてゆくと、突然丈の高い麒麟の一隊が、妙な足どりで、尻尾を背中の上へたて、四竹のやうな聲音をさせてやつて來た。吾々のゐるところから三百碼もはなれてゐるので、射つことはできないのだが、先頭にたつて、彈丸をこめたエキスプレス銃をもつて歩いてゐたグッドは、もう矢も楯もたまらなくなつて鐵砲をとつて、一番あとから歩いてゐた若い雌に向つて發砲した。どうしたはずみか、彈丸は、ちやうど頸の眞後へ命中して、脊柱を粉碎し、その麒麟はまるで兎のやうに頸をぐるぐる廻しながら倒れた。

「畜生！」とグッドは行つた。どうもこの人は少し昂奮して來ると言葉使ひがわるくなるのは困つたものだ。海軍生活をやつてゐる時にさういふ癖がついてしまつたのだ。「畜生つ！　たうとう殺しちまつた。」

「よう、ブウグワン」とケーファー人どもは怒鳴つた。「よう、よう。」

ブウグアンといふのは硝子の眼玉といふ意味で、彼等はグッドが眼鏡をかけてゐるので、彼のことをかう呼んでゐたのだ。

「よう、ブウグワン」とサー・ヘンリイと私とは眞似をして言つた。その日から、グッドは少くも、ケーファー人の仲間では射撃の名手といふ評判をとつた。その實彼は射撃は極く下手だつたが、この日の殊勳に免じて、その後彼が射ち損つたときには、それを帳消しにしてやつた。

人足どもに、この麒麟の肉の、よいところを、切り取らせるやうに言つておいて、吾々は、とある水だまりから百碼ばかり離れたところまで小屋をこしらへに行つた。それは茨の木を切つて、それを積み重ねて圓形の墻をつくり、その墻に圍まれた中の地面を掃除して、その中央に、若し乾いたタムブキの葉が手にはひればそれで床をこしらへ、一ケ所か二ケ所に火を焚けばよいのだ。

小屋が出來上つた時分には月は空に昇り、麒麟のテキや、骨の髓を焼いたのなどで夕食の準備ができた。その時の麒麟の髓のうまかつたこと！　嚙みくだくのには少し骨が折れたが、私は、象の心臓を別にすると麒麟の髓くらゐ甘い料理をまたと知らない。しかもその翌日は象の心臓も食べられたの

だ。吾々は月明りで簡單な食事をすまし、折々手をやすめてはグッドにお禮を言つた。

食事がすむと吾々は火を圍んで煙草をふかしたり雑談をしたりした。それは實に珍妙な圖であつたに相違ない。短い、眞直に立つた私の胡麻鹽の髪と、サー・ヘンリイの少し伸びすぎた黄色い縮れ毛とは好箇の對照だつた。とりわけ私は痩せて、ちんちくりんで、色が淺黒いのに、ヘンリイは脊が高くて、胸幅が廣くて、肥つてゐるといふ違ひやうだつた。しかし三人のうちで、この場合、一番妙な恰好をしてゐたのはジョン・グッド船長であつた。彼が革袋の上に坐つてゐる樣子はどう見ても文明國で愉快な一日の獵を了へて家へ歸つて來たといふ風であつた。それ程彼は身のまはりをきれいに、小じんまりとしてゐたのだ。彼はスコッチの獵服を着け、對の帽子をかぶり、きれいなゲートルを穿いてゐた。顔はいつものやうにきれいに剃つて、眼鏡も義齒もきちんとしてゐた。こんな荒野の中で、これ程身なりをきちんとしてゐる人を私は見たことがない。カラーさへちやんとかはりをもつて來てゐて、新しいのをつけてゐた。

私がそれを驚くと彼は無邪氣に答へた。「こんなものは重いものぢやないですからな。私はいつも紳士らしくしてゐたいんですよ。」あゝ、彼がこの先どんな目にあふか、どんなものを着なければならなくなるかをこの時に知つてゐたら！

吾々三人は美しい月光を浴びて雑談をしながら、數碼はなれたところで、羚羊の角でこしらへた口のついたパイプをくはへてダッカをふかしてゐるケーファー人どもを見てゐた。彼等はそのうちに

ダッカに醉つて、次々に毛布にくるまつてごろり〳〵と横になつて眠つてしまつた。たゞウンポパだけは少し一同から離れて、頰杖をついて何かぢつと考へこんでゐた。彼はあまり他の連中と一緒にならないことに私は氣がついた。

まもなく、吾々の後の草叢の中で「ウー、ウー！」といふ高い唸り聲が聞えた。「ライオンだ！」と私は言つた。そして吾々は起き直つて耳を傾けた。かと思ふと百碼ばかりはなれた水溜りの方から、鋭い象の鳴き聲が聞えた。「象だ！象だ！」とケーファー人どもは囁きあつた。それから數分間たつと、吾々は大きな黑いものが、次々に水たまりの方から草叢の方へのそ〳〵動いてゆくのを見た。

グッドは、それを殺したさに跳び上つた。恐らく彼は象を殺すのは麒麟を射つ位雜作のないものだと思つてゐたのだらう。私は彼の銃をつかんで彼を坐らせた。

「駄目だ」と私は低聲で言つた。「通り過ごさしておきなさい。」

「どうも此處は獲物の樂園らしいな。一日か二日とまつて少し狩をやつて見るかな」とやがてサー・ヘンリイが言つた。

私は少々驚いた。といふのはサー・ヘンリイはこれまでいつも旅を急いでゐて、わけても、インチで、二年前にネヴィルといふ英國人が馬車を賣つて奥地の方へはひりこんだといふことを確かめてからは、餘計と急いでゐたのに、その彼がこんなことを言ひ出したからだ。きつと彼の狩獵本能が一時彼を壓倒したのだらうと私は思つた。

グッドはこれをきいて喜んで跳び上つた。といふのは彼はこの象に一發ずどんと喰らはしてやりたくて堪らなかつたからだ。實をいふと私も同じだつた。こんな象の群を見て、一發もお見舞せずにむざむざ逃がしてしまつては私の良心が承知しないからだ。

「そりやいゝですな。」と私は言つた。「吾々は少し骨休めをする必要があると私は思ひますね。で今はもう寢ませう。明日は夜明け前に起きて、奴等が草を食つてゐて、まだ動き出さない前に襲はねばなりませんからね。」

二人とも私に同意したので吾々は早速準備にとりかゝつた。グッドは服を脱いで塵を拂ひ、眼鏡と義齒とを外してヅボンのポケットへしまひ、それを露にあてないやうに、彼の敷布の隅つこの下へ入れた。サー・ヘンリイと私とはもつと簡單な準備で滿足して、吾々はめい〳〵毛布にくるまり、夢も見ずにぐつすり熟睡した。

突然、水溜りの方にあたつて、何かひどく格闘してゐるやうな物音がきこえ、それにつゞいて、つづけさまに恐ろしい呻り聲が聞えた。その聲が何の聲であるかは聞き誤りやうがなかつた。あんな聲を出すものはライオンより外にないからだ。吾々はみな跳び起きて水溜りの方を見た。するとその方に、黑いやうな黃色いやうなごだ〳〵した塊りが、藻掻きながら吾々の方へ進んで來た。吾々は銃をとり上げ、そつと毛皮でこしらへた靴を穿いて、小屋を出てその方へ駈け寄つた。この時には、もう塊りは倒れてしまつて、地べたを上になり下になりしながらころげまはつてゐたが、吾々がそこまで

ゆくと、それもやんで、靜かにその場に横はつてゐた。

吾々はその塊りの正體を見屆けた。草原の上に一匹の羚羊が、死んで横はつてゐた。そして、その羚羊の角につきさゝれたまゝ、黑い鬣の素晴らしいライオンがこれも矢張り死んでゐた。羚羊が水を飲みにやつて來る所をライオンが待ち伏せてゐて、羚羊が水を飲んでゐるところへ跳びかゝつていつて、鋭い角で突き刺され、それから格鬪がはじまつて共倒れになつたのに相違ない。前にも私はかういふ光景を見たことがある。

吾々は死んだ二つの獸をよくしらべてから、すぐにケーファー人どもを呼んで、みんなでその死骸を小屋まで曳きずつてゆき、それから夜明けまで、もう眼を醒ますことなしに眠つた。

夜が明けるとすぐに吾々は起き上つて戰鬪準備にとりかゝつた。吾々はてんでに銃をもち、薄い冷し紅茶のはひつた大きな水筒を用意した。そして少しばかり朝食をかきこんで、吾々はウンボバとキヴァとフェントフォーゲルとをつれて出かけた。ほかのケーファー人どもは後にのこしてライオンと羚羊との皮をむいて、羚羊の肉を切つておくやうに命じた。

大きな象の足跡を見出すのは容易であつた。フェントフォーゲルはこの足跡を見て、象の群は二三十頭で大部分は成長した牡だと言つた。「だが、この象の群は、夜のうちにどつかへ移つてしまつたのだから、吾々が、樹の葉や樹皮についてゐる傷で、象の近くまで來たのを知つたときはもう九時で、既に暑い日がかん〳〵照つてゐた。

やがて吾々は件の象の群が、朝の食事を終へて、大きな耳朶をぶら〳〵させながら、窪地に立つてゐるのを見つけた。その數はフェントフォーゲルが言つたやうに二三十頭であつた。それは實に素晴らしい光景であつた。

といふのは、彼等は吾々のゐるところから二百碼位しかはなれてゐなかつたからだ。私は風向きをしらべるために一握りの枯草をつかんでそれを空へ投げて見た。若し風が向うの方へ吹いてゐると、象の群は吾々が鐵砲を放つことができるやうになるまでに逃げてしまふことを私は知つてゐたのだ。ところが風はい、鹽梅に向うからこちらへ吹いてくることがわかつたので、吾吾は聲音をしのばせて匐つて進み、樹蔭で身體をかくすことができたお蔭で、巨獸の群から四十碼位のところまで近づくことができた。ちやうど吾々の眞正面に三頭の見事な牡が立つてゐた。そのうちの一つの象の牙は素晴らしく大きなものだつた。私は他の者に向つて、中央のを射つと囁いた。サー・ヘンリイは左のを受持つことにし、グッドは大きな牙をもつた奴をねらうことにした。

「さあ」と私は囁いた。

ズドン！　ズドン！　ズドン！　と三つの銃口から一齊に彈丸は飛んでいつた。するとサー・ヘンリイの象は、心臟を射貫かれて、ハムマーのやうに倒れた。私の象は膝をついたので、死ぬのか知らんと思つてゐると、すぐに起き上つて、驀らに私の眼の前を通り過ぎたので、私は第二の彈丸を肋骨のあたりへ射ちこんだ。すると象はこの一擊でころりと倒れたので、私は急いで二發彈丸をこめて象のそばへ走つてゆき、象の腦天を射拔いてやつたので、彼はもう藻掻くのをやめてしまつた。それ

から私はグッドがあの大きな牡の象をどうしてゐるかと思つて振り返つた。私が自分の象にとゞめの一發を射つてゐるときに、グッドの象が怒つて鳴いてゐるのを聞いたからだ。グッドのところへ行つて見ると、彼はひどく昂奮してゐた。彼の象は彈丸を受けると、向き直つて、射擊者の方へ跳びかゝり、グッドが逃げるひまもないうちに、彼の前を通り過ぎて、吾々の夜營の天幕の方へ盲滅法にかけて行つたのだ。一方象の群はひどく驚いて、それと反對の方へ逃げ出したのであつた。

暫くの間吾々はどちらを追ひかけようかとためらつてゐたが、遂に象の群の方を追ふことに決めた。象を追跡する位たやすいことはない。正にそれは車の通つたあとをつけてゆくやうなもので、象があわてゝ逃げて行つたあとは、雜木林がまるで草原のやうに蹂躙られてゐるからだ。

併し、あとをつけること、、追ひつくこと、は別問題だ。吾々は燒けつくやうな日に照らされて、二時間以上もかゝつて、やつと彼等を發見したのであつた。一頭の牡だけを除いて象の群は一つ處に集つて立つてゐた。何だかそはくして、危險に注意してゐるらしかつた。一頭だけは、この群から五十碼ほど離れたところに、番兵の役目をしてたつてゐた。そこから吾々のところまでは六十碼位であつた。この上近づいてゆけばこの番兵は、吾々の姿を見るか、嗅ぎつけるかして、きつとあとの象の群は逃げ出すに相違ない。それに地面は平坦で身をかくす場所もなく、その上、吾々はこの番兵をしてる牡の象がひどく氣に入つたので、私が低聲で合圖をして此の象を射つことにした。三發の彈丸に射たれて、この象はどしんとその場に倒れて死んでしまつた。すると象の群はまた逃げ出した。

が、彼等にとつて氣の毒なことには、百碼ばかり進むと、一條の乾いた水路があつて、その岸はけはしい絶壁になつてゐた。象の群はその中へ跳びこんだのだ。吾々が崖の上まで辿りついた時には、彼等は、ひどく狼狽して向う岸へ上らうとあせつてゐた。彼等がきい〳〵鳴きながら、先を爭つて逃げてゆくさまは人間そつくりであつた。吾々は好機逸すべからずと、できるだけ素速く彈丸をこめて、つゞけざまに射ち、立ろに五頭を射殺してしまつた。彼等が向う岸へ上るのを斷念して、水路の下の方へ一目散に逃げ出しさへしなかつたら、吾々は屠殺しにすることもできたらうと思ふ。だが吾々はひどく疲れてもゐたし、あまり澤山殺すのも嫌になつた。一日の獲物として、象八頭といへばさう貧弱でもないのだから。

そこで、吾々はしばらく休憩して、ケーファー人どもに、死んだ象の二頭の心臟を切りとらせ、明日は人足どもに象牙を切らせようと心で決めながら、大滿足で歸路に着いた。

グッドが頭分の象に傷を負はしたあたりを通り過ぎたとき、吾々は大羚羊の群に出會つた。併し、食物はもう澤山あるので、射たなかつた。彼等は吾々の横を通り過ぎて、百碼ばかりうしろの方にある小さい雜木林のところまでゆくと立ち停つて、くるりとこちらを向いて吾々を見てゐた。グッドはまだ大羚羊をそばで見たことがなかつたので、それが見たくてたまらず、銃をウムボバに渡してキヴァと二人で雜木林の方へ歩いて行つた。吾々はその場に腰を下して、休みながら待つてゐた。

陽は雲を血潮のやうに染めて西に沒するところであつた。サー・ヘンリイと私はこの美景に感歎久

しうしてゐた。その時突然象の鳴き聲が聞えた。そして、夕日を浴びた巨獸の姿が體軀をもちあげ、尾を上にあげながら突進して來るのが見えた。それは前にグッドに傷つけられた象だつた。次の瞬間に、吾々の眼には別のものが見えた。それは、グッドとキヴァとが、この負傷した巨獸に追はれながら一目散にこちらへ逃げて來たのだ。しばらくの間吾々は鐵砲を射つことをし得なかつた、といふのは射てば彈丸がこの二人のどちらかの身體にあたりはしないかとおそれたのだ。つゞいて恐るべきことが起つた。グッドが文明人の身だしなみの犧牲になつて倒れたのだ。彼がみんなのものと同じやうに、ゾボンやゲートルなどにかまはず、フランネルの獵服を着て毛皮の靴を穿いてをれば何でもなかつたのだが、さうでなかつたので、この死に物狂ひの競走にあたつて、ゾボンが脚にもつれ、乾草で磨いた靴が辷つて、吾々から六十碼位のところまで來たときに、荒れ狂ふ象のすぐ前で彼は倒れてしまつたのだ。

吾々はあつと溜息を洩らした。もう駄目だと思つたからだ。そしてできるだけ速く彼の方へ駈出した。それから三秒の間に萬事終つた。しかしその終りかたは吾々の想像どほりではなかつた。勇敢なキヴァは主人が倒れたのを見て、くるりと向きなほり、槍を振つて象の胴體をずぶりと突き刺した。巨獸は苦悶の叫びをあげながら、かはいさうなキヴァを、鼻で卷いて地べたに投げつけ、彼の胴のうへへ大きな脚をのせて、ぎりつと踏みしめたかと思ふと、キヴァの身體は眞つ二つにちぎれてしまつた。

吾々は恐ろしさに狂氣のやうになつて、つゞけざまに發砲したので、たうとう象はキヴァの屍體の破片の上にどさりと倒れてしまつた。

グッドは起ち上がつて、一命をすてゝ彼の命を救つてくれた勇敢なズルの少年の屍體の上で手をあはせて感謝した。私もさすがに胸が迫つて、咽喉に塊りができたやうな氣がした。ウンボバは巨獸の屍體と、かはいさうなキヴァの切斷された屍體とを眺めながら言つた。

「あゝ、こいつは死んだ。だが男らしい死に方だつた！」

第五章　沙漠に向ふ

吾々は都合五頭の象を殺したわけだ。それから牙を切りとつて、天幕へ運び、遠くから見てすぐわかるやうに、それを注意ぶかく大木の根元へ埋めるのに二日かゝつた。それは實に素晴らしい象牙だつた。一本平均四十封度から五十封度あつた。私はまだこんな立派な象牙を見たことがない。キヴァを殺した巨象の牙と來たら、一對で百七十封度はあるだらうと思はれた。

キヴァの屍體は、彼の道中の武器であつた槍とゝもに丁寧に埋めてやつて、吾々は、無事に歸つて來て埋めておいた象牙を掘りだすことができればよいがと考へながら、三日目に、また旅をはじめた。途中で色々な冒險もあつたが、それはすつかり省略する。兎に角吾々は格別道にも迷はずにルカンガ河の近くにあるシタンダ村に着いた。これから、吾々のほんたうの遠征がはじまるのだ。私はこゝへ

着いたときのことを今でもよくおぼえてゐる。右には、こゝかしこに土人の家が散在して居り、それには石造の牛小舎が附屬して居り、河の側には、少しばかりの耕地があつた。その向うには乾いた河床がうね〳〵と匍つてゐて、その中には丈の高い草が生えてをり、その上を小さい獸類がうろついてゐた。左手には廣漠たる沙漠が廣がつてゐた。こゝがちやうど肥沃な土地の外れらしい。どんな自然の原因によつて、こんなにだしぬけに土壤が變化したのかわからないが、兎に角ひどい變化である。恰度吾々の天幕を張つた下に小川が流れてゐて、そのずつと彼方に石の坂道がある。二十年前に、かはいさうなシルヴエストルがソロモン山の探險に失敗して降りて來るのを見たのはこの阪だ。この勾配の先から、カローといふ一種の灌木の一ぱい生えた水のない沙漠がはじまつてゐるのだ。吾々が天幕を張つた時はもう夕刻で、太陽は沙漠の中へ沈みつゝあつた。グッドに監督を賴んでおいて、私はサー・ヘンリイと二人で、向うの勾配の頂きまで歩いてゆき、沙漠の彼方を見渡した。空は清く澄んでゐたので吾々は、遙か彼方に、ところ〴〵白い帽子をかぶつたスリマン山の薄い藍色の輪郭を見ることができた。

「あれがソロモン山の障壁ですよ」と私は言つた。「けれどあそこまで行けるかどうかは神樣にしかわかりませんがね。」

「弟はあそこにゐるのですね。若しあれがゐるとすれば、兎に角あれのゐるところまで行けるわけですな」とサー・ヘンリイは、この人に特有の落ちついた口調で言つた。

「だとよいのですがね」と答へながら、私がひき返さうとすると、吾々のそばに誰かもう一人立つてゐた。ウンボバが矢張り吾々と同じやうに遠くの山を眺めながら立つてゐたのだ。

ウンボバは私が彼のゐることに氣がついたのを見て、サー・ヘンリイに向つて話しかけた。

「あなたはあそこまで行くつもりなんですか？」と彼は、身の廣い槍で山の方を指しながら言つた。私は、どうして御主人に向つて、そんな親しさうな口をきくのだと鋭く詰つてやつた。するとウンボバは靜かに笑ひながら言つた。

「私だつて、あの方と同じ身分かも知れないぢやありませんか？　あの人はきつと尊い家柄の人でせう。あの人の大きな身體と眼とでわかりますよ。ところが私だつてさうかも知れないぢやありませんか？　少くも私だつて身體は大きいでせう。マクマザンの旦那、どうぞ私の言ふことを向うの旦那に傳へて下さい。私はあの旦那とあなたと二人ともに話したいのだから。」

私はケーファー人からこんな對等な物の言ひ方をされた事はないので、腹がたつたが、それでも妙に彼の言葉には私を動かす力があつたし、それに、何を言ひたいのか知りたくもあつたので、私は、それをサー・ヘンリイに通譯し、ついでに、この男は實に無禮な奴で、亂暴極まる物の言ひ方をしてゐると附け加へた。

「左樣、自分はあそこまで行くつもりだ」とサー・ヘンリイは答へた。

「沙漠は廣くて水がありませんよ。山は高くて雪が一ぱいですよ。山のむかうの日の沈むところには

何があるか知つてる者はないのですよ。どうしてあなたはそこへ行きます、それから何のために行くのです？」

また私は通譯した。

「あの男にかう言つて下さい」とサー・ヘンリイは答へた。「自分の兄弟があそこへ行つてるので、それを探しに行くんだと。」

「さうでせう。道であつたホッテントット人が、二年前に一人の白人が、一人の獵師を從者につれて、あの山の方へ行つたつきり、歸つて來ないと言つてましたよ。」

「どうしてそれがわしの弟だつてことがわかつたんだね？」とサー・ヘンリイは訊ねた。

「私や知りませんが、そのホッテントット人が、その白人は、あなたと同じやうな眼をして、黑い鬚を生やしてゐたと言つてゐました。それに、その人は、從者の名はジムと言つて、ベクアナの獵師で、着物を着てゐたと言つてゐました。」

「ぢやまちがひつこはない」と私は言つた。「わしはジムはよく知つてるから。」

サー・ヘンリイは點頭いて言つた。「それにちがひない。ジョオジは一旦かうと決めたら何でもやる男だつた。子供の時分からいつもさうだつた。スリマン山を越えたいと思つたら、途中で何か故障が起らん限りは、越したに違ひない。だから吾々は山の彼方まで行つて弟を探さなくちやならん。」

ウンボバは、英語の話はあまりできなかつたが、英語を聞くことはできた。

「遠い旅ですよ」と彼は口を挾んだ。

「さうだ」とサー・ヘンリイは答へた。「遠いには遠いが、人間がやらうと思つてやれない旅はない。人間にできないつてことはないよ、ウンボバ。人間に登れない山つてないよ。越せない沙漠つてないよ。愛に導かれて、命をすてゝかゝれば、何だつて人間にできないことはない。」

私はそれを通譯した。

「えらい」とウンボバは答へた。「あなたの口によく似合つた言葉です。あなたの仰言る通りですよ。命なんて何物です？　命なんて羽毛のやうなものぢやありませんか。風のまに〳〵吹きとばされる草の實のやうなものです。どうせ人間は一度は死なゝくちやなりません。まかりまちがつたつて、少しばかり早く死ぬといふだけです。私は、途中でへたばつてしまふまでは、沙漠をこえて山の向うまであなたについて行きます。」

彼はしばらく言葉をきつたが、それからズル人に特有の雄辯を揮つて滔々と語り出した。その話には隨分無駄な反覆もあつたが、この民族にも詩的本能と、智力とが無いではないといふことを示してゐた。

「命とは何です？　物識りで、世界の祕密も、星の世界も、星の向うにある世界も知つてゐなさる白人の方々、敎へて下さい。生命の祕密を敎へて下さい。生命といふものは何處から來て何處へ行くのです？

「あなた方には返事ができませんね。あなた方は御存じないのです。聽きなさい。私が答へませう。吾々は闇の中から來て闇の中へ行くのです。夜、嵐に吹かれて飛んで來た鳥のやうに、吾々はどこからともなく飛んで來たのです。そして、しばらくの間吾々の翼は火の光りで見えますが、またどこへともなく飛び去つてしまふのです。生命は何でもないものであり、また凡てゞあるのです。それは吾吾が死を追ひ拂ふための手です。夜光つて朝になると黑くなる螢です。冬、牛の吐く息です。草の上を徊つて日が沈むと消えてしまふ影です。」

「お前は妙な男だね」とサー・ヘンリイは彼が言葉をやめるのをまつて言つた。

ウンボバは笑つた。「吾々はみんな同じですよ。ことによると私もあの山のむかうで兄弟を見つけるかも知れません。」

私は怪訝さうに彼を見ながら訊ねた。「何だつて、でもお前はあの山のことを知つてるのかい？」

「少しばかり、ほんの少しばかりですよ。あそこには妙な國がありますよ。美しい國で、魔法使ひがゐます。あそこに棲んでる人間は勇ましい人間で、樹や、河や、雪の峰や、大きな白い道などがあります。私は聞いて知つてゐるのです。だがそんなことを申し上げたつて何にもなりません。もう暗くなりました。行つて見ればわかることですよ。」

あまり色々なことを知つてゐるので私はまた疑はしさうに彼を見た。

「心配なさらなくてもよいのですよマクマザンさん」と彼は私の眼つきを讀んで言つた。「私は決して

瞞すやうなことはしません。深い譯があつて申し上げないのぢやないのです。あの日の沈む山を越したら知つてることはみんな申し上げますよ。だがあの山には死に神が坐つてゐます。今の中にあきらめてお歸りになつた方がためですよ。歸つて象狩りでもなさつた方がよいですよ、ねえ旦那がた。」

かう言つたかと思ふと、彼は槍をもちあげて會釋をして、天幕の方へ歸り、外のケーファー人と同じやうに銃の掃除をしてゐた。

「妙な奴ですな」とサー・ヘンリイは言つた。

「實に妙な奴です」と私は答へた。「何かを知つてるくせに話さないんですよ。しかしどうせ奇怪な旅なのですから、強ひてきいて見たつて大したことはありますまいけれど。」

その翌日吾々は出發の用意をとゝのへた。重い象狩り用の鐵砲や、その他の道具をもつて行くことはとてもできないので、吾々は人足を解雇して、近くに家をもつてゐる十人の老人に、歸つて來るまで、荷物の保管をたのんだ。併し、こんな重寶な道具を、泥坊も同じ蠻人にまかしておいては危險だと思つたので、それに對する手配りを十分しておいた。

先づ第一に銃器にはすつかり彈丸をこめて、ちよつとでもさはつたら彈丸が飛びだすぞと脅威した。そしてこの老人に實驗をして見せた。すると彈丸は、その時小屋の方へ走つてゐた牛に命中して、その牛はその場にひつくり反つて死んでしまつた。これでこの老人はすつかり怖氣をふるつたので、もうそれに手を觸れる氣遣ひはなかつた。

それから、私は、若し歸つて來たときに何か一つでも失くなつてゐたら、魔法にかけて皆んな殺してやるし、吾々が死んでも、祟つて、彼等の牛を氣狂ひにし、牛乳を酸つぱくしてやると脅したので、この老人は吾々の品物を、先祖の靈のやうに大事にして預つておくと誓つた。この老人はひどく惡い奴だつたが、又大の迷信家でもあつたのだ。

これで、老人の方は片附いたので、吾々五人、サー・ヘンリイとグッドと私とウンボバとホッテントット人のフェントフォーゲルとは、旅にもつてゆく荷物の整理をした。荷物といふのは、エキスプレス銃三挺と彈藥各二百發、ウムボバとフェントフォーゲルとのためのウインチエスター連發銃二挺と彈藥各二百發、コルト短銃三挺と彈藥各六十發、一升三合ばかり這入る水筒五つ、乾肉二十五封度、一オンスのキニーネ及び其他の藥品と簡單な外科用の道具、小刀、磁石、マッチ、煙草、鏡、珠數玉、ブランデー一瓶、着替へ等であつた。

こんな大冒險に向ふにしては、あまり荷物が少ないやうだが、何しろ、燒けるやうな沙漠を歩くのだから、これ以上の荷物は持てなかつたのだ。

吾々は三人の士人に、上等のナイフを一挺づつやるからと言つて、はじめの二十哩ばかり、一ガロン程水を入れた瓢簞をもつて送つてくるやうに說き伏せた。一晩歩いてから水筒の水を詰め代へようと思つたのだ。士人等は、吾々を狂人だと言つた。そして咽喉が渴いて死ぬにきまつてゐると言つたが、やがて、他人の生命なんかどうならうと、それよりも自分が立派な小刀が欲しさにやつと承知

した。

その翌日は吾々は一日休養して眠り、夕方に新鮮な牛肉を腹一ぱい詰めこみ、茶を飲んで、最後の支度をして月の出るのを待つた。たうとう九時頃になると皓々たる月が上つて、荒涼たる沙漠を照した。吾々は起ちあがつたが、愈々出かけるとなると一寸躊躇した。のつぴきならぬ旅に向つて足を踏み出すときに何となく足がでしぶるのは人間の本性だ。吾々三人の白人は一團になつて立つてゐた。ウムボバは槍を手に持ち、銃を肩にかついで、吾々の五六歩先きに立つて沙漠をぢつと凝視めてゐた。瓢簞を持つた士人等とフェントフォーゲルとは、少し後にかたまつてゐた。

「諸君」とや、あつてサー・ヘンリイはどつしりした聲で言つた。「吾々三人はこれから人間業ではとても企てられないやうな旅に向ふのですが、うまく成功するかどうかは甚だ疑問です。併し三人は良きにまれ惡しきにまれ最後まで運命をともにするのですから、出かける前に、吾々の運命を司る神の加護を祈りませう。」

彼は帽子を脫いで、一分間かそこらの間、兩手で顏をおほうた。グッドと私とはそれにならつた。吾々の未來の運命は今全くわからないのだ。わからない事の前にたつと、吾々の心に信仰が起つて來るものだ。私は一生のうちでたゞ一度だけをのぞくと、この時位心から神に祈つたことはなかつた。そして祈つたためにどうやら幸福になつたやうな氣がした。

「さあ行かう」といふサー・ヘンリイの言葉とともに吾々は出發した。

吾々の道しるべとなるものといつては、遠くの方に聳えてゐる山と、ジョゼ・ダ・シルヴエストラの地圖とだけであつた。この地圖も、瀕死の、半ば氣の狂つた男が三百年も前に麻布の切れつぱしに書いたものだから、あまりあてにできるものぢやなかつたが、この場合吾々の成功の希望はたゞこの地圖だけにつながつてゐたのである。この地圖には沙漠の恰度中央に、卽ち吾々の出發點からも山からもそれ〴〵六十哩の地點に惡い水の池があると注意してあるが、それが見つからなかつた日には、吾々は渴のために、みじめな往生を遂げることになるにきまつてゐる。それに考へて見れば、こんな茫漠たる沙漠の中で、その池を見つけるなんてことは實に心細いのぞみであつた。たとひダ・シルヴエストラの地圖に間違ひがないにしても、三百年もたつた今日、日光に照りつけられて池は乾いてゐるかも知れぬし、獸に踏まれたり、砂が吹き寄せたりして埋まつてゐるかも知れたものではない。

吾々は影のやうに默つて、重い砂を踏みながら夜道を歩いて行つた。カローといふ灌木が足にからまつて歩みがおくれる上に、靴の中へ砂がはひるので、二三哩行つては、足を停めて砂を出さねばならなかつた。けれども幸ひに夜は相當涼しかつたので、かなりの道程を進んだ。沙漠といふものは實に淋しいものだ。實際氣が滅入つてしまふやうだ。グッドは淋しくてしようがないもんだから、一度「あとにのこした娘子は」の唄を歌ひ出したが、こんな廣々としたところで歌ふと妙に物悲しく響くのでやめてしまつた。

しばらくすると、ちよつとした出來事が起つて吾々を笑はせた。とは言へ、その時は非常に吃驚し

たのである。グッドは海軍にゐたので磁石の見方はよく心得てゐるので、一番先頭にたつて進んでゆき、吾々はそのあとから一列縱隊になつて進んでゐたのだが、突然けたゝましい叫び聲が聞えたかと思ふとグッドの姿が見えなくなつてしまつた。次の瞬間に、あたり一面に、ぎやあ〳〵いふ聲やきやつきやついふ聲と、あわたゞしく砂の上を走りまはる跫音が聞え、かすかな月明りで、半ば砂原に隱れながら飛びまはつてゐる物の影が見えた。土人等は荷物を投げ出して駈け出さうとしたが、何處へも逃げ出すところがないのに氣がつくと、地べたに身を投げて、惡魔だ惡魔だと呪ひの聲をあげてゐた。サー・ヘンリイと私とは呆氣にとられて茫然として立つてゐたが、驚いたのはそればかりではなく、グッドが馬に乘つて走つてゞもゐるやうに、山の方へ向つて一目散に駈けてゆくのだ。忽ち彼は兩腕を宙に上げて、どさりと下に倒れたのが聞えた。

それで私はすつかり樣子がわかつた。吾々はちやうど斑驢の群の眠つてゐるところへ通りかゝつて、グッドがそのうちの一匹の上へ倒れたのだ。するとこの獸は吃驚して起き上つて、彼を脊にのせたまゝ、駈け出したのだ。私は何でもないのだと皆の者に大聲で言ひながら怪我でもしはしないかと思つてグッドの方へかけつけた。しかし彼は、砂の上にすわつて、ちやんと眼鏡もかけてゐり、ひどく慄へて驚いてはゐたが、少しも怪我はしてゐなかつたのでほつとした。

その後は何も變つたこともなく、吾々は一時頃まで旅をつゞけた。それから吾々は足を停めて少しばかり水を呑み、半時間程休んでからまた出發した。

ずん〳〵進んでゆくうちに、東の空が小娘の頰べたのやうに赧らんで來た。それから微かな櫻色の光が射しこみ、やがてこの光は金色の矢になつて、沙漠一面に夜が明け渡つた。星は瞬一瞬とうすれていつて遂には消えてしまひ、月影も次第にうすれて、朝日の光は、あたりにたちこめてゐる靄を拂ひ、夜は全く明けはなれた。

吾々はやすみたくてしようがなかつたけれど、日が高く昇つたが最後、もう歩くことはできないのを知つてゐたので、まだ歩みを停めなかつた。たうとう、それから一時間もたつてから、砂つ原の中に石がもち上つてゐるのを見つけたので、吾々はそのそばまで足を曳きずつて行つた。幸ひにもそこは岩が上へかぶさつてゐて、下は滑かな砂地だつたので、大陽の熱をよけるにはもつてこいの場所だつた。吾々はその下へ匍つて行つて、みんな少しばかりの水を呑み乾肉を食べて横になつたかと思ふとぐつすり眠つてしまつた。

吾々が眼を醒ましたときはもう三時過ぎで、人足どもは既に歸り支度をしてゐた。彼等は沙漠のことはよく知つてゐたので、それから先はいくら小刀をやつたつて一歩も行く氣遣ひはなかつた。そこで吾々は腹一杯水を飲んで水筒を空にしてしまひ、人足どもが持つて來た瓢簞の水をそれに詰めなほし、彼等が二十哩の道を引き返してゆくのを見送つた。

四時半になると吾々も出發した。實にそれは荒涼たる旅で、僅かばかり駝鳥がゐたのを除くと生き物の影も見えなかつた。明かに鳥や獸の住むにはあまりに土地が乾燥し過ぎてゐるのだ。無氣味な恰

好をしたコブラを一二匹見た外には爬蟲類も見られなかつた。しかし昆蟲はたゞ一種類だけだつたけれども非常に澤山ゐた。それは普通の蠅だつた。蠅は、舊約聖書のどこかに書いてあつたやうに「ただの斥候としてゞはなく大隊をつくつて」やつて來た。實に蠅といふ動物は驚くべき動物だ。どこへ行つても蠅のゐない處はない。太古の昔からさうであつたに相違ない。私は、五十萬年も昔にできたと言はれてゐる琥珀の中に蠅が閉ぢこめられてゐるのを見たことがあるが、それはまぎれもなく今日の蠅の先祖に相違なかつた。最後の人間がこの地上で息をひきとるときにも、若しそれが夏であるならば、此の蠅のやつはその屍體のまはりにぶん〳〵つきまとうてゐるに相違ない。

日沒に吾々は足を停めて月の出るのをまつた。たうとう、美くしく澄み渡つた月が出たので吾々はまた歩き出して、朝の二時頃に一度休んだゞけで、夜が明けるまでずつと歩きどほした。太陽が昇つて來ると吾々は少しばかり水を飲んで横になつて眠つた。こんな見渡す限りの沙漠の中では、どんな敵の襲撃も恐れなくてもよかつたので、見張りを置く必要はなかつた。吾々の唯一の敵は、熱さと、咽喉の渴きと蠅とだけであつた。しかし、どんな恐ろしい人間でも獸でも、この三つの敵よりはましだと私は思つた。こん度は前日のやうに、日をよける場所がなかつたので、吾々は身體のしんまでも燒かれるやうな氣がした。燒けるやうな太陽は、吾々の身體から血までも吸ひ取るやうに思はれた。吾々は起きなほつて喘いだ。

「畜生つ」と言つて私は身體のまはりに集かつて來る蠅をひつつかんだ。蠅の奴は暑さなどは屁とも

思つてゐないらしい。
「暑いな！」とサー・ヘンリイは言つた。
「まつたく暑い！」とグッドは言つた。
實際暑かつた。それに日をよけるものは何一つないのだ。あたりを見まはしても、岩一つなければ樹一本生えてゐない。たゞもう果しのない燒け砂原で、砂の上には、赤熱したストーヴの上に乘つたやうに暑いいきれがたつてゐて、眼がまひさうだつた。
「どうしたらいゝだらう？」とサー・ヘンリイは訊ねた。「こんな風ぢや迚も長くは耐へられないが。」
吾々はだまつて互に顏を見合した。
「いゝことがある」とグッドが言つた。「穴を掘つてその中へ入つて上からカローの枝をかけよう。」
大したうまい考へでもなささうであつたが、それでも何もしないよりはましなので、吾々は、もつてきた鍬と手とでせつせと砂を掘りはじめ、かれこれ一時間もかゝつて長さ十「呎」、幅十二「呎」、深さ二「呎」ばかりの穴を掘り、獵刀でカローの枝を切つて來て、穴の中へはひつて上からそれをかぶせた。フェントフォーゲルだけは、ホッテントット人で、暑さは大して苦にならないので穴の外に寢てゐた。これで幾らか日よけにはなつたものゝ、とてもそれ位のことで辛抱できるものではなかつた。吾々は喘ぎながらその中に横になつて、時々乏しい水で脣を濡らしてゐた。飲みたいだけ飲んだ日には吾々のもつて來た水は二時間ももたなかつたゞらうが、吾々は水がなくなつたらすぐにみじめな

最期をとげにやならんことを知つてゐたので、非常に用心して飲んだのだつた。
だが何事にも終りといふことがある。ぢつとしてゐたとて晩までは水はもたない。こんな穴の中で暑さと渴とのためにぢり〳〵死んでしまふよりは、一思ひに歩いて斃れた方がましだと思つて、吾々は少しばかり殘つた水をもつて、午後三時頃に、よろ〳〵と歩きはじめた。水はもう吾々の血と同じ位の溫度になつてゐるのだ。
吾々はこれまでにかれこれ五十哩ばかり歩いて來たのだが、ダシルヴェストラの地圖で見ると沙漠の直徑は四十英里あることになつてゐる。そしてその中央に惡い水の池があるわけだ。ところで四十英里といへば百二十哩だから若し、ほんたうにそんな池があるとすれば、吾々はその池から十二哩か十五哩ばかりの處までどうにか辿りついたわけだ。
午後は吾々の歩みは一層のろくなつて、一時間に一哩半がせい〳〵だつた。日沒になるとまたやすんで、少し水を飲んで、月の出るまでしばらく眠つた。
吾々が横になる前に、ウンボバは、八哩ばかり先の沙漠の上に、かすかな、蟻の巢のやうな丘があるのを吾々に指した。私はそれは何だらうとあやしみながらうと〳〵眠つてしまつた。
月がのぼるのを待つて吾々はまた歩き出した。暑さと渴とのために五臟はへと〳〵に疲れてゐた。この苦しみは經驗のない者にはとてもわかりつこはない。吾々は歩くのではなくてよろめいてゐるのだ。時々疲れのためにばつたり倒れることがある。一時間毎に休まねば足はつゞかないのだ。吾々は

もう物を言ふ元氣もなかつた。グッドは快活な人間なので、それまではよく饒舌つたり、冗戯を言つたりしてゐたが、もう冗戯どころではなかつた。

たうとう二時頃に、身も心もへと〳〵になつて、吾々はやつとのことで妙な丘の麓まで辿りついた。それはちよつと見ると高さ百呎ばかりの大きな蟻の巣のやうな形をしてゐた。

そこで吾々は足を停めて、もう矢も楯もたまらなかつたので、最後の水を飲み干してしまつた。めいめい一ガロン位の水は飲みたかつたのだが、その時吾々に殘つてゐた水は、一人あたり半パイント位しかなかつた。

それから吾々は横になつた。私がうと〳〵眠りかけようとしてゐると、ウンボバがズル語で獨言を言つてゐるのが聞えた。

「水が見つからなかつた日にや、明日の月が出るまでにみんなお陀佛だ。」

私はこんなに暑いのに拘らず胴慄ひがした。そんな恐ろしい死が間近に迫つてゐることを考へるとあまり愉快な氣はしないものだ。しかし、それ程恐ろしいことを考へながらも、あまりに疲れがひどかつたので私はたうとう眠つてしまつた。

第六章　水だ！　水だ！

それから二時間たつて、即ち四時頃に、私は眼を醒した。身體の疲れがやつとをさまると、ひど

く渇をおぼえて來て、もう眠れなかつたのである。私は岸に綠の草が生えてをり、その上には青々と樹の葉が茂つた小川で水を浴びてゐる夢を見てゐたのだが、覺めて見るとやけつく沙漠の中に身を横へてゐたのだ。しかもウンボバが言つたやうに、今日中に水が見つからねば吾々はみじめな最期をとげるのだ。どんな人間だつて、此のやうな暑さに水無しで生きてゐるわけにはゆかぬ。私は坐り直つて、かさ〳〵になつた角のやうな手で顏をこすつた。脣も瞼もかたくくつついてゐたので、少し擦つてから努力しなければ開かなかつたのだ。もう夜明けに間もなかつたのだが、夜明けらしいすがすがしい氣持は少しもなかつた。空氣は濃厚で何とも言へず重苦しかつた。他の者はまだ眠つてゐた。やがて東が白んで少し明るくなつたので、私は、もつて來た「インゴールズバイ・レジエンド」のポケット版を出して「ランスのジャリクドオ」を讀みはじめた。

「美はしき少年は浮彫せる黃金の水瓶をもてり、水瓶には、ランスとナミユールとの間を流る
る如何なる水にもまして清らかなる水なみ〳〵と滿てり」

この節を讀んだとき、私はひからびた脣で文字通り舌なめずりした。といふよりもしようと思つたと言つた方があたつてゐるかも知れぬ。舌などはさう自由に動かなかつたからだ。この清らかな水の事を考へたゞけでも私は氣が狂ひさうになつた。たとひそこに大僧正が、鐘と、書物と、蠟燭とをもつて立つてゐても、私はそこへ走つて行つてその水を飲み干したゞらう。さうだ、たとひ大僧正が、羅馬法王の手を洗ふために、その水に石鹼水を入れてしまつたあとでも、かまはずやつてのけただら

う。全カトリック教會の呪ひを一身に集めたつて敢へて意としなかつたであらう。私はどうも少々氣が變になつたに相違ないと思つた。といふのは、私は、その時、日にやけた、鳶色の眼をした、胡麻鹽頭の獵師がその場へはひつていつて、汚い顏を聖水盤にあて、中の水をがぶ〳〵飲んだら、僧正や、少年やジャックドオはどんなに驚くだらうと想像して、思はず乾いた唇でひい〳〵笑つたものだ。すると皆の者は眼をさまして、汚い顏をこすつて、くつついた唇と瞼とを開けた。

みんなが眼を醒ますと、吾々は額をあつめて善後策を凝議した。水はもう一滴も殘つてゐなかつた。吾々は水筒を逆しまにしてその口を舐めてみたが、それはまるで骨のやうにから〳〵に乾いてゐた。ブランデーの瓶をもつてゐたグッドが、それをとり出して飲みたさうにしてゐたが、サー・ヘンリイはすぐにそれをとり上げた。それは酒などを飲めば、益々渴をはげしくする一方だからだ。

「水がなければ死ぬばかりだ」と彼は言つた。

「シルヴエストラの地圖があてになるとすりや、この近所にどつか水があるわけだがなあ」と私は言つた。けれども、誰もそれには大して期待をおかぬらしかつた。地圖があまりあてにならぬことは明かだつた。するとその時、ホッテントット人のフエントフオーゲルが起ち上つて、地上を凝視めながら歩きはじめたかと思ふとすぐに立ち停まつて、地上を指さしながら、妙な聲で叫んだ。

「どうしたんだ？」と言ひながら、吾々は一度に起ち上つて彼が立つて地べたをみつめてゐる處まで進み寄つた。

「こりや、羚羊の足跡ぢやないか、これがどうしたんだ？」と私は言つた。

「羚羊は水のそばをあまりはなれんものですよ」と彼は和蘭語で答へた。

「さう〳〵、忘れてゐた。これは有難い」と私は答へた。

このちよつとした發見のために吾々は急に元氣づいた。人間が絕望のどん底に落ちると、ちよつとした希望にでもすがつて、幸福を感ずるものだ。暗い夜にはたつた一つの星だつてないよりはましなものだ。

フエントフオーゲルは獅子つ鼻を上げて、暑い空氣をしきりに嗅ぎまはしてゐたが、やがて「水の香ひがする」と言ひ出した。

吾々はこれを聞いてひどく喜んだ。といふのは、かうした野蠻人は實に驚くべき本能をもつてゐることを知つてゐたからだ。

ちやうどその時に旭日が昇つて、素晴らしく雄大な光景を吾々の眼前に現出した。吾々はしばしの間は渴も忘れてそれに見惚れた位であつた。

吾々から四五十哩離れた前方には、朝日の光を浴びてシバの乳房が銀色に光つてゐた。そして西方へそれ〳〵數百哩の裾野をひいてスリマン山がそびえてゐた。その時の吾々の感じは到底筆紙につくしがたい。思ひ出しただけでもたゞ恍惚として感歎するよりほかはないのである。吾々の前に屹立してゐる二つの俊峰はそれ〳〵少くも一萬五千呎はあるだらう。その間の距離は十二哩程で、兩者は

岩の絶壁でつながれ、その峰には白雪を戴いてゐるのだ。この巨大な關門のやうにそびえてゐる山は女の乳房そつくりで、時々その中腹に靄がかゝると、恰度女が薄紗をまとうて眠つてゐるやうな形になる。麓の方は、平地からゆるやかに圓味を帶びてふくれ上り、山頂の雪に覆はれた部分はちやうど乳房の乳頭のやうに見えた。

吾々が感歎してシバの乳房を見てゐるうちに、いつしか山の姿はうすい雲に包まれて消えてしまつた。それと同時に、猛烈な勢ひで、渴が吾々を襲うて來た。

フエントフォーゲルが水の匂ひがすると言つたのはよかつたが、さて何處を探しまはつても水のありさうな處は見つからなかつた。見渡す限り茫漠たる砂原で、カローといふ灌木が砂の上に匍つてゐるばかりだ。吾々は砂丘のまはりを歩きまはつて、その反對側の方へ行つて見たが、矢張り同じで、一滴の水も見られなかつた。況んや池などのありさうな氣配もなかつた。

「馬鹿、水なんかないぢやないか」と私はぷり〳〵しながらフエントフォーゲルに言つた。

だが彼はまだ醜い獅子つ鼻をひく〳〵させて嗅いでゐた。

「矢つ張りしますよ、どつかこの空氣の中から水の匂ひがしてきますよ。」

「そりや雲の中にや水があるだらうさ。二ケ月もたてば下界へ降つて來て吾々の骨を洗ふやうになるだらう。」

サー・ヘンリイは黃色い鬚を撫でながら考へ深い調子で言つた。

「ことによると砂丘の上に水があるのかも知れん。」

「冗戯でせう」とグッドは言つた。「丘の上に水があるなんて聞いたこともありませんよ。」

「兎に角行つて見ませう」と私は口を出した。そしてウンボバを先に立てゝ、あまり大した望みも抱かずに、えつちらおつちら丘を登つて行つた。するとウンボバは急に化石したやうに立ち停つて大きな聲で叫んだ。

「水がある、水がある！」

吾々は、彼のゐるところまで駈けつけた。實際、丘の頂きの深い凹みの中にまぎれもない水がたまつてゐた。吾々はどうしてこんな處へ水がたまつたのだらうなんてことは少しも怪しまなかつた。それにどす黑い水を見ても少しも躊躇しなかつた。それは成る程水にはちがひないが、水といふよりも水に似たものと言つた方がよかつたかも知れぬ。しかし吾々にはそれで澤山だつた。吾々は跳んで池のそばへ行つて、腹這ひになつて、この汚い水をまるで神々の飲む甘露か何ぞのやうに飲んだ。飲んだも飲んだも、大變飲んだ。それから鰐ふく飲んでしまふと、着物を脫いで、池の中に坐つて、干乾びた皮膚を水でしめした。

しばらくすると吾々はせい〳〵した氣持ちになつて起ち上つて、腹一ぱい乾肉をばくついた。この二十四時間といふもの、吾々は乾肉には一口だつて手をつける氣にもならなかつたのである。それから吾々は煙草をふかして、水のそばに横はり、正午ごろまで眠つた。

その日は吾々は一日ぢう水のそばで暮して、水の見つかつた幸運を感謝しあつた。わるい水ではあつたが、そのありかを、かくも正確に着物の切れつぱしに記しておいてくれたダ・シルヴェストラの靈に感謝することもわすれなかつた。それにしても不思議なのは、この池が、三百年も前からよくも涸れずにゐたといふことであつた。きつとこれは深い泉から湧いて來たものにちがひないと私は思つた。

腹にも飲めるだけの水を詰めこみ、水筒にもはひるだけの水を入れて、吾々は月の出をまつて、非常に元氣よく出發した。その夜は吾々は二十五哩も歩いた。言ふまでもないことだが、水はそれつきり見つからなかつたが、幸ひにも翌くる日は、蟻塚のうしろでちよつとした日蔭が見つかつた。朝日が昇つて、靄が晴れわたると、二つの乳房をもつたスリマン山が、今度は二十哩彼方に、まるで吾々の頭の上へのしかゝつてゐるやうに聳えてゐるのが見えた。夕方になるのを待つて吾々は再び出發した。そしてつゞめて言へば、翌朝日が昇るまでに、吾々はシバの左の乳房の麓まで着いたのだ。その時までには、また水がなくなつたので、吾々はひどく渴のために苦しんだが、ずつと上の雪線までは渴を癒すべきすべもなかつた。一二時間麓で休んでから、吾々は、渴の苦しさと戰ひながら、燒けつくやうな炎天の下を、熔岩の坂道に沿うてあへぎ〳〵攀ぢ登つた。

十一時頃になると、吾々はもうぐた〳〵に疲れてしまつた。こゝの熔岩はアセンション島の熔岩などに比べると幾らか滑らかではあつたが、それでもでこぼこの熔岩の灰滓の上を歩いて行くと足が痛

む。それにひどい渴に苦しめられてゐるので吾々は、すつかり、へこたれてしまつた。だが數百碼上の方に大きな熔岩の塊りがあつたので、その日蔭で休まうと思つて、一生懸命にそこまで匍ひ上つた。すると驚いたことには——驚くだけの力がのこつてゐたのも不思議な位だが——すぐそばの小さい丘の灰滓の上に綠草が生ひ茂つてゐた。きつとそこは滓岩が分解して土になり、鳥が草の實をそこまで運んで來たのであらう。併し、この綠草に對する吾々の興味はそれつきりであつた。といふのは、吾々は、ネブカドネザルのやうに草を食つて生きてゆくわけにはゆかないからである。そこで吾吾は岩蔭に坐つて苦しさうにうん〳〵呻つてゐた。飛んでもない旅へ出て來たのを私は後悔した。するとその時、ウンボバが起ち上つて、草の生えてゐる處まで跳んで行つた。しかも驚いたことには、平素からおとなしいこの男が、何か青いものを振りまはして、狂人のやうに踊りながら大聲で叫び出した。水が見つかつたのではないかと思つて、吾々は疲れた足で、できるだけ速く彼の方へ走つて行つた。

「どうした、ウンボバ？」と私はズル語で叫んだ。

「水と食物とが見つかりましたよ。マクマザンさん」かう言ひながら彼はまた青い物を振り廻した。よく見ると、彼が振り廻してゐたのはメロンであつた。吾々は野生のメロン畑へとびこんだのだ。何千とないメロンが、しかもよく熟れて生つてゐるのだ。

「メロンだ！」と私はすぐ後から來たグッドにわめいた。忽ち彼の義齒は一つのメロンにかぶりつい

てゐた。

吾々はめい〳〵六つ宛位食べたやうに思ふ。この際、これくらゐ有り難いものを私は想像もできなかつた。

しかしメロンは大して腹の足しにはならぬ。吾々は渇を癒すことができると、今度はひどい空腹を感じて來た。乾肉はもう飽きて嫌になつてもゐたし、それに、これから先食物が見つかるかどうかわからないので、節約しなければならぬ。ちやうどその時、幸運にも、十羽程の大きな鳥が群をなして沙漠の方から吾々の方へ飛んで來た。

「旦那、射ちなさい！」とホッテントット人は地べたに顔を伏せながら低聲で言つた。吾々も彼のする通りにした。

その鳥は鵜で、吾々のゐるところから五十碼位の高さを飛んでゐるのであつた。私はウインチェスター連發銃をもつて、鳥が吾々のほゞ眞上を通り過ぎるのを待つてすつくと起ち上つた。鳥は私の姿を見ると、吾れ先きにと上の方へ舞ひ上つたが、その刹那に私はつゞけざまに二發ぶつぱなした。幸に一羽だけ死んで落ちて來た。二百封度もある素的なのだつた。それから半時間もかゝつて吾々はメロンの枯れた蔓で火を焚き、獲物を燒いて一週間ぶりで御馳走にありついた。吾々は脚の骨と嘴とのほかは何一つのこさずべろりと平げてしまつた。

その夜吾々はできるだけメロンをもつて、月の出るのをまつてこゝを出發した。上へ登るにつれて

涼しくなるので非常に助かつた。そして夜明けまでには雪線から六哩ばかりの距離まで着いたらしい。そこではまたメロンが見つかつた。もうすぐに雪線だから、渇に苦しむ心配はなくなつたが、そのかはり、今度は登り道が非常に急になつて來て、道が中々捗取らなかつた。一時間に一哩がやつとだつた。おまけにその晩に最後の乾肉を食つてしまつたのに、鵜の外には何一つ生き物は見つからなかつた。それに、妙なことには、すぐ上には雪があり、雪は解けることもあらうに、河も泉も何もなかつた。後でわかつたことだが、水は皆山の北側へ流れてゐるのだつた。

吾々はだん〳〵空腹を感じて來た。渇の爲めに死ぬことは免れたが、こん度は餓死が心配になつて來た。それから三日間のことは、その當時私が手帳に書きとめておいた記錄を見ればよくわかる。

「五月二十一日——午前十一時に若干のウォーターメロンをもつて出發、空氣が冷くなつて來たので日中でも歩けるやうになつた。一日中歩いたがもはやメロンは見つからなかつた。メロンの育つ地帶を通り過ぎたらしい。鳥獸の姿は少しも見えず。長く食物をとらないので夕方やすむ。夜は寒さのために苦しむ。

二十二日——夜明けをまつて出發する。身心困憊甚だし。終日かゝつて漸く五哩を進む。ところどころに雪があつたのでそれを食つた外には何も食はず。大きな丘の下に夜營をする。寒さ甚し。みな少量のブランデーを飲む。毛布をかぶつて、皆一緒に寄りそうて凍死を防ぐ。

饑餓と疲勞甚だしく、夜のうちにフェントフォーゲルは死んだのではないかと思ふ。

二十三日――日が昇るとともに再び登り始める。手足少しく霜やけす。疲勞困憊極度に達し、今日中に食物が見つからねば、もうおしまひだと思ふ。ブランデーも殘り少量になる。グッドとサー・ヘンリイとウンボバとは元氣なれと、フェントフォーゲルは非常に弱つてゐる。多くのホッテントット人同樣彼は寒さに堪へることができないのである。餓ゑの苦しみは大して痛くはないが、胃のあたりが痺れたやうな氣がする。皆さう言つてゐた。吾々は今や二つの乳房を聯繫してゐる熔岩の絶壁と同じ水準面に達した。實に素晴しい景色だ。後には沙漠が地平線までうね〳〵としてつゞいてゐる。前は何哩も何哩も、固い滑かな、殆んど平坦な雪で、上に昇るにつれて、むつくりと脹れて、その中央から周圍數哩もありさうな乳頭が約四千呎も雪表に聳えてゐる。生き物は何一つ見えない。もう吾々の最期が來たのぢやないかと思ふ。」

これでもう日記の拔萃はやめる。それは讀んで面白くもないし、且つ又次の出來事はもつと詳しく說明しなければならんからだ。

その日――五月二十三日――は一日ぢゆう吾々は雪の坂道を、度々やすみながら、のろ〳〵と登つて行つた。ひもじさうな眼と眼を見かはしながら、疲れた足を曳きずつて、茫漠たる雪の原を歩いてゆく吾々の恰好ときたら實に見物であつたらうと思ふ。だが、そんなに四邊をきよろ〳〵見廻したつてなんにもなりはしないのだ。食物などはとても見つかりつこはなかつたのだから。その日は吾々は七哩足らずしか歩けなかつた。かつきり日沒までに、吾々は、ちやうどシバの左の乳頭の眞下まで

來た。

「もうかれこれシルヴェストラとかいふ人の書いてゐた洞窟の近くまで來てゐさうなもんだなあ」とグッドが喘ぎながら言つた。

「さうですな、そんな洞窟がほんたうにあればねえ」と私は言つた。

「そんな言ひかたをするもんぢやありませんよ、コオターメンさん」とサー・ヘンリイは太い聲で言つた。「あの人の書いてゐることは全くたしかですよ、水のことでわかるぢやありませんか！　洞窟はきつともうすぐですよ。」

「暗くなるまでに見つからなかつたら、吾々はまづ此の世のもんぢやありませんね」と私は答へた。

ウンボバは、毛布にくるまつて、さうすれば腹の空りかたが少いといつて、革帶でかたく腹のまはりをしめて、まるで娘つ子のやうな腰をして吾々のそばを歩いてゐたが、この時突然私の腕をつかまへて「御覽なさい」と言ひながら上の方を指さした。

彼の見てゐる方を見ると、二百碼ばかり先に、雪の中に穴のやうなものがあるのが見えた。

「あれが洞窟ですよ」とウンボバは言つた。

吾々は急いでそこまで辿りついた。たしかにそれは洞窟の入口に相違なかつた。きつとシルヴェストラが書いてゐた洞窟に相違ない。吾々はやつと間にあつたのであつた。といふのは、大陽はそれからすぐに沈んで、沈んだかと思ふとすぐに暗くなつたからである。この地方では黃昏時といふものが

非常に短いのだ。吾々は洞窟の中へ這入つた。それはあまり大きいものではないらしかつた。吾々は暖をとるために、互に身體をくつつけて、殘りのブランデー――と言つてもほんの一口づつしかなかつたが――を飲んで、早く眠つて、今のみじめさを忘れようとした。が、寒さがあまりひどいので中中眠れなかつた。私の考へでは、氣溫は零下十四五度位だつたと思ふ。身體はへと〳〵に疲れてをり、ひどく饑ゑてゐる上に、沙漠の熱氣に惱まされて來た吾々にとつて、この寒さがどれ程身に泌みたかは、私が書くより、讀者の想像にまかした方がたしかだらうと思ふ。吾々は互に身體をくつゝけて溫まらうとしたが、饑ゑた、かさ〳〵の身體を寄せてみたつてしようがなかつた。時々數分間とろとろと眠るものもあつたが、とても長くは眠つてゐられなかつた。しかしそれが結局幸ひだつたかも知れぬ。うつかり眠りなどしたら、それつきり醒めなかつたかも知れないと私は思ふ。吾々はたゞ意志の力だけで生きてゐたのだ。

一晩中、フェントフォーゲルは、しよつちゆう齒をがた〳〵いはせてゐたが、夜明け前にそれをやめてしまつて深い溜息をした。その時は、私は、彼が眠つたのであらうと思つて、何の氣もなしにゐたが、彼の背中はだん〳〵冷たくなつてゆき、たうとう氷のやうになつてしまつた。

そのうちに東が白んで來て、やがて太陽は熔岩の絕壁の上に昇り、吾々の半ば凍えた身體を照し、フェントフォーゲルの身體をも照した。彼は石のやうに固くなつて死んでしまつてゐた。背中が冷たくなつたのも無理でない。かはいさうな奴だ。彼は夜明け前に深い溜息をした時に死んだのだ。そして今では凍つて殆んど冷くなつてゐた。吾々はひどく魂消て、ぞつとして死體から身をひいた。吾々人間はどういふものか死骸と一緒にゐるのを恐れるものだ。

その時までに、冷い日光は――こゝでは日光も冷たかつた――眞直に洞窟の入口にさし込んでゐた。突然私は誰かゞ恐怖の叫聲をあげたのをきいて、そちらを振り向いた。

するとどうだらう。深さ二十呎もない洞窟のつき當りに、もう一人の人間が、頭をがくりと前へ垂れ、長い兩腕をだらりと下げてゐるではないか。よく見るとそれも死骸で、しかも白人なのだ。他の者もそれを見た。吾々のひどく惱まされた神經はもう、この物凄い光景を見るに堪へなかつたので、みんな、凍えた足のゆるす限り、大急ぎで洞窟からとび出した。

第七章　ソロモン街道

洞窟の外側で吾々は足を停めた。

「わしはもう一度引き返して來る」とサー・ヘンリイは言つた。

「何故？」とグッドがたづねた。

「ことによるとあれは弟の死骸ぢやないかと思ふので。」

そのことにはまだ吾々は氣がつかなかつたので、しらべて見るために後へ引き返した。明るい外の雪を見たあとなので、しばらくの間は薄暗い洞窟の中はよく見えなかつたが、やがて、眼が闇に馴れ

たので、吾々は死骸のそばへ進んで行つた。

サー・ヘンリイは膝を折つて死骸の顔をのぞきこんだ。

「有り難い」と彼は安堵の吐息を洩らしながら言つた。「弟ぢやなかつた。」

そこで、私もそばへ寄つて見た。死骸は、脊の高い中年の男の死骸で、顔つきは鷲のやうで、毛髮は胡麻鹽で、長い黑い鬚を生やしてゐた。皮膚は完全に黃色く、かたく骨の上に引きつつてゐた。着物といつては、羊毛の股引の遺物らしいものがのこつてゐるほかはすつかりなくなつて、骸骨のやうな身體は裸體であつた。すつかり凍つて硬くなつた死骸の首のまはりには黃色い象牙の十字架がぶら下つてゐた。

「誰の死骸だらう？」と私は言つた。

「見當がつきませんか？」とグッドが訊ねた。

私は首を振つた。

「ジョゼ・ダ・シルヴェストラの死骸にきまつてるぢやありませんか、勿論」

「そんな筈はない」と私は言つた。「あの男は三百年も前に死んだのですもの。」

「たとひ三千年前に死んだにしたつて、こんなところで、死骸がなくなつてしまふわけがあれば承りたいもんですな？」とグッドは訊ねた。「氣溫さへ低けりや人間の肉や血はニュウジーランドの羊のやうにいつまでだつて生まゝしてゐますよ。ところがこゝはこんなに寒いんですからな。日光はあ

たらないし、他の動物が來て死骸をつつきまはす氣遣ひもありませんよ。あの記錄に書いてあつた奴隷が着物を脫がしてもつて行つたのですよ。そして一人だつたものだから主人を埋葬することもできなかつたのです。ほら！」と言ひながら彼はそこへ屈んで、地べたにさゝつてゐた尖つた骨を拾ひ上げた。「これはシルヴェストラがペンの代りにして地圖を書いた骨の破片ですよ。」

吾々はしばらく自分のみじめな境涯を忘れて、呆氣にとられてそれを眺めた。

「さうだ」とサー・ヘンリイは言つた「そして、シルヴェストラは此處をインキの代り使つたのです」

「と言ひながら死骸の左の腕にある小さい傷の痕を指した。

もう疑ひの餘地はなかつた。こゝに坐つてゐる死骸こそ十代も前にあの記錄を書いて、その指圖に從つて吾々が此處へやつて來たその死骸にきまつてゐる。私はその時にこの男が使つた骨のペンを握つてゐるのだ。そして彼の首には、彼が臨終の脣で接吻をした十字架がぶら下つてゐるのだ。彼の姿を見てゐると、私は、この悲劇の最後の場面をまざ〳〵と想像することができた。寒さと饑ゑのために死に瀕して、しかも自分の發見した大祕密を世人に傳へようとした旅人の淋しい最期、その證據が吾々の前に坐つてゐるのだ。よく見ると、この死骸の顏は、二十年前に會つた、かはいさうなシルヴェストルに似てゐるやうな氣もした。だがそれは多分氣のせゐだらう。それにつけても、吾々も今、寒さと飢ゑとのために、この死骸と同じ運命を辿らうとしてゐるのだと思ふとはつと胸が迫つた。

「もう行かう」とサー・ヘンリイが低い聲で言つた。「だがちよつと待つて、この人に友達をこさへて

やらう」と言ひながら彼はフエントフオーゲルの死骸を起して、シルヴエストラの死骸に竝べて坐らせた。それから彼は手がこゞえて結び目をほどくことができなかつたので、シルヴエストラの首にかけてあつた十字架の紐をひきちぎつた。彼は今でもそれをもつてゐるだらうと思ふ。私は骨のペンをもつて行つた。それは今私がこの物語を書いてゐる眼の前にある。ときく私はこれで署名したこともある。

それから吾々は、この二人の死骸を、千古の雪のなかにのこしておいて、洞窟から這ひ出し、吾々があんな風になるのはこれから何時間先のことだらうと無氣味な想像をゑがきながら、とぼ〳〵歩き出した。

かれこれ半哩も歩いたときに、吾々は丘の緣端まで來た。沙漠の方から見ると乳頭はまんなかにあるやうに見えたが實はさうでなかつたのだ。朝霧がたちこめてゐたので前の方に何があるのか見えなかつたが、霧の上の方が少し霽れるにつれて、長い雪の勾配の端に、吾々のゐるところから約五百碼程下の方に、綠の草の生えた地面があつて、その中を小川が流れてゐるのが見えた。しかも川のそばには、大きな羚羊の群が、寢ころんだり立つたりして日向ぼつこをしてゐた。併し距離が遠いのでどんな種類の羚羊かはわからなかつた。

吾々はこれを見て狂氣のやうに喜んだ。とることさへ出來ればまづ食物は澤山見つかつたわけだ。しかし、どうしてとるかゞ問題だ。吾々のゐるところからそこまでは、六百碼はたつぷりある。そ

の成否が吾々の生命にかゝはる際の射擊としては、距離が遠過ぎて心もとないこと夥しい。

そこで、吾々は、そつと獲物の方へ忍び寄つて見ようではないかと相談して見たが、風の向きは惡いし、雪を背景にして歩いて行つたのぢや、どんなに用心したつて見つかるにきまつてゐるので、その考へは、いや〳〵ながら拋棄してしまつた。

「兎に角こゝより擊つて見るより外はない」とサー・ヘンリイは言つた。「ところで、コオターメンさん、連發銃とエキスプレス銃とどちらをつかつたらいゝでせう？」

これがまた問題だつた。ウンボバがかはいさうなフエントフオーゲルのも持つて來たので、ウインチエスター連發銃は二挺あつた。この方は千碼まで照準がきく。ところがエキスプレス銃の方は三百碼までしか照準がきかないから、それ以上の距離は多少あてずつぽうだ。その代り、彈丸が命中すれば、エキスプレスの方は彈道がひろがつて行くから、對手を殺す可能性は多い。そこが問題の難しいところだ。併し私は、一かばちかエキスプレスでやつて見なくちやいかんと決心した。

「みんな自分の眞正面にゐる奴の肩の邊をねらつて、ウンボバに合圖をして貰つて一度に射たう」と私は言つた。

この一發が自分の生命にかゝはるのだと思つて、吾々は一生懸命にねらひを定めた。

「射て！」とウンボバはズル語で言つた。すると三つの銃口が殆んど一度に音をたてた。三つの雲の塊りがしばらく吾々の前にかゝり、銃聲は靜かな雪の中に幾度びも反響した。やがて、煙が霽れ渡る

と、嬉しや！　大きな羚羊が、仰向けにひつくり返つて、斷末魔の苦悶最中であつた。吾々は凱歌をあげた。吾々は救はれたのだ。餓死をまぬがれたのだ。吾々は疲れてゐたが、雪の勾配を駈け降りて、銃を射つてから十分間のうちに、羚羊の心臓と肝臓とは吾々の前に横はつてゐた。しかし今度は又新たな困難が起つて來た。といふのは燃料がないので、それを料理するための火をこさへることができなかつた。吾々は當惑して互に顏を見合せた。

「饑ゑた人間は贅澤を言つてちやいけない、生で食はう」とグッドは言つた。

ほかにどうにもしようがなかつたし、それに饑餓はこの上とても辛抱できない程度に達してゐたので、吾々は心臓と肝臓とを、しばらく雪の中に埋めて冷し、小川の冷たい水で洗つて、それからがつがつ生のまゝで食つた。恐ろしいことのやうに聞えるかも知れないが、正直なところ私はこの生肉程おいしいものをまだ食べたことがない。十五分もたつと吾々はすつかり別人のやうになつた。元氣は見る〳〵恢復して、脈搏もだん〳〵しつかりうつやうになり、血は、勢ひよく血管を流れ出した。併し、空き腹にあまり澤山詰めこみすぎて、食傷をおこしてはならぬと用心して、腹八分目のところでやめた。

「有難い、この獸のために吾々は命を救はれたわけですな、これは何といふ羚羊です、コーターメンさん？」とサー・ヘンリイは言つた。

私もたしかでなかつたので、起ち上つてその羚羊を見に行つた。それは角の曲つた牝馬程の大さの羚羊だつた。私はこんな羚羊はこれまで見たことがなかつた。毛は鳶色で薄赤色のかすかな斑であつた。あとでわかつたことだが、土人はこれを「インコ」と言つてゐた。珍らしい種類で、外の獸の棲まない高い地方だけに棲んでゐるものだとのことである。彈丸は見事に肩に命中してゐた。無論誰の彈丸が命中つたのかはわからなかつたが、グッドは、麒麟を射つたときのすばらしい手際を思ひだして、ひそかに、自分の彈丸があたつたにちがひないと思つてゐたにちがひないと思ふ。

吾々は花より團子の譬へへの通り、食ふのに忙がしくて、ろく〳〵あたりを見もせずにゐたが、滿腹になると、ウンボバに、もつてゆけるだけの上肉を切りとらせながら、その間にあたりの景色を見まはした。もう八時だつたので、霧はすつかりはれ渡り、前に横はつてゐる地方を一眸のもとに見渡すことができた。私は、この時吾々の眼前に展開されたすばらしい光景をどう言ひあらはしてよいか知らぬ。こんな景色はこれまでにも見たことがないし、これからだつてあるまいと思ふ。

吾々の背後には雪を戴いたシバの乳房が聳えて居り、吾々の立つて居る處からかれこれ五百呎ほど下には何里も何里も續いて非常に美しい田舍景色が横つてゐる。彼方此方に、鬱蒼たる森があるかと思ふと、銀色の河が蜿々と流れてゐる。左手にはよく繁つた草原が、緩やかな勾配を造つて廣がつて居り、その上には、野獸だか牛だかよく判らぬ獸の群が無數に跳び廻つてゐるのが見える。この草原の周圍を、遠卷きに山が圍んでゐる。右手には、あちこちに獨立の小山が、地平からもち上つてゐて、山と山との間には、高地が點綴され、その間に穹窿形の小屋の群が見える。此處から見渡した

景色は、まるで地圖のやうで、その間を縫ふ河の流れは、銀蛇のやうに輝いて居り、アルプの峯のやうな、雪を戴いた、俊峰がいかめしく屹立してゐる。そして、これ等凡ての上に、嬉々たる日光と、大自然の幸福な生命のいぶきとがかゝつてゐるのだ。

それを見てゐるうちに、吾々が、不思議に思つたことが二つあつた。一つは、吾々の前に横はつてゐる地方は、吾々が通つて來た沙漠より少くも五千呎は高いと云ふことで、いま一つは、河といふ河は、みな南から北へ流れてゐるといふことであつた。上り道には水がちつともなかつたのに、北側には澤山の小川が流れてゐて、それが大きな河に合流して、地平の彼方に蜿々と流れて見えなくなつてゐた。

吾々は、暫時の間、腰を下して、無言のまゝこの驚くべき景色を眺めてゐた。やがて、サー・ヘンリイが言つた。

「あの地圖には、ソロモン街道のことが何か書いてあつたね？」

私はやはり遠くの方を眺めながら點頭いた。

「さうだ、あそこにある！」と彼は、吾々の少し右手の方を指した。グッドと私とが、その方を見ると、遙かの平原の方に廣いローマの街道のやうなものが見えた。

「右の方から廻つて行けばすぐだ。早速行つて見ませう」とグッドは言つた。

そこで吾々は、小川の水で、大急ぎで顏と手とを洗つて出發した。一二哩の間吾々は、石ころや、

解け殘つた雪の道を進んで行くと、急に小さな隘の躍きについた。すると、吾々の脚下に道が横はつてゐた。それは、堅い岩を切り開いて造つた、幅五十呎以上もあるすばらしい道であつたが、不思議なことには、その道は、急にそこからはとまつてゐるらしかつた。吾々は、その道へ下りて行つて、シバの乳房の方へ、ほんの百歩ほど歩いて行くと、道はなくなつて、すぐそばまで山が迫つてきてゐた。

「これはどうしたんでせう。コオターメンさん？」と、サー・ヘンリイはたづねた。

私は、さつぱり判らなかつたので頭を振つた。

「判つた！」と、グッドは云つた。「この道は、きつとこの山を越えて向う側の沙漠まで通じてゐたんですよ。ところが下の方は沙漠の砂で埋められ、上の方は火山の爆破か何かで、熔岩でつぶされてしまつたのですよ」

なるほどさうかも知れんと思ひながら吾々は山を下りて行つた。雪の上を、酷い飢ゑに惱まされ、凍えながら、山を登つて來たときと、いま十分腹をこしらへて、この坦々たる大道を降つて行くのとは非常な相違であつた。實際、かはいさうな最期をとげた、フェントフォーゲルと、洞窟の中に凍え死んでゐたシルヴェストラの陰氣な憶ひ出さへなかつたら、これから先に、どんな危險が横はつてゐるか判らないにもかゝはらず、吾々は、非常に愉快であつたらう。進んで行くにつれて、空氣はますます柔かくなり、景色は、ますゝ美しくなつてきた。それに、吾々の歩いてゐる道ときたら、こん

な大工事を見たことがない。

ある處にはトンネルがあつて、その兩側には妙な彫刻がしてあつた。それはたいてい、戰車に乘つて驅けて行く甲冑を着けた武人の彫刻であつたが、なかには戰の全景を寫しだしたすばらしいのもあつた。

サー・ヘンリイは、この古代美術の作品をよく調べて見てから言つた。「これを見ると、ソロモン街道の昔の模樣がよくわかりますね。しかし、私の考では、ソロモンの民が來る前に、こゝには、埃及人があたらしいですね。この彫刻は、埃及人の手になつたものではないにしても、埃及彫刻に非常によく似てゐますからね。」

正午までに、吾々は、森のある處まで下りて來た。はじめには、ぽつ〳〵雜木林があらはれはじめ、その内に道はうねりうねつて、銀色の葉のついた木の茂つてゐる大きな森の中へはひつてゐた。この木はケープ・タウンの岡で、よく見かける木だが、ほかでは私は見たことがない。

グッドはこの木を見ながら大喜びで言つた。「こゝには木が澤山あるから、一つ食事をしようではないか、もうあの生肉は、大ていこなれてしまつたから。」これには誰も異議がなかつた。そこで吾々は、近くに流れてゐる小川のそばまで行つて、枯枝を集めて火を焚き、吾々が持つて來た、インコの肉の良い所を切つて、ケープアー人がやるやうに、それを串にさして燒いて喰つた。腹が一杯になると、煙草に火をつけて、悠つくりと樂んだ。最近に吾々が經驗したひどい困難に比べると、まるで天

國にゐるやうな思ひがした。

吾々は、餘りの變化にものも言へなかつた。サー・ヘンリイと、ウンボバとは、まづい英語と、ズル語とを、ごつちやまぜにして、低聲で何か熱心に話してゐた。私は、半ば眼を閉ぢて、河岸に生えてゐる羊齒の上に寢ころんで二人を見てゐた。するとグッドの姿が見えなくなつたので、どうしたのだらうとあたりを見ると、彼は、河の岸に腰をかけて行水をつかつてゐた。フランネルの襯衣一枚になつて、生れつきの綺麗好きの癖が起つたと見えて、せつせと念入りに化粧をしてゐた。彼は、カラーを洗ひ、ヅボンや上着やチョッキの塵を拂ひ、いつでもそれを着られるやうに折りたゝんでゐたが、さうしながら彼は悲しげに頭を振つてゐた。と言ふのは、今迄に通つてきた怖ろしい道中で、上着やヅボンは方々ちぎれたり裂けたりしてゐたからであつた。それから彼は靴を出して、羊齒の葉でこすり、インコの肉から注意して採つておいた脂をそれに塗つた。それから彼は、眼鏡越しによく磨き工合を調べて見て、それを穿き、今度は別の動作にとりかゝつた。卽ち彼は、小さい袋からポケット用の櫛と、懷中鏡とを取り出して念入りに髮をといてゐたが、どうもまだ滿足出來ない樣子であつた。と言ふのは頤のあたりに十日も剃らない鬚がもぢや〳〵のびてゐたからだ。「まさかあれを剃る氣ぢやなからうな」と私は思つた。ところがさうではなかつた。彼は、靴を磨いた脂の片を取り出して、それをよく川で洗ひ、小さい剃刀を取り出して頤や顏を強く脂でこすつて剃りはじめた。しかし非常に痛かつたと見えて、時々唸り聲をあげてゐたので、私は、うちからこみ上げて來る笑ひを抑へること

が出來なかつた。男のくせに、こんなところで、こんな場合に、脂の片で顏を剃るなんてまことに可笑しいことだ。が、たうとう彼は頤と顏の右側の鬚とを剃つてしまつた。恰度その時、彼の頭の眞上で何かキラリと光るものがあつた。

グッドは頓狂な叫びを上げて跳び上つた。（若し彼の持つてゐたのが安全剃刀でなかつたなら、彼はきつと咽喉を切つたゞらう）私も物も言はずに跳び上つた。私のゐるところから二十歩たらず、グッドのゐるところからは十歩ばかり離れたところに、非常に脊の高い銅色の皮膚をした人の群が立つてゐた。中には頭に大きな黑い羽根飾をつけて、豹の皮を身にまとうてゐるものもあつた。この一隊の前に十七位の若者が、希臘彫刻の鎗投げ選手のやうな姿勢をして、まだ手を擧げたまゝ、前かゞみになつて立つてゐた。いまキラリと光つたのはたしかにこの若者が投げた短刀の光りであつたのだ。

見てゐる中に軍人のやうな恰好をした老人が隊を離れて前へ進み出て、若者の腕を捉へて何か彼に言つた。そして二人は吾々の方へ進んで來た。

サー・ヘンリーとグッドと、ウンボバとは銃をとつて彼等を脅威するやうに身がまへた。だが野蠻人の一行は、平氣でずん〳〵進んで來た。彼等は鐵砲と云ふものを知らないのぢやないかと私は思つた。でなければこんなに平氣でゐる筈がないからだ。

「銃を下に置きなさい」と私は一同に向つてわめいた。こんな場合妥協するのが一番安全だと思つたからである。一同はそれにしたがつた。私は前へ進み出て、今しがた若者をとめた老人に向つて話し

かけた。

「今日は」と私は何處の言葉を使つてよいか判らなつたものだからズル語で云つた。驚いたことには私の言葉は先方に通じた。

「今日は」と老人は答へた。その言葉には少しなまりがあつたが、ウンボバにも私にもよく判つた。後から知つたところによると、この連中の言葉は、ズル語の古語で、それと今日のズル語との關係は恰度チョオサー時代の英語と今日の英語との關係のやうなものであつた。

「何處から來なさつた？」と老人は言葉を續けた。「貴方がたは何者です？　何故貴方がたの三人の顏は白くて、一人の顏は私どもと同じ色なのです？」と云ひながら彼はウンボバを指ざした。見るとなるほどウンボバの顏は彼等の顏と同じで、體格の大きい點も彼等と同じだつた。併し私はこの暗合をよく考へて見る餘裕などはなかつた。

「吾々は他國の者です。決して惡意を持つてゐるものではありません」と私は彼等に判るやうに悠くりと答へた。「それからこの男は、吾々の從者です」

「それは嘘だ」と彼は答へた。「生き物の通れないあの山を越えて、他國の人がこんな處へ來る筈がない、がしかし嘘なんかどうでもよい、もしあんたがたが本當に他國人なら、あんたがたの命は貰はにやならん。と云ふのはククアナ人の國では他國人を生かして置くわけにはいかないからだ。それは國王の法律だから、さあ覺悟をしなさい。」

私はこれを聞いて少し後の方へ跟けた。特にこの連中の中の或者が手をするくと腰のところへすべらして、腰につけてゐる大きな短刀のやうな物をつかんだときはたぢくとなつた。

「あの乞食は何を言つてるんだね？」とグッドは訊ねた。

「あいつは吾々を殺さうと言つてゐるのだ」と私は苦い顔をして答へた。

「そりや大へんだ！」とグッドはうめいた。その時彼は、困つた時にいつでもするやうに、義歯に手を當てて、それを抜いて裏返しにした。世の中のことは何が幸になるかわからぬもので、それが非常に幸運であつた。と云ふのは次の瞬間にいかめしく立つてゐたクタアナ人の群は、一度に恐怖の叫びを上げて數碼後へとびさがつた。

「どうしたんでせう？」と私は云つた。

「あの歯ですよ。」とサー・ヘンリイは昂奮して囁いた。「グッドが歯を動かしたんですよ。おいグッド君歯を外したまへ！」彼はその言葉に從つて、フランネルの襯衣の袖の中へ義歯をすべり落した。

すると土人の群は怖いもの見たさにそろくと前へ進んで來た。彼等はもう吾々を殺すこと等は忘れてゐるらしかつた。

「どうしたのです皆さん」と老人は勿體ぶつた口調で尋ねた。「あのよく肥つた人は、身體には着物をつけて、脚は裸かで、顔の一方だけに髯をはやして、一方の眼だけ大きな透き通つた眼をして、ひとりでに歯を動かして口の外に出したり入れたり自由にしてゐますが、あれはどう云ふ譯です？」

「口を開けたまへ」と私はグッドに向つて言つた。すると彼は老人に向つて怒つた犬のやうに唇を上下にそらし、呆氣にとられてゐる老人の眼の前で、赤い二列の薄い歯齦を出して見せた。老人はアッと魂消た。

「あの人の歯はどうしたんだ。たつた今たしかに見えたんだがな」と一同は叫んだ。

グッドは悠くりと顔を後へまはして、すばやく手を口へあてた。そして再び笑ふと今度は綺麗な二列の歯が並んでゐるではないか。

今しがた短刀を投げた若者は、草の上へ身を投げて長い恐怖の叫びをあげた。老人の膝は恐ろしさのためにがたくくと慄へてゐた。

「判りました。貴方がたは神様にちがひない」と彼は吃りながら云つた。「女の腹から生れた人なら顔の一方だけに髯があつて丸い透き通つた眼をして、歯がひりでに動いて、生えたり溶けてなくなつたりする譯はありません。あゝ神様、どうぞ私どもを許して下さい。」

これは實に願つてもない幸運だつたので無論私はそれにつけ込んだ。

「その通りだ」と私はいかしめしい笑ひを浮べて言つた。「まことのことを言つて聞かすと吾々はお前たちと同じ人間の形はしてゐるが空にある一番大きい星から來たのだ」

「おゝ！　おゝ！」と呆氣にとられた土人どもは聲を揃へてうなつた。

「正にその通りだ」と私は再びやさしい笑を浮べながら言葉を續けた。「吾々はしばらく此處に滯在し

てお前たちに福を授けてやる。見る通りわしは此處へ來るために、お前達の言葉を學んで來たのだ。」
「その通りです、その通りです。」と一同は聲を合して言つた。
「さて皆の者」と私は言葉を續けた。「吾々はこんな長い旅をして來たあとで、あんな待遇を受けたのだから復讐するかもしれないぞ。さうだ、あの齒を入れたり出したりする人の頭へ短刀を投げた不埒な奴は殺してしまふかもしれん。」
「あの人は助けてやつて下さい」と老人は拜むやうに云つた。「あれは國王の王子で私はあれの叔父で御座ります。若しあれの身に間違つたことでもあると大變ですから」
「お前達は吾々の復讐の力を疑つてゐるらしい」と私は相手の言葉には耳をかさずに續けて言つた。
「まて、わしが今證據を見せてやる。こりや奴隷、あの音のする魔法の筒を持つて來い」と私はウンボバに向つて荒々しい言葉で命令しながらエキスプレス銃の方へ目くばせした。
ウンボバはすぐに立ち上つて、ちよつと苦笑ひをしながら私に銃を渡した。
「旦那樣持つて參りました」と彼は鄭重に言つた。
恰度その時小さい一疋の羚羊が七十碼ほど向うの岩の上に立つてゐたので、私はそれを射つてやらうと心できめた。
「あそこに羚羊がゐるだらう」と私は一同の者にその動物を指し示しながら云つた。
「どうだ、女の腹から生れた人間に、此處から音をさせてあれを殺すことが出來るか？」

「左樣なことはとても出來ません」と老人は答へた。
「ところがわしにはそれが出來るのだ」と私は落ちついて言つた。
老人は「まさか左樣なことは」と答へながら微笑を洩らした。
私は銃を取り上げて羚羊をねらつた。それは小さい羚羊だつたので普通の獵師なら射ち損じかねないものであつたが、私は射ちそこなふ氣遣ひはないと云ふことを知つてゐた。
私は呼吸を深く引いて悠くりと曳金をおさへた。羚羊は石のやうにぢつと立つてゐた。
「ズドン！」羚羊は宙へ飛び上つて岩の上に落ちて釘のやうに死んでしまつた。
一同の者は恐怖のためにうめいた。
「肉が欲しければあの羚羊を連れて來るがいゝ」と私は冷やかに言つた。
老人が合圖をすると一人の家來が走つて行つて、やがて件の羚羊を持つて歸つて來た。私の射つた彈丸は肩の下のところに見事に命中してゐた。一同の者は哀れな獸の死骸のまはりに集まつて仰天して彈痕を見つめてゐた。
「どうだ、わしは謊を言はないだらう」と私は言つた。
誰も返事をしなかつた。
「若し吾々の力を疑ふものがあるなら、誰か一人あの岩の上に立つて見るがよい、さうすればこの羚羊と同じやうにして見せてやる」と私は續けて言つた。

誰もこんなすゝめに應じさうなものはなかつたが、そのうちにたうとう國王の王子が口をきつた。
「よし、伯父さん貴方あの岩の上に立つて御覽なさい。魔法で羚羊は殺すことは出來ても、人間を殺すことはできないにきまつてゐるから。」
「いや〳〵」と彼はいそいで叫んだ。「わしはこの眼でちやんとにらんだ。この人達は本當の魔法使ひだ。だから國王の許へお連れ申さう。だがまだこの上に證據が見たいと云ふものがあるなら、その人を岩の上に立たした方がよいだらう。さうしてあの魔法の筒に物を云はせたがよからう。」
一同の者はあわてゝもう澤山だと云ふやうな表情をした。
「あんな立派な魔法をこちとらのやうないやしい者に澤山見せて貰ふのはもつたいない」と一人の男が云つた。「こちとらはもう澤山だ。この國の魔法使ひが束になつたつて、あんな藝當を見せることは出來はしない。」
「さうだとも」と老人はほつとしたやうな調子で云つた。「それに違ひない、まあ聞いて下さい、星の世界のお方達。光る眼をした、齒の動く、そして遠くから音をたてゝ生き物を殺しなさるお方達、私はインファドオスと申しまして、以前にこのククアナの國王であつたカファの子で御座ります。それからこの若者は、スクラッガと申しましてツワラ大王の王子で御座ります。ツワラ大王と申しますのは后を千人もお持ちになる國王で、ククアナの民の長であり、この大街道の所有者であり、魔法の學者で十萬の軍隊を率ゐて敵に恐れられてゐる方で、片眼の、色の黑い、恐ろしい王樣で御座ります。」

「さうか」と私は鷹揚に言つた。「ではツワラの處へ吾々を案内せい。吾々は賤しい者とは話をしたくない。」
「承知致しました。がずゐ分遠のりが遠う御座ります。吾々は、王樣の居なさる處から三日もかゝつてこちらへ獵に來たので御座ります。それをおいとひでなければ御案内申します。」
「そりや仕方がない」と私はぶつきら棒に言つた。「吾々は死ぬと云ふことはないのぢやから、いつまでかゝつてもかまはん。用意はよいから案内せい。だがインファドオスもスクラッガも要心せい、吾吾を騙さうなどと思つてはいかぬぞ。お前達の泥のやうな頭で惡企みをしたつてすぐに判るから復讐するぞ。あの人の透き通つた眼でお前たちをにらみ殺し、あの出沒自在の齒でお前達もお前達の妻子も喰ひ殺してしまふぞ。あの魔法の筒が音をたてゝお前達を蜂の巢のやうにしてしまふぞ。よく氣をつけるがよい！」このいかめしい言葉のきゝめはてきめんであつた。實を云へばそんなに脅す必要のないほど既に彼等は吾々の力に打たれてゐたのだ。
老人は深く敬意を表して家來の者共に向つて何事かを言つた。すると家來の者共は吾々の荷物を持つた。何でも先まで運んでくれるつもりらしい。たゞし鐵砲には手をさはらうともしなかつた。彼等はグッドの着物さへも持つて行かうとした。それは讀者は記憶してゐるであらうが、彼がきちんと疊んでそばに置いたものである。
彼はそれを見てあわてゝ手を通さうとした。すると大騒ぎが持ち上つた。

「眼の透き通つた齒の溶けてしまふお方にそんなものをさはらせちやいけない。持つて行くのは家來の役目だぞ。」と老人は言つた。

「おれはそれが着たいのだよ！」とグッドは氣短かな英語でどなつた。

ウンボバはそれを通譯した。

「とんでもない、私どものしたことがお氣にさはつてその美しい白い脚を見せてくださらないのですか？」とインファドオスが答へた。

私はこの時もうちよつとで失笑するところであつた。がその間に一人の男は、さつさと着物を持つて出懸けてしまつた。

「畜生つ！、あの黑ん坊の奴、おれのヅボンを持つて行きやがつた」とグッドはどなつた。

「おいグッド君」とサー・ヘンリイは云つた「君はこの國では特別扱ひにされてゐるのだから、しまひまでさうしてゐなきやならんよ。いつまで經つてもヅボンなんか穿く譯にいかんぞ。これからはフランネルの襯衣と靴と眼鏡とだけで通さなくちやならんよ。」

「さうだ」と私は言つた。「それに片一方だけ頰髯を生やしてゐなければならん。若しその中の一つでも變へたら奴等は吾々を僞者だと思ふからな。グッドさんにはまことに氣の毒だが、眞面目にさうしてゐなけりやなりませんよ。もし奴等がちよつとでも疑ひ初めたら、吾々の命は五厘銅貨の値打もなくなりますからね」

「ほんとに貴方がたはさう思ひますか？」とグッドは悲觀しながら言つた。

「ほんとですとも、貴方の美しい白い脚と貴方の眼鏡とは、吾々一行の目じるしなんだから。サー・ヘンリイが仰言るやうに貴方は終ひまでそれで押し通さなけりやなりませんよ。まだしも靴を穿いてゐたのが德倖ですよ。それにこゝは空氣が暖いから。」

グッドは溜息をして何にも言はなかつた。がこの新しい貧弱な服裝になれるのに半月もかゝつた。

第八章　ククアナ國に入る

その日の午後はすばらしい街道に沿うて、吾々はずつと旅を續けた。街道は、一本調子に北西の方向に走つてゐた。インファドオスとスクラッガとは吾々と一緒に歩いてゐたが、彼等の從者は百歩ばかり前を歩いて行つた。

「インファドオス、この道は一體誰が造つたのだね？」と私はたうとう話しかけた。

「これはずつと昔からあるので御座いますよ。どうして出來たのか、何時造られたのか誰も知つてゐるものはないのです。何代も何代も生きてゐる物識りのガゴオル婆さんだつてそれは知らないのです。今時はこんな道は誰にだつて造れはしませんが、王樣は道に草一本生やさないやうにしてをられます。」

「ではこの道へ來るまでに、吾々が通つて來た、トンネルの壁に書いてあつたものは誰が書いたのだ

い？」と私は、吾々が見て來た埃及彫刻らしいものゝことを訊ねた。
「やつぱり道を造つた方が、あの不思議な彫刻も造られたのですよ。私どもには誰が書いたのか判りません。」
「ククアナ人は何時この國へ來たのだい？」
「此處の人間は何萬月も前に蟻のやうに向うの大きな國からやつて來たのです　と言ひながら彼は北の方を指さした。「この國は周圍が山に圍まれてゐるものですから、これからさきへ行くことが出來なかつたのださうです。それに此の國は良い國だものですから、その人達はこゝに落着いて、だん〳〵強い國民になつたのです。今日では、私どもの仲間の數は濱の砂のやうに澤山あります。ツワラ王が軍隊を召集されると、廣い野原が羽根飾りでうづまつてしまひます。」
「周圍が山に圍まれてゐちや、軍隊は戰爭する相手がないだらう？」
「ところが北の方は開いてゐるので御座います。で時々私どもの知らない國から雲霞のやうな大軍が押し寄せて來ますが、吾々は悉殺しにしてしまひます。この前に戰爭があつてからもう十年になりますが、その戰爭で私どもの軍隊は何千となく戰死しました。しかし、たうとう私どもは攻めて來た奴を滅ぼしてしまひました。それからこつちもはや戰爭はありません」
「兵隊どもは、鎗を休めてゐちや、さぞ退屈だらうな？」
「ところがその戰爭が濟んでから實はもう一度戰爭があつたのです。がそれは内亂でした。犬と犬と

が喰ひ合うて云ふやつです、」
「それはどうしておこつたのだ？」
「私の兄のツワラ王は雙生兒だつたのでございます。私どもの國の習慣として雙生兒は二人共生きてゐることが出來ないで、弱い方が殺されることになつてゐるのですが國王の母親は吾が兒を殺すに忍びないものですから、後から生れた弱い方の子供をかくしておいたのです。その子供が、つまりツワラ王なのです。私は別の后の腹から生れたツワラ王の弟なのでございます」
「それで？」
「私どもの父は、私どもが成人すると死んでしまひ、兄のイモッが、そのかはりに王位について、しばらく國ををさめてゐる内に、寵妃の腹から一人の息子が生れたのです。この赤ん坊が三つの時に、あの大戰爭がはじまつて、戰爭の間ぢゆう、田や畑は種も蒔かず耕しもせずにおいたものですから飢饉がおそつて來たのです。すると人民はぼつ〳〵不平をとなへはじめ、何か不平をはらす的はないかと、飢ゑたライオンのやうにあたりを捜しまはつてゐたのです。その時に、ガゴオルと言ふ恐ろしい不死身の物識りの婆さんが人民に向つて「イモッ王は王ぢやない」と言つたものです。その當時イモッは負傷して身體の自由がきかないので、彼の小舍に寢てゐたのでございます。
「その時にガゴオルは一軒の小舍にはひつて私の兄であり、國王の雙生兒の兄弟であるツワラを連れ出して來たものです。この婆さんは、ツワラが生れた時からこの子供を岩窟の中へかくしておいたの

です。そしてこの婆さんは、ツワラの腰から腰帶を取り拂つて彼の腹のまはりにとぐろ卷いてゐる聖蛇のしるしをツワラの人民に見せて「これがお前達の王様だ、妾が今迄お救ひ申してゐたのだ」と聲高に叫んだのです。この聖蛇のしるしは、國王の長子が生れた時につけるしるしなのでございます。

「すると人民は飢ゑのために狂氣のやうになつて、理性を失ひ、眞僞を見ふける力を失つてゐた際なので「國王ー　國王ー」と叫びました。しかし私はさうでないことを知つてゐたのです。イモッの方が先きに生れた正當な王であることを知つてゐたのです。驚きがあまり大きくなつたので、イモッ王は病床に寢てゐながらも、妻の手をとり、幼兒のイグノシを連れて小舍から御ひだしたのです。ついでに申し上げますが、イグノシと云ふのは電光と云ふ意味なのでございます。

「『あの物音は何だ？　何故國王ー　國王ー　なんで叫んでゐるのだ？』と彼はたづねました。

「その時同じ腹から生れたツワラは彼の側へ走りよつて、その髮を掴み、短刀で彼の心臟を突き刺したのです。すると氣の移りやすい、いつでも長いものには卷かれろ主義の人民は手を打つて叫びました。『ツワラが王様だー　ツワラ王萬歲ー』」

「それでイモッの妻と子供のイグノシとはどうなつたんだ？　ツワラがやつぱり殺したのか？」

「いゝえ、女王は王様が殺されたのを見ると、子供を抱いて泣きながら逃げて行つたのでございます。それから三日目に女王は非常に飢ゑて一軒の小舍へ辿りつきましたが、もはや國王が死んだあとなので、誰も女王にミルクも食物も與へてくれるものはなかつたのです。人間と言ふものは、皆、不幸な

者を相手にしないものです。ところが夕方になると一人の小娘が、こつそりと穀物を持つて小舍からしのび出て來て、それを子供に與へ、そして翌朝日の出前に母親はこの子供をつれて山の方へ行つてしまつたのです。多分、その女は向うで死んでしまつたのでせう、と云ふのはその母親も、イグノシもそれから後誰も見たものはないのでございますから。」

「ではもしそのイグノシと云ふ子供が生きてゐたら、ククアナ國のほんたうの王になる譯だな？」

「さうで御座います。あの子の腰のまはりには聖蛇のしるしがついてゐます。生きてゐたら王なのですが、もうずつと前に死んでしまつてゐるのです。」

「御覽なさい」と云ひながらインファドオスは澤山の小舍の集まつた部落を指ざした。その部落は濠にとり圍まれてゐて、その濠の外側をまた大きな墻が取り圍んでゐた。「あれがイモッの妻が最後に子供のイグノシと一緒にゐた家です。あなた方は下界でお眠みなさるのかどうか判りませんが、もしお眠みなさるなら、私どもは今夜あの家で泊らうと思つてゐるのです。」

「鄉に入れば鄉に從へと云ふことがある。ククアナ人の仲間の中にゐる間は、ククアナ人のするやうにするぞ」と私はおごそかに言つてグッドを振り返つた。グッドは氣むづかしい顏をして歩いてゐた。彼の心はフランネルの襯衣が夕風でひらくするのを避けようとすることで一ぱいだつたのだ。驚いたことには私が後を振り向いた拍子にウンボバの顏につきあたつた。彼は吾々のすぐ後からついて來て、私とインファドオスとの會話を非常な興味をもつて聞いてゐたらしかつた。彼の顏つきは好

奇心にみちみちてゐた。それはずつと前に忘れてしまつた何事かを思ひ出さうとして、一生懸命になつてゐる人のやうな顔つきであつた。

この間に吾々は下の方に、波のやうに起伏してゐる平原へ向つてずん〳〵足を早めた。吾々が通つて來た山々は今では、頭上にぼんやり霞んで見え、シバの乳房は羞かしさうに透きとほつた霧のヴェールに包まれてゐた。進んで行くに連れて景色はます〳〵良くなつた。植物はよく繁茂してゐたが、それでゐて熱帶植物ではなく、日光は明るく暖かゝつたけれども灼けるやうではなかつた。心地よい微風が香ばしい山々の山腹に沿うて吹き下してきた。實際この新しい國は、地上の天國と云つてもよい位であつた。景色のよい事と云ひ、自然の產物の豐かなこと、云ひ、氣候の溫暖なこと、云ひ、私はこのやうなところを今までに見たことがない。トランスヴァールも良い國だが、このククアナとは較べものにならぬ。

吾々が出發すると同時に、インフアドオスは、この先の村の人民へ吾々の到着を知せるために一人の傳令を派遣した。この男は非常な速さで出懸けて行つた。インフアドオスの話によると、彼は途中で一度も憩まずに先方まで走り續けるであらうと云ふことであつた。と云ふのは、この國ではランニングの練習が非常に廣く行はれてゐるからだ。

この傳令を派遣した結果は漸く判りはじめて來た。吾々がその部落から二哩ばかりの處まで着くと、大勢の男が隊を造つて部落の門から出て吾々の方へ進んで來た。

サー・ヘンリイは、私の腕をさはつて、どうやら款待されるらしいぞと言つた。するとインフアドオスは、彼のそぶりに氣がついて慌てゝ言つた。

「御心配なさるには及びません、私どもは、決して惡企みをしてゐるのぢやありません、この軍隊は、私の部下の軍隊で、私の命令でお出迎ひに來たので御座ります。」

私は平氣で點頭いた。しかし心の中は餘り平氣ではなかつたのだ。

村の門から半哩ばかりのところに、街道から緩かな勾配を作つてもちあがつた長い岡があつた。軍隊はそこで整列してゐたのだ。それは實に立派な見ものであつた。一隊は約三百人からなつて居り、めい〳〵ギラ〳〵した鎗を持ち、羽根飾りをつけて敏捷に岡の上に駈けあがつて指定された場所に整列した。吾々がその勾配にさしかゝつた時には、かやうな軍隊が十二も出來て總數三千六百の軍隊が街道に沿うて列んでゐた。

やがて、吾々は、第一の隊のところまでやつて來て、この驚くべき軍隊をつく〳〵眺めることが出來るやうになつた。彼等は大部分四十歲位の古兵で、脊の高さは六呎三四吋もあり、六呎以下のものは一人もゐなかつた。頭には黑い羽根飾りをつけ、腰の圍りと、右の膝の下とには白い牛の尾で造つた小さな環が結びつけてあり、左の手には直徑二十吋ばかりの丸い楯を持つてゐた。この楯は妙な楯であつた。薄い鐵板で造つたもので、その上に乳のやうに白い牛の皮が張つてあつた。めいめいの持つてゐる武器はごく簡單なものであつたが、併し恐るべき效力をもつてゐるものであつた。

その一つは木の柄のついた短かい非常に重い雙刃の鎗で、この鎗の刃の一番廣いところは幅六吋ばかりあつた。この鎗は、投げ鎗ではなくて近くに迫つて來た敵を突き刺すものであつた。この鎗の他に短刀を三ちやう持つてゐた。それはみな二封度もある大きな重いもので、一つは牛の尾でこしらへた環の中にはめてをり、他の二つは丸い楯の脊につけてゐた。この短刀が投げ鎗のかはりになるので、ククアナの軍人は五十碼も離れたところへ極めて正確にそれを投げることが出來るのだ。彼等は敵が近くへ迫つて來ると、どつと喊聲をあげながら、それを投げるのが習慣になつてゐるのであつた。

各隊は吾々がその正面へ來るまで、まるで銅像のやうにぢつとしてゐたが、豹の皮の外套を着て五六歩前に立つてゐる指揮官が號令をかけると、一度に鎗を高くさしあげ、三百人のものが聲を揃へて歓迎歌を歌つた。そして吾々が通り過ぎると、そのあとに整列してついて來た。かうして十二の中隊は全部吾々の後ろについて村の方へ進んで來た。

たうとう吾々はソロモン街道から枝道へはひつて、村の周りを圍んでゐる廣い濠のところまで來た。村の周圍は一哩もあつて丈夫な木柵で造へた垣で取り卷かれてゐた。入口には、壕の上に原始的な開橋が架つてゐて、番兵がそれを下して吾々を通してくれた。村は直角に交叉する道路によつて十二の區劃に分れ、一つの區劃がそれぞれ一つの中隊になつてゐたのである。小舍は穹窿形で、ズル人の小舍と同じやうに、小枝で造つて草の屋根が葺いてあつたが、ズル人の小舍と違ふところは、吾

吾がたつぶり立つてはひれる位の入口のあることだつた。

村の中を貫通してゐる大道の兩側には、澤山の女が列んで、物珍らしさうに吾々を見てゐた。これ等の女は、十人にしては大へん綺麗で、脊も高く顏も整つてをり、髮は短かいけれども捲毛で、脣も普通のアフリカ土人のやうに不愉快に厚くはなかつた。しかし何よりも吾々が驚いたのは、彼女等が非常におとなしくて一種の威嚴を持つてゐる點であつた。彼女等は好奇心に驅られて吾々を見に出たのではあるが、吾々を見てもひどく吃驚したやうな顏をしたり、不作法な批評をしたりしなかつた。インフアドオスがグッドの白い脚を指ざして見せた時でさへ、彼女等は黑い眼で眞白な美しい脚をちつと見詰めながら感歎してゐるだけであつた。しかし生來蓋かみやのグッドにとつてはそれだけでももう澤山だつたのであるが。

吾々が村の眞中に着いた時、インフアドオスは遠くから小さい小舍に圍まれた、大きな小屋の入口で立ち止つた。

「おはひりなさい、星の國のお方達」と彼はもつたい振つた聲で言つた。「どうぞこのあばら家でおやすみ下さい。すぐにお食事をさしあげます。お食事は、麥と牛乳と、牛と羊とで御座ります。」

「よろしい、吾々は星の世界から降りて來たので大分疲れたからすこし休ませてもらはう」と私は言つた。

それから吾々は小舍の中へはひつた。部屋の中は氣持ちよく準備が出來てゐて、吾々の寢るために

鞣皮の寢床が設けてあり、顏を洗ふための水がおいてあつた。

やがて部屋の外で、がや〳〵云ふ聲と跫音とが聞えて、娘たちが列をつくつて、牛乳と玉蜀黍の燒いたのと、蜜の入つた壺とを持つて來た。その後から數人の若者が肥つた仔牛を一頭曳張つて來た。吾々がこの贈物を受取ると、一人の若者が、腰から短刀を拔いて、巧みに牛の咽喉を突き刺した。それから十分間の後に、その牛を殺して皮を剝ぎ、一番良い肉を吾々のために切り取つてくれた。殘りの肉は、私が一行を代表して周圍に立つてゐる軍人共に進呈した。すると一同は、それをうけとつて「顏の白いお客樣の下さりものだ」と云ひながらみんなで分けた。

ウンボバは非常に愛嬌のある若い娘に手傳つて貰つて吾々の肉を大きな土鍋に入れて、小舍の外にこしらへてある竈にかけて煮はじめた。料理が出來あがると、インフアドオスと、王子のスクラッガとに使を遣つて一緒に食事をするやうに知らせた。

やがて二人はやつて來て、小さい腰掛に腰をかけた。老人の方は愛想が良くて丁寧であつたが、若い方はなんだか疑はしさうな顏附をしてゐた。彼は他の者と同じやうに、吾々の色の白いのと、魔法を知つてゐるのとには怖氣をふるつてゐたが、吾々が他の人間と同じやうに、食つたり、飲んだり、眠つたりするのを見て、畏敬の念がだん〳〵薄いで、猜疑の念がこれに變つて來たらしかつたので、吾々は少し氣味が惡かつた。

食事中にサー・ヘンリイは、彼の弟の運命を知つてゐるかどうか、或ひは、彼の弟の事を聞いたり見たりしたことがあるかどうかを訊ねて見たらどうだらうと言つたが、私はこの際その事については何も言はないのが賢明だらうと考へた。

食事が濟むと吾々はパイプに煙草をつめて火をつけた。インフアドオスとスクラッガとは、それを見てひどく驚いた。ククアナ人は明らかに煙草を喫かすことを知らないのだ。煙草はこの土地には澤山生えてゐたが、彼等はズル人と同じやうに、それを喫煙草として使用するだけで、吾々の喫かしてゐた煙草がそれと同じものだと云ふことは全く知らなかつたのだ。

それから間もなく私はインフアドオスに向つて、いつ出懸けるのだと尋ねた。有難いことにはもう既に吾々の到着したことはツワラ王の許に知らせてあるから、明朝出發の手筈になつてゐるとのことであつた。ツワラ王は、いま宮殿にゐて六月の第一週に行はれる年一回の大祭の準備をしてゐるらしかつた。この大祭には警備のために殘つてゐる若干の小部隊を除いて、全國の軍隊が國王の前にあつまつて觀兵式をすることになつてゐた。それから年一回の魔法狩りも近く開かれることになつてゐたのだ。

吾々は翌日早朝に出發することになつてゐた。インフアドオスも吾々に同行する筈になつてゐたが、彼の話によると途中に變つた事さへなければ、二日目の晩には宮殿まで着けると云ふことであつた。

これだけのことを告げると二人の客はおやすみなさいと言つて出て行つた。吾々は代るがはる一人

づつ、若しも吾々を裏切りはしないかと思つて、用心のために見張りをすることにきめて、あとの三人はごろりと横になつて良い氣持で眠つた。

第九章　ツワラ王

宮殿へ行くまでの旅の出來事は、一々こゝで書く必要はない。まつ直ぐなソロモン街道を通つて吾吾はそこへ着くまでにまる二日かゝつた。進むにしたがつて、村落とその周圍の高地の數はだん〳〵多くなつた。村落は、吾々が初めに見たのと同じ設計に出來てゐて、大勢の軍隊が守備してゐた。實際、ククアナと言ふ國は、ドイツや、ズルや、マザイと同樣國民皆兵主義の國で、戰爭の時には不具者以外の男子は、凡て戰線に出られるやうになつてゐた。吾々は旅の途中で宮殿へ觀兵式に出懸けて行く軍隊を澤山見たが、それは實にすばらしい軍隊であつた。

二日目の夕方、吾々は小高い岡の上にとまつて暫く憩んだ。街道はその岡の上を走つてゐたのだ。吾々の眼前に見える美しい沃野の中に首都が見えた。十人の町にしては、大きな町で、周圍五哩もある。おまけに近接部落がその外へはみ出してゐた。それは軍隊の駐屯のために使はれたのである。それから、後に吾々がよく知るやうになつた奇妙な馬蹄形の岡が二哩程北にあつた。町の中央には河が流れてゐて、河には數ケ所橋が架つてゐるらしかつた。六七十哩先には雪を戴いた三つの山が三角形をなして平地から聳えて居り、その山の中腹は、シバの乳房とは違つて屏風のやうな絶壁になつて

ゐた。土人等はその山を「三つの魔女」と呼んでゐた。

インフアドオスは吾々が山を見てゐるのを見て言つた。「この街道はあそこでおしまひになつてゐるので御座います。」

「どうしてだ？」と私は訊ねた。

「どうしてだか判りません」と彼は肩をすくめながら答へた。「あの山には澤山洞窟があつて、その間に大きな竪坑が一つあるので御座ります。昔しの賢者たちはこの町へ來て、そこへ何か採りに行つたのださうですが、今ではこの國の代々の王樣がそこにある墓場の中へ埋られてゐるので御座ります。」

「昔の人はそこへ何を採りに來たのだ？」と私は熱心に訊ねた。

「それは判りません。星の世界からお出でになつたあなた方は御存じで御座りませう」と彼はちらりと吾々の方を見ながら答へた。明かに彼は口で言つてゐる以上のことを知つてゐるらしかつた。

「左樣」と私は言つた。「お前の言ふ通り吾々は星の世界でいろ〳〵の事を知つて來たのだ。例へば、昔の賢者達が、この山へ、光る石や、美しいおもちやや、黃色い鐵等を採りに來たといふことを聞いてゐる。」

「あなた方は賢くていらつしやる」と彼は冷やかに答へた。「私はまだほんの子供ですからかやうな事柄については、あなた方とお話しすることは出來ませんが、國王の宮殿にゐるガゴオルと言ふ婆さんとお話しになればよろしう御座います。この婆さんはあなた方と同じやうに物識の女で御座います」

かう言ひながら彼は出て行つた。
彼が出て行くと私は一同の者に向き直つて件の山を指ざし「あそこにソロモンのダイヤモンド坑があるんですよ」と言つた。
ウンボバは皆の者の傍に立つて、いつもの調で、何か考へ込んでゐたが、急に私の言葉尻をとらへて「さうです、きつとあそこにダイヤモンドがあるのですよ」とズル語で云つた。
「どうしてお前はそれを知つてゐるのだ、ウンボバ？」と私は鋭く訊ねた。私は彼が時々合點のゆかぬことを云ふのが嫌ひだつたのだ。
すると彼は「何でもない、晩に夢で見たんですよ」と笑ひながら言つてくるりと後を向いて去つてしまつた。
「あいつは何か知つてるやうですね」とサー・ヘンリイは言つた。「ついでだがコオターメンさん、あいつは私の弟の事を何かきいたでせうか？」
「何もきいてゐないやうです。あいつは知りあひになつた奴等に片つぱしから訊いて見たさうだが、皆この國へ白人の來たのを見たことはないと言つてゐるさうです。」
「一體あなたは弟さんがこんな處へ來たと思つておゐでですか？」とグッドが口を出した。「吾々が來られたのだつて奇蹟のやうなものですよ。地圖もなしにこんな處へ來られるものですか。」
「そりや判らんが何だか私は弟に逢へさうな氣がする」とサー・ヘンリイは沈んだ聲で言つた。

陽は緩やかに沈んで行き、突然四邊はまつ暗になつた。晝と夜との間には呼吸をする隙もなかつた。熱帶地方では黄昏と云ふものは全くないのだ。晝から夜への變化は生から死への變化のやうなもので、太陽が沈めば世界はすぐにまつ暗になつてしまふのだ。しかしまもなく銀色の滿月が出て下界を隈なく照らした。それは實に筆紙につくしがたい美しい光景であつた。私の生涯は殺風景な生涯であつたが、それでも生きてゐてよかつたと思つたことが少しはある。その中の一つ、ククアナで滿月を見たこともだ。
やがて吾々の瞑想はインファドオスの丁寧な聲で破られた。
「皆様がおやすみになつたら、ぼつ〳〵宮殿へ參りませう。あそこにはあなた方の今夜のお宿が用意して御座ります。よい月夜ですから途中でころぶやうな事も御座いますまい。」
吾々はそれに同意した。そして一時間ほど經つと、吾々は町の郊外に着いた。郊外には無數の篝火がついてゐた。間もなく吾々は濠のところまで來た。そこには一人の番兵があて武器をかたくいはせながら吾々を誰何した。インファドオスが何か吾々に判らない合言葉を云ふと、番兵は敬禮して道をあけ、吾々はこの町の中央の大通りを進んで行つた。涯しなく竝んでゐる小舍の前を、かれこれ半時間も歩いて行つたときに、インファドオスは小さい小舍のかたまつて立つてゐる入口で止つた。この小舍の附には、さゝやかな庭がついてゐて、その庭には石灰が撒いてあつた。インファドオスはこれが吾吾の宿だと告げた。

中へはひつて見ると、吾々にはめい〳〵一軒づつ小舍があてがはれてゐた。この小舍は吾々が今迄に見たどの小舍よりも上等なもので、その中にはめい〳〵樺皮で拵らへた居心地の良い寢床が香草で編んだ敷物の上に展べてあつた。食事の用意も出來てゐたので、吾々が十甕に入れてある水で顏を洗ふと、すぐに數人の可愛らしい娘が、燒肉と玉蜀黍の穗とを木の盆に載せて、恭々しく吾々の前へ持つて來た。

食事がすむと吾々はベッドを一つの小舍の中へ移させた。娘たちはそれを見てくす〳〵笑つてゐた。吾々は長い旅の疲れでベッドに横はるとすぐにぐつすり眠つてしまつた。

眼が醒めたときはもう陽は高く昇つてゐた。化粧等はしてゐないらしい附添の娘たちは、吾々が支度をする手傳ひをするやうに言ひつかつてゐたと見えて、もう既に小舍の中へ來て立つてゐた。

「フランネルの襯衣一枚と靴とを穿くのぢや支度も何もいらないや」とグッドはなさけなささうに云つた。「コオターメンさん、僕のツボンを貰つて下さいよ」そこで私がそのことを頼んで見ると、あの有難い形見の品はもう既に國王に獻上したと言ふ返事であつた。吾々は附添の娘たちにちよつと外に出てゐて貰つて、こんな場合に出來るだけの身じまひをした。これには娘たちも驚いたと同時に失望した樣子だつた。グッドは丁寧にも顏の右側をもう一度剃つた。左の方には毛がもぢや〳〵と生えてゐたが吾々は、そちらはさはつてはならんと云つてとめた。吾々はたゞ顏をよく洗つて髮を梳くだけで滿足してゐた。

吾々が朝食を濟し、煙草を喫かしてしまつた時分に、一人の使者がやつて來た。それは外ならぬインフアドオスであつた。彼はツワラ王はもう會見の準備が出來たから、いつでもお出でなさるやうにと告げた。

吾々は、旅で疲れてゐるからもう少し陽が高く昇る迄待つてもらひたいと答へた。野蠻人を相手にする時には、いつでも餘り急がない方がよいのだ。彼等はこちらが禮儀正しくすると反つてこちらを輕蔑するものだ。そこで吾々は早くツワラを見たくてたまらなかつたのだが、一時間餘りも腰をかけて待つてゐた。そしてその間に、吾々の乏い所持品から、彼に獻上する品をえり出したりしてゐた。獻上品といふのはフエントフォーグルが使つてゐたウインチエスター銃と若干の珠數玉とであつた。吾吾はこの銃と彈藥とを國王に獻上し、珠數玉は后と宮女達とに獻上するつもりであつた。やがて吾々はもう支度が出來たからと告げて、インフアドオスに案内され、ウンボバに鐵砲と珠數玉とを持たせて出懸けた。

數百碼進んで行くと、吾々は一つの垣のところまで來た。それは吾々のあてがはれた小舍の圍りの垣と同じやうなものであつたが、大きさはその五十倍もあつた。垣の外側にはずつと小舍が列をなして並んでゐた。それは國王の后たちの住みかだといふことであつた。入口から眞正面には廣い空地を隔て、獨立した一軒の大きな小舍が建つてゐた。國王はそこに住んでゐたのだ。その他の小舍には凡そ七八千人もあらうかと思はれる軍隊がぎつしりとつまつて羽根飾りを風に靡かせ、ギラ〳〵する

槍を持ち、鐵の裏のついた牛の皮の楯を持つて、銅像のやうに立ち列んでゐた。吾々はその中をずんずん進んで行つた。

大きな小舍の前の空地には漁獵の腰掛が置いてあつた。吾々三人は、インファドオスの合圖によつてそれに腰をかけ、ウンボバは吾々の後に立つてゐた。インファドオスはといへば、彼は小舍の入口の側に席を占めた。かうして吾々は十分間かそこら死の如き沈默の中に待つてゐた。八千對はかりの眼で凝つと見詰められてゐるのだと思ふと、薄氣味の惡い法廷へ出たやうな氣がしたが、出來るだけ平氣をよそほつてゐた。その中にたうとう小舍の扉が開いて、立派な虎の皮を慾たりと肩へ掛けた大きな男がスクラッガ少年と、毛皮の外套に包まれた痞せしぼんだ猿のやうなものとを連れて出て來た。大きな男は椅子に腰を掛け、スクラッガはその側に立ち、痞せしぼんだ猿は、小舍の中の薄暗い物陰へ行つて四つんばひになつてゐた。

それでもまだ靜まりかへつてゐて、誰も一言も言はなかつた。

やゝあつて、この巨漢は虎の皮を振り拂つて吾々の前に恐ろしい形相をしてたち上つた。それは實に嫌な顏をした巨漢であつた。この男の唇は黑人の唇のやうに厚ぼつたく、鼻は平べつたく、一つの黑い眼が爛々と光つてゐた。片一方の眼は顏の眞中に穴になつて殘つてゐるだけであつた。全體の容貌はこの上なく殘忍で肉感的であつた。大きな頭の上にはすばらしい白い駝鳥の羽根が立つて居り、身體にはぎらぎら光る鎖鎧を纏ひ、腰の圍りと右の膝とには、曹通の白い牛の尾で拵へた環をつ

けてゐた。右手には大きな鎗を持ち、頸には黃金の重い頸鎖をかけ、額には一つの大きな琢いてないダイヤモンドが鈍い光りを放つてゐた。

それでもまだ誰も一言も言はなかつた。しかしそれは長いことではなかつた。やがて國王らしい巨漢は大きな鎗をあげた。すると直ちに八千の鎗が上へあがり、八千の口から國王に敬意を表する聲が起つた。それは三度繰返され、その都度萬雷の墜ちるやうな響きが天地を震撼した。

「もつたいなくも國王の御臨御ぢや」と細い甲走つた聲が聞えた。その聲は物陰にゐた例の猿の聲らしかつた。

「國王樣の御臨御ぢや」と八千の聲がこれに應じた。「もつたいなくも國王樣の御臨御ぢや」それからまた死のやうな沈默にかへつた。だが暫くするとその沈默は破られた。吾々の左り手に列んでゐた一人の兵士が楯を落したのだ。楯は石灰石の床の上にがらくと音をして落ちた。

ツワラは冷やかな眼を音のした方へ向けた。

「こちらへ來い」と彼は冷たい聲で云つた。

立派な若者が列の中から進み出て國王の前に立つた。

「楯を落したのはお前だな、このぶざまな、犬奴が。お前はこの屋の世界から來られた客人の眼前でわしに恥をかゝせるつもりか、どうだ返事はあるか？」

かはいさうにこの若者は眞蒼になつてしまつた。

「過失で落したのであります、お、陛下」と彼は呟いた。
「では過失の償ひをせにやならん。お前はわしを馬鹿にしたのだ、覺悟をしろ！」
「私は國王の牛で御座います。牛のやうに殺して下さいませ。」と彼は低い聲で答へた。
「スクラッガ」と國王はどなつた。「お前の鎗の使ひ振りを見せてくれい。このぶざまな犬を殺してくれい！」
スクラッガは不機嫌な苦笑をして前へ進み出て鎗を取り上げた。哀れな犧牲者は手で眼を蔽ひながらぢつと立つてゐた。吾々は恐ろしさに化石のやうになつた。
彼は鎗をりう〳〵としごいて突き刺した。鎗の穗尖は犧牲者の身體を貫通して背中に突き出た。彼は兩手を擧げてばつたり倒れてしまつた。あたりからひそ〳〵囁く聲が起つて、次から次へと雷のやうに鳴りわたり、やがて消えてしまつた。かうして悲劇は終りをつげ、屍骸はそこに横はつた。
「ふむ、立派な腕まへだ」と國王は言つた。「これをつれて行け」
四人の男が列から進み出て、殺された男の屍骸を運び去つた。
「けがれた血に蓋をせい。蓋をせい！」と猿のやうな女のかな切り聲が聞えた。「王樣の命令はもう果されたのぢや」
すると一人の娘がカーテンの後から石灰を入れた甕を持つて前へ進み出で、赤い血のあとへそれを振り掛けて見えなくした。

サー・ヘンリイはこれを見て烈火のやうに憤つてゐた。實際吾々は彼をぢつとさせて置くのに大へん骨が折れた。
「坐りなさい、お願ひだから」と私は囁いた。「へたをすると吾々の命が危いですから。」
彼はやつとのことで我を折つて靜かになつた。ツワラは悲劇の跡が取り片付けられるのを待つて、吾々に向つて言つた。
「色の白い客人、貴方がたは何處から、何をしにこの國へお出でなさつたか知らんが、ようお出でなさつた！」
「これはこれは、ククアナ王ツワラ、御機嫌よう」と私は答へた。
「色の白い客人、貴方がたは何處から何をしにお出でなさつた？」
「吾々は星の國からこの國を見物に來たのです。」
「ずゐ分遠いところから、つまらぬものを見物にお出でなさつたな。であの男もやはり星から來たのかな？」と言ひながら彼はウンボパを指さした。
「さうです、星の國にも矢張りこの國の人と同じ色をした人間が住んでゐるのです。だが星の國のことなんかもう訊ねないでほしい。」
「貴方がたは大きなことを言ひなさるが、こゝは星の世界からは遠いのですぞ、わしが貴方がたを今殺された兵隊のやうな目にあはせたらどうなさる？」

私は大聲を出して笑つた。その實心の中では笑ふどころでなかつたのであるが。
「おゝ國王！　熱い石の上を歩くときは、足を燒かぬやうに氣をつけるがよろしいぞ。鎗は柄の方を持たぬと手が切れますぞ。吾々の髮の毛にちよつとでも手をふれたら貴方の身は破滅ですぞ」かう言ひながら私はインフアドオスとスクラッガとを指さして更に言葉をつけたした。「この人たちは吾々の事を何と言ひました？　貴方は吾々のやうな人間を見たことがありますか？」と言つて私はグッドを指さした。
「成程さう言ふ人は見たことはない」と國王はグッドをよく見ながら言つた。
「あの人だちは吾々が遠くから生き物を殺すことを話しましたか？」と私は續けて言つた。
「そのことは聞いた。がわしは信じん、わしにその殺すところを見せて貰ひたい。向うに立つてゐる奴を誰か一人殺して見せて貰ひたい。さうすればわしも信じる」と言ひながら彼は廣場の向う側を指さした。
「いや、吾々は正當に罰する時の外は人間の血を流さない。だが、たつてお望みとあるなら、貴方の家來に命じて、城門から牛を追ひ出しなさい。さうすれば二十歩と行かぬうちにその牛を殺して見せる。」
「いゝや、人間を殺さなくちや、わしは信じん」と國王は冷笑しながら言つた。
「よろしい」と私は冷かに答へた。「では國王、貴方が自分であちらへ歩いて行きなさい！　さうすれ

ば門まで行きつかない中に貴方を殺して見せる。それがいやなら貴方の息子のスクラッガをやりなさい！」實際私はその時、スクラッガを射つたら、どんなに愉快だらうと思つてゐたのだ。
これを聞くとスクラッガは吼えるやうな叫び聲をあげて小舍の中へ駈け込んだ。
ツワラは苦々しげに眉をひそめた。
「牛の仔を追ひ出せ！」と彼は言つた。
二人の男がすぐに走つて行つた。
「ヘンリイさん、今度は貴方が射ちなさい。あの野郎に魔法使ひは私だけでないことを見せてやりたいのです」
そこでサー・ヘンリイは、エキスプレス銃を取つて身がまへた。
「うまく射てると良いがなあ！」と彼は唸つた。
「うまくやらなきやいけませんよ」と私は答へた。「最初の彈丸で失敗つたら、もう一つ放ちなさい。照尺を百五十碼にしておいて、獸が横向きになるのを待つてゐるんです。」
それからしばらくたつと、一頭の牡牛が部落の門の方へ向つてまつしぐらに駈け出した。そして恰度門の處まで來ると、人が澤山ゐるので吃驚してこちらを向いて一聲吼えた。
「さあ今ですよ！」と私は囁いた。
彼は銃を取り上げた。

ズドン！　牛は肋骨を討たれて宙を蹴つて仆れた、數千の觀衆から感歎の吐息が洩れた。

私は冷かに後を振り返つた。

「どうです國王、私は嘘をつきましたか？」

「いゝや本當だ！」と彼は少々怖氣づいた聲で答へた。

「よく聞きなさい、ツワラ！」と私に續けて言つた。「吾々は貴方と戰爭をしに來たのぢやないのだ。」と言ひながらウインチエスター連發銃を取つて「この銃を貴方にさしあげる、これで何でも殺すことが出來るが、人間を殺してはなりませんぞ。これを人間に向けると自分が死にますぞ。これから私が試して見ませう。あの兵隊の持つてゐる鎗を、こちらへ、鎗の身を向けて地面に立てさせなさい。」

直ちに鎗は地面に立てられた。

「よく見てゐなさい！　これからあの鎗を射つて見せる。」

私はよくねらいを定めて曳金を引いた。彈丸は鎗の刃にあたつてそれを粉微塵に碎いてしまつた。

再び感歎の吐息が洩れた。

「さてツワラ、吾々はこの魔法の銃を貴方にさし上げる。だが星の世界の魔法を地上の人間に向けたらどうなるかよく氣をつけるんですよ！」かう言つて私は彼に銃を渡した。

國王は非常に要心してそれを受け取つて脚下に置いた。恰度その時に、小舍の蔭から痩せしなびた猿のやうなものが匍ひ出して來るのが見えた。それは始めは四ん匍ひになつてゐたが、國王の坐つて

ゐる處まで來ると、足で立ちあがつて毛皮のかつぎを拂いのけて、見るも怖ろしい形相を現はした。それは非常に年をとつた女のやうであつた。ひどくしぼんでゐるのでふかい黄色い無數の皺がよつてゐたけれども、顏の大きさは赤ん坊位の大きさであつた。この皺の中に一つの裂け目がおちこんで眼はまつ白な眉毛の下でキラ〳〵と怪しく光つてゐた。鼻は取りたてゝ言ふほどのものはなかつた。實際二つの大きな眼さへなかつたら、この顏は干乾びた屍骸の顏そつくりであつた。ブラの頭の皮のやうに伸びたり縮んだりしてゐた。口の下には尖つた頤が外側へまがつてゐた。頭はすつかり禿げてゐた。しかし頭の皮はコ

この悚然とするやうな怖ろしい顏をした老婆は、しばらくぢつと立つてゐたが、やがて一時もある爪のついた干乾びた手を伸して、それをツワラ王の肩におき、鋭い金切聲を出して言つた。

「王樣よ聞きなされ！　軍人共も聞け！　ククアナ人の住家なる山も野も川も聞け！　空も日も雨も嵐も霧も聞け！　生きとし生けるものは悉く聞け！　死して甦りてまた死するすべてのものも聞け！　命の精がわれに乘り移つた！　われは豫言する！　豫言する！　豫言する！」

その言葉は微かな號泣になつて消えていつた。それを聞いた人々の心は恐怖のために縮みあがつたやうに見えた。吾々も悚然とした。

「血！　血！　血！　血の川！　そこらぢゆうが血だらけだ！　血が見える！　血の匂ひがする！　血の味がする！　鹹からい！　血が地上をまつ赤に流れる！　空から雨のやうに降つて來る！

「跫音！　跫音！　遠くから白人の跫音が聞える。地が震ふ、大地が其主人の前でぶる〳〵震ふ！
「良い血だ。まつ赤な血だ。今出たばかりの血のやうに腥くはない、ライオンがそれを舐めて吼える！　兀鷹がそれで翼を洗つて喜び叫ぶ！
「わしは年をとつてゐる。わしは老人だ！　わしは澤山の血を見て來た。は！　は！　だが死ぬまでにもう一度血を見て喜ぶのだ！　わしをいくつだと思ふ？　お前達の父親もわしを知つてゐた。その父親もわしを知つてゐた。その父親の父親もわしを知つてゐた。わしは白人を見たことがある。白人の望みを知つてゐる。わしは年をとつてゐる。が山はわしよりももつと年をとつてゐる！　あの街道を造つたのは誰ぢや言つてくれい？　岩に繪を描いた人は誰ぢや教へてくれい！　向うに竪穴を見下してゐる三つの山をこさへたものは誰ぢや知らせてくれい！」と言ひながら、吾々が前夜見た嶮しい三つの山を指さした。
「お前達には判らないが、わしには判つてゐる。白人はお前達より前からゐたのぢや！　そしてお前達よりも後までゐるのぢや！　そしてお前達を亡ぼしてしまふのぢや！　さうぢや！　さうぢや！
「魔術の巧みなら何でも知つてゐる、強い、恐るべき白人は何をしに來たか？　おゝ國王！　そなたの額にある光つた石は何ぢや？　そなたの鎧は誰がこしらへたのぢや。そなたは知らぬがわしは知つてゐる。この老婆は、この物識りは、この魔法使は知つてゐる！」

それから彼女は禿げた頭を吾々の方へ向けた。「お前達は何をしに來なさつた？　星の國の、さうぢや星の國の白人がた？　なくなつた人を捜しなさるのか？　その人は此處には居らぬ！　こゝには居らぬ！　ずつと昔からこの土地を踏んだ白人は無いのぢや！　たゞ一度しか無いのぢや！　そしてその人はこゝを去つて死んでしまつたのぢや。お前達は光る石を探りにお出でなさつたのぢやらう。わしはそれを知つとる。わしはそれを知つとる。だがお前たちがそれを見出すときにはもう血が干乾びてゐる。だから、お前達は來た道を引返しなさるか、それとも此地に留まりなさるか？　は！　は！　は！
「それからそこに黑い色をして威張つてゐるお前！」と彼女は干乾びた指でウムボバを指ざしながら言つた。「お前は誰ぢや？　そして何が欲しいのぢや？　光る石ではなからう。黃色い金でもなからう、お前の心臟の血の匂ひがわかるやうに思ふ。帶を解け！　――」
こゝまで云つたときこの不思議な老婆の顏はひきつつた。そして彼女は癲癇を起して泡を噴きながら地上に仆れ、そして小舍の中へ連れて行かれた。
國王は慄へながら立ちあがつて手を振つた。すると忽ち軍隊は解散しはじめ、十分間も經つと、吾吾と、國王と、數名の從者とを除いて廣場は空つぽになつた。
「色の白い客人！」と彼は言つた。「わしは貴方がたを殺さうと思ふのぢや。ガゴオルが妙なことを言つたから！」

私はからくと笑つた。「氣をつけなさるがいゝぞ國王、吾々は、さう易々と殺されやしないぞ。あの牛を見なさつたか、あんたはあの牛のやうになりたいのか？」

國王は眉をひそめた。「國王などを脅すものぢやありませんよ！」

「吾々は脅してゐるんぢやありません。眞實の事を云つてるんだ。吾々を殺さうとして見なさい。さうすれば眞實か嘘かわかるから。」

巨大な蠻人は額に手をのせて考へ込んだ。

「おとなしく行きなさい」とたうとう彼は言つた。「今夜は大舞踏會があるからそれをお目にかける。今夜のところはわなにかけるやうなことはしないから心配しなさるな。しかし明日になつたらまた考へて見る。」

「よろしい」と私は無雜作に答へた。そして吾々はインファドオスを連れてたち上り、吾々の小舍の方へ歸つて行つた。

第十章　魔法狩り

吾々は小舍へ着くとインファドオスに吾々と一緒に小舍の中へはひるやうに言つた。

「インファドオス、吾々はあんたに話したいことがある」と私は言つた。

「どうぞ言つて下さい。」

「インファドオス、ツワラ王はずゐぶん殘忍の人のやうに見えるな。」

「さうで御座いますよ。あの人の殘酷のために國中は泣いてゐるので御座います。今夜御覽になれば判りますが、今夜は魔法狩りがあるので御座います。そして大勢の者が魔法で喚ぎ出されて殺されるので御座ります。誰一人の命だつて、安全ぢやないのですよ。國王が或る男の家畜や、女房を欲しがつたり、或はまた、或男が叛反をけしかけやしないかと疑つたりしてゐると、あんた方が御覽になつたあのガゴオルか、またはあの老婆に魔法を敎はつた他の魔法使どもが、その男を喚ぎつけて、その男を殺して終ふのです。今夜の月が消えてしまふまでには、澤山の人が死ななくちやならんのです。いつでもさうでした。ことによると私も殺されるかもしれません。これまで私が助かつてゐたのは、私は戰爭が上手で外の兵隊から愛されてゐたからです。だがこれから先きどれだけ生きのびられるか私にもわかりません。國中がツワラ王の殘虐をこぼしてゐます。あの人とあの人の亂暴なやりくちとを憎んでゐるので御座ります。」

「では人民はなぜ彼を倒してしまはんのだね、インファドオス？」

「そりやあの人は國王ですからな。それにあの人が殺されりやスクラッガが代つて王位につきますが、そのスクラッガは又父親のツワラに輪をかけた腹黑です。もしスクラッガが王になればツワラよりももつと酷い虐政を布くにきまつてゐます。それにしてもイモッが殺されずにゐれば、或ひはまた、その子のイグシノが生きてゐたらこんなことはなかつたであらうに、をしいことに二人とも死んでしま

ひました。」

「どうしてあんたはイグノシの死んだことを知つてゐるのです？」と吾々のうしろから一つの聲が言つた。誰だらうと思つて驚いて振り返つて見ると、それはウンボバであつた。

「何を言ふんだね、お前は。誰がお前に話をせいと言つたかね？」とインファドオスはたづねた。

「まあ聞きなさい、インファドオス」と彼は答へた。「あんたに一つ話をきかしてあげる。もう何年も前に、イモッ王はこの國で殺されて、イモッ王の妻は子供のイグノシをつれてこの國から逃げたとあなたはいふのですね？」

「左樣。」

「その女と子供とは山の上で死んだと言はれてゐるのですね？」

「その通り。」

「ところが、此の母子は死んではゐなかつたのですよ。彼等は山を越えて、放浪者の群に交つて沙漠を横ぎり、水や草や木のあるところまで辿りついたのです。」

「まあ聞きなさい。二人の母子は何箇月も何箇月も旅をつゞけてゆくうちに、たうとう、このククアナ人と同じ血統のアマズル人といふ人間の住んでゐる國へ着き、そこに滯在してゐるうちに母親は死んでしまつたのです。そこで子供のイグノシは、まだ放浪者になつて、白人の住んでゐる不思議な國を旅をして歩き、それから何年もの間白人の學問を學んだのです。」

「そりや面白い話だね」とインファドオスは疑はしさうに言つた。

「それから何年かの間彼はその地で人に使はれたり、兵隊にはひつたりして過してゐたが、心の中では、母親から聞いた自分の身の上のことを一刻も忘れず、死ぬまでにどうかして、生れた國へ歸つて自分の臣民を見たいものだと思つてゐたのです。そのうちに時が來たのです。彼は、この國へゆきたいといふ白人の一行に會つて、その一行に加はつたのです。この白人たちは、行方不明の一人の人をたづねて、燒けるやうな沙漠を越えて、ククアナの國へ來て、あんたに會つたのですよ、インファドオス。」

「お前はたしかに狂人だ！」とこの老將は吃驚して言つた。

「さう思ふなら、證據を見せませう、叔父さん。僕はククアナの正當な國王イグノシです！」

かう言ひながら、彼はするりと腰帶を辷り落して、吾々の前に裸體で立つた。

「見なさい！」と彼は言つた。「これは何です？」とかう言つて彼は腰のまはりに青く刺青してある大蛇を指した。蛇は彼の腿と腰との境目のところで、口をあいてその尻尾を咬へてゐた。

インファドオスは眼の玉が飛び出るほどに驚いて見てゐたが、やがてその場に跪づいた。

「これはお見それした！　これはわしの兄の子だ、國王だ！」と彼は叫んだ。

「僕がさう言つたぢやありませんか、叔父さん？　僕は今ではまだ國王ぢやありませんが、これから、あなたの助けをかりて、それからこの勇ましい白人の方々の助けを借りて國王になるのです。し

かし、ガゴオル婆の言ふ通りです。先づはじめには、この國に血を流さなければなりません。その時にはあの婆の血も流れることになるのですよ。あいつは僕の父を殺し、僕の母を追拂つた奴だから。さてインフアドオス、あなたは僕の兩手の中へ手を入れて僕の部下になりますか？　あなたはこれから先、僕と危險をともにして、僕を助けて、あの暴君を、人殺しを、討ち倒しますか、それともいやですか？　どちらかきめて下さい。」

老人は頭へ手をあて、考へてゐたが、やがて、起ち上つて、ウンボバ實はイグノシの方へ進み寄り、彼の前に跪いて、彼の手をとつた。

「ククアナの正當な國王、イグノシ、私はお前の兩手の中へ手を入れて、死する迄お前の臣下となることを誓ひます。お前が赤ん坊の時分にわしはお前を膝の上にのせてあやしたもんだが、こん度はこの老いた腕で、お前と自由とのために戰ふのだ。」

「さうですか、叔父さん、若し僕が勝つたらあなたはこの國で國王に次ぐえらい人になれます。敗けたところで死ぬだけでせう。それに、どの道あなたの命はさう長くはないでせう。さあ叔父さん、立ちなさい。」

「それから白人のお方々、あなた方も私を助けて下さいますか？　もし私が勝つたときは何をさしあげたらよいでせう。白い石がお望みなら、持てるだけそれを持つて行つて下さい。それで承知して下さいますか？」

私はこの言葉を通譯した。

「あの男は英國人を見損つてゐると云つてやつて下さい。」とサー・ヘンリイは答へた。「寶物もそりや結構だし、手にはひれば持つて行くが、紳士といふものは寶物のために身を賣りはしない。だが私はウンボバは好きだつたから、私の力にかなふことなら、あの男を援けてやるつもりだ。あの殘忍な惡魔のツワラと雌雄を決するのは面白い、諸君はどうです、グッド君、それからコオターメンさん？」

「無論私はあの男を援ける」とグッドは云つた。「しかしツボンを穿くことを許すことだけ約束して貰ひたい。」私はそれを通譯した。

「有難う、承知しました」とイグノシは言つた。「ではマクマザンさん、あなたも私を援けて下さいますか？」

私はしばらく考へてゐたが、手で頭を掻いた。

「ウンボバ、いやイグノシ」と私は云つた。「わしは革命は嫌ひだ、わしはおとなしい人間で、その上少々臆病者だ」——こゝでウンボバはちよつと微笑した。——「しかし、わしは友達には忠實だ。お前は吾々に忠實に仕へてくれて、下男の役目さへしてくれたのだから、わしもお前のためには一肌脱ぐ。だがい、かね、わしは商人だから自分の口すぎをしなくちやならん、だからわしは、お前がさつき言つたダイヤモンドがもしも手にはひつたら、それは頂戴するよ。それから吾々は御承知の通りへンリイさまの行方不明の弟さまを捜しに來たのだから、この方を捜すについては、お前も一つ骨を

折つていたゞきたい。」
「それは云ふまでもないことです」とイグノシは答へた。「インファドオス、僕の腰の圍りにある蛇のしるしに契つて訊ねるが眞實のことを云つて貰ひたい。本當にあなたはこの國へ白人の來たのを知りませんか？」
「ちつとも知りません。」
「もし白人が來たことがあるなら、あんたの耳にはひろわけでせうな？」
「それは確かにはひつたゞらうと思ふ。」
「只今お聞きの通り御舍弟はこの國へはお見えにならんさうです」とイングノシはサー・ヘンリイに向つて云つた。
「よし／＼」とサー・ヘンリイは吐息をしながら言つた。「あいつはこんなに遠くまでは來てゐなからうと私も思つてゐた。可哀さうな奴だ。可哀さうな奴だ。これですつかり吾々の計畫も駄目になつたんだ。だがこれも神樣の思し召しだ。」
「ところで」と私はこんな哀しい問題から話をそらさうと思つて口を出した。「正當な權利によつて國王になるのは大へん結構だが、それにはどう云ふ手段をとるのだね？」
「僕にはわかりませんね、インファドオス、あんた何か名案がありますか？」
「左樣、今夜は大舞踏會と魔法狩りとがあるから」とインファドオスは答へた。「澤山の人が魔法婆に

嗅ぎ出されて殺されるに相違ない。すると他の者は心の中でそれに同情してツワラ王の處置を憤慨するにきまつてゐる。舞踏が濟んだら私が二三の隊長に話して見る。そしてその隊長が承知さへすれば彼にそのことを部下の軍隊に話してもらふやうにする。私ははじめにそつと話して見て、お前が眞の國王だと云ふ證據を見せるために隊長どもを連れて來る、さうすれば明日の朝までにはお前の部下には二萬の鎗を持つた軍隊が出來ると思ふ。これから私は行つていろ〳〵用意をしよう。舞踏會が濟んだときまだ私が生きてゐたら、そして吾々が皆生きてゐたら。此處でまたお目にかゝつていろいろ相談をしませう。よく行つても戰爭はまぬかれませんな。」
恰度この時國王からの使が來たので吾々の話は中絶された。吾々は小舍の入口まで進んで行つて使の者共に中にはひれと命令した。すると間もなく三人の男がめい〳〵立派な鎖鎧と戰斧とを持つてはひつて來た。
「星の國の白人の方々へ國王からのお土產で御座います」と使ひの者と一緒に來た一人の傳令が云つた。
「國王に御禮を申す、よく傳へてくれ。」と私は答へた。
使ひの者が行つたあとで吾々は非常な興味を持つてその鎧を調べて見た。それは驚くべき立派な鎖鎧であつた。下に置くと兩手で握るには少し大きすぎる位の鎖の塊りになつてしまつた。
「これはこの國で拵へるのかね、インファドオス？」と私は訊ねた。「ずゐ分綺麗なものだね。」

「いゝえ、これは私共の先祖から傳はつたもので御座います。誰が造つたものかわかりません。それにもう少しゝか殘つてゐませんので、今では王族の者しかこれを身につけることは出來ないのです。これは不思議な鎧で、どんな鎗でもこれを通すことは出來ないのです。これを着て居れば戰爭に行つても殆んど安全です。國王はよつぽど氣にいつた者か、ひどく恐れてゐる者にしかこの鎧はくれないのです。よく〳〵あなたがたを恐れてゐる證據でございますよ。今夜はあなた方自身でお召しになつた方がよいでせう。」

その日の殘りの部分を吾々は靜かに休み、且つ興味あるその場の形勢を語りながら過した。そのうちに日が暮れて、澤山の篝り火が燃え出すと、闇の彼方から大勢の人の跫音や、がちや〳〵言ふ鎗の音などが聞えて來た。軍隊が大舞踏會に參列するために指定の場所へ集つて行くのだ。やがて滿月が晃晃として輝き出した。吾々が月の光りを見ながら立つてゐると、インファドオスが武裝した二十人ほどの護衛兵を連れてやつて來た。この護衛兵が吾々を舞踏會場へ連れて行つてくれるのだ。吾々はインファドオスのすゝめによつて、國王から貰つた鎖鎧を着てその上へ吾々の普通の着物を着てゐたが、驚いたことにはこの鎧は大して重くもなく、また着工合が惡くもなかつた。非常に大きな人のために造つたもの見えて、グッドと私とには少しゆるかつたが、サー・ヘンリイの偉大な體格には手套のやうにしつくりあつた。それから吾々は腰のまはりに短銃を忍ばせて、手には國王から貰つた戰斧を持つて出懸けた。

その朝吾々が國王に引見された大きな小舍の前に着くと、その小舍の圍りには二萬人ばかりの軍隊が隊伍を作つて整列してゐた。聯隊は幾つかの中隊に分れ、中隊と中隊との間には小さい道が出來てゐた。そこを魔法使があちこち歩き廻るのだ。彼等は完全に沈默してゐた。そして月の光りは林立した鎗の上に、彼等の堂々たる風姿の上に、風に搖く羽根飾りの上に、さま〴〵の色をした楯の上に、降りそゝいでゐた。

「これでこの國の軍隊は全部だらうな？」と私はインファドオスに云つた。

「いゝえ、これで三分の一ですよ」と彼は答へた。「毎年、こゝへ出るのは三分の一です。あとの三分の一は人殺しがはじまつたときに、騷ぎが起るのを防ぐために、外側に集つてゐるのです。それから一萬人の軍隊は宮殿の周圍を護衛して居り、殘餘の軍隊は地方の村落を守備してゐるのです。」

「みんな默つてゐるね。」とグッドは云つた。

私はそれを通譯した。

「死の影が頭の上を氣味わるくうろついてゐると誰も物などは言へないのです」とインファドオスは陰氣に答へた。

「澤山殺されるのかね？」

「澤山殺されるのです。」

「まるで費用を惜まずにかけた、格闘の見世物を見るやうですね」と私は他の者に云つた。

サー・ヘンリイは身を慄はした。グッドはもう出て行きたいと言つた。
「吾々も危險なのだらうか？」と私はインファドオスに訊ねた。
「それはわかりませんね。しかし恐れるには及びません。今夜一晩生き伸びさへすればもうしめたものです。軍隊は國王に不平を鳴らしてゐますからね。」
その間に吾々は廣場の中央の方へ進んで行つた。そこには數脚の腰掛が置いてあつた。吾々が進んで行くともう一組の一行が小舍の方からこちらへやつて來るのが見えた。
「あれはツワラ王と息子のスクラッガと、ガゴオル婆とです。一しよについて來る連中は、今夜人を殺す奴等なんです」と言ひながらインファドオスは十二人ばかりの巨大な物凄い顏つきをした壯漢の群を指さした。彼等は片手に鎗を持ち、片手に重い棍棒を持つてゐた。
國王は眞中の腰掛けに着席し、ガゴオルはその脚下にうづくまり、他の者は國王の後に立つた。
「これは、これは、ようこそ、色の白い客人」と吾々が傍へ行くとツワラは叫んだ。「さあ腰をお掛けなさい。貴重な時間を空費してはなりません。夜は短かいですからな。でも恰度良いところへお出でなさつた。これから素的な見世物が見られますよ。あたりを御覽なさい」と彼は意地惡さうな一つの眼をきよろりとまはして整列してゐる軍隊を見まはした。
「こんな光景を見たことがありますか。どうです、惡い事をした奴は天の審判を恐れてブル〳〵慄へてるぢやありませんか？」

「はじめ！　はじめ！」とガゴオルが鋭い金切り聲を出した。「獵狗が飢ゑて食べ物を欲しがつて吠えてゐる。はじめ！　はじめ！」
しばらくの間四邊は水を打つたやうに靜まり返つた。
國王は鎗をあげた。すると突然二萬人の足がまろで一人の足のやうに上げられて再び地面に下りた。これが三四回繰り返され、堅い地面もそのために地震きした。その時ずつと遠くの方で一人の人間の悲しさうな歌聲が起つた。その最後の文句は次のやうな文句であつた。
「女の腹から生れた人間の運命はどうなる？」
すると凡ての人の咽喉が鸚鵡返しに答へた。
「死！」
その中にだん〳〵多くのものがその聲に和して歌ひはじめ、たうとう全軍隊が合唱をはじめたので、歌の文句はちつとも聞きとれなかつた。或る時は戀歌になり、或る時は軍歌になり、最後には死の歌になつて胸を裂くやうな號泣に終つた。
再び廣場は沈默に返つた。が再びその沈默は國王が手を擧げたために破られた。すると忽ちばたばたと音が聞えて、軍隊の中から奇妙な恐ろしい姿をした人間の群が吾々の方へ走つて來た。近寄つて來るのを見ると、皆それは年取つた女で、白髮を後へ流してゐた。その白髮には魚の體から採つた小さい水胞の飾りがついてゐた。顏は白と黃色との繪に塗られ、蛇の皮を脊にたらし、腰の圍りには人

間の骨でこしらへた輪をガチヤ〳〵さしてゐた。そしてめい〳〵しなびた手に小さな叉のついた杖を持つてゐた。皆で十人であつた。彼等は吾々の前へ來ると立ち止つて、その一人が自分の持つてゐる杖で蹲つてゐるガゴオルの方をさして叫んだ。

「お母さん！　年取つたお母さん！　皆まゐりました！」

「よし！　よし！　よし！」と老婆は答へた。「お前達の眼は見えるかね？　暗いところが見えるかね？」

「お母さん見えます！」

「よし！　よし！　よし！。お前達の耳はあいてゐるかね？。舌で言はない言葉が聞えるかね？」

「お母さん聞えます！」

「よし！　よし！　よし！　お前達の五官は覺めてゐるかね？　お前達は血の臭ひがわかるかね？　この國から王樣にはむかふ惡者を淨めることが出來るかね？　わしが智慧と魔法とを授けてやつたち前たちに、上帝の審判ができるかね？」

「お母さんできます！」

「では行け！　ぐづ〳〵するな、兀鷹ども。色の白い客人が早く見たがつてうづ〳〵してゐなさる、早く行け！」

ガゴオルの恐ろしい手下どもは氣味の惡い叫び聲をあげて、腰の圍りに干乾びた骨を、ガチヤ〳〵

させながら、八方へ散らばつて軍人の群の中へ潛り込んだ。吾々は皆のものを見てゐる譯にいかないので、一番近くにゐる魔法婆だけを見てゐた。彼女は軍隊の群から五六歩ばかりのところで立ち止つて、無氣味な踊りを踊り初めた。信じられないほどの速さで、ぐる〳〵廻りながら「惡者を嗅ぎつけた！」「母親殺しが傍にゐる！」「王樣に邪心を持つてゐる者が側にゐる！」等と叫んだ。

彼女の踊りは益々速くなつて行き、昂奮の餘り齒を喰ひしばつて泡を吹き、眼が顏から飛び出しさうになり、肉は目に見えるほど慄へて來た。突然、彼女は獵犬が獲物を搜しあてたときのやうに、ぱつたり踊りをやめてかたくなり、杖をのばして前にゐる軍隊の方へそろ〳〵伺ひ出した。彼女が近づいて來ると、軍人どもは平素の大膽さを失つてしまつて、彼女からみじろぎした。吾々は恐ろしさと怖いもの見たさで、息を殺して彼女の一擧一動を見てゐた。

突然、最後が來た。彼女は氣味惡い叫びをあげながら飛び上つて、叉のある杖で一人の眷の高い軍人に觸つた。すると忽ちその兩隣りにゐた二人の仲間の軍人が、この男の兩腕を擒へて國王の方へ連れて行つた。

彼は抵抗はしなかつた。しかし彼の手足は痙攣したやうにひきつけ、手に持つてゐた鎗は地上に落ち、指は生れたばかりの子供の指のやうに自由がきかなくなつた。

この男がやつて來ると二人の獰猛な死刑執行人が前へ進み出て、命令を待つもの〻やうに國王を見上げた。

「殺せ！」と國王が言つた。
「殺せ！」とガゴオルが叫んだ。
「殺せ！」とスクラッガが嗄れ聲で言つた。
この言葉が殆んど終らぬ中に恐ろしい處刑が行はれた。一人の男は犧牲者の心臓へ鎗を突き刺し、他の男は大きな棍棒を腦天へ打ち下した。
「一人！」とツワラ王は數へた。すると死骸は五六歩さきへ曳きずつて行かれて、そこに投げ棄てられた。
これが終らぬうちに、又次の犧牲者が屠殺場へ連れて行かれる牛のやうに連れられて來た。今度の犧牲者は死んで仆れた。
は豹の皮の外套をつけてゐるところから見ると、身分のあるものらしかつた。再び恐ろしい命令が下され
「二人！」と國王は數へた。
かくて恐ろしい遊びは續いて行き、かれこれ百人ばかりの屍體が吾々の後に列になつて横はつた。
私はシーザーの格鬪競技の話やスペインの鬪牛の話を聞いたことがあるが、それ等のものもククアナの魔法狩りと比べると半分も恐ろしくはないだらうと思ふ。格鬪競技やスペインの鬪牛は、せめて見物人の樂しみにはなるが、この魔法狩りはそれとは譯が違ふのだ。どんなにひや〳〵することの好きな人だつて、この次には自分の番かも知れんなぞと思つてゐた日にはたまつたものでない。

一度吾々は立ち上つて諫めようとしたが、ツワラは頑として肯かなかつた。
「法律は嚴格に適用しなければなりません。この犬どもは惡い奴なのです。惡い奴が死ぬのは國家の爲ですからな」と彼は答へた。
十時半頃にこの騒ぎは一まづ歇んだ。魔法婆どもは血腥い仕事に飽きたと見えて一處にかたまつたので、吾々はもう終つたのだらうと思つた。ところがさうではなく、間もなく、驚いたことには、ガゴオル婆が立ち上つて、杖にすがりながらよろ〳〵と廣場へ出て來た。この恐ろしい禿げ頭の老婆が寄る年波に殆んど二重になつたからだに、徐ろに力を集中して、ぐる〳〵廻つてゐる光景は物凄いとも氣味惡いとも言ひようがなかつた。彼女はあちこち走りまはつてゐたが、やがて或る聯隊の前に立つてゐた背の高い男を杖で觸つた。その時、聯隊の中にはうめき聲が起つた。たしかにその男は聯隊長だつたのだ。でもやはり二人の士官が彼の兩手をとつて彼を所刑場へ連れて行き、彼は殺されてしまつた。
國王は「一百三つ！」と數へた。するとガゴオルはまた跳び上つて、今度はだん〳〵吾々の方へ近づいて來た。
「こん度はきつと吾々がやられるのだぜ」とグッドが恐怖の叫びをあげた。
「莫迦な！　莫迦な！」とサー・ヘンリイは言つた。
この老婆が踊りながらだん〳〵吾々の方へ近づいて來るのを見たとき私の心臓はほんたうに減入つ

てしまふやうな氣がした。ちらりと後を見ると、後には長い死骸の列がよこたはつてゐる。私は眩暈ひした。

ガゴオルは、まるで生きた、曲つた杖のやうな恰好をして踊りながらこちらへ近づいて來た。彼女の兩眼はぎろ〳〵と呪はしく輝いた。

彼女はます〳〵近づいて來た。場内の群衆は固唾を呑んで彼女の一擧一動を見守つてゐた。遂に彼女は起ち上つてきつとなつて吾々の方を指さした。

「誰だらう？」とサー・ヘンリイが獨り語を云つた。

だが忽ち疑問は霧れた。老婆はいきなり突き進んで來てウンボバ、いやイグノシの肩に觸つた。

「こいつだ！」と彼女は金切聲を揚げた。「こいつを殺せ！　こいつを殺せ！　こいつの胸には謀叛心がみちてゐる！　こいつを殺さんと血の川が流れる！　お、國王！　こいつを殺しなさい！」

その時ちよつと間があつたので私はすかさず口を出した。

「お、國王！」と私は席から立ち上りながら叫んだ。「この男はあなたの客人の從者だ。吾々の從者の血を流す奴は、吾々の血を流すも同じだ。私は斷然この男を保護します！」

「魔法婆のお母さんのガゴオルが喚き出したんだからこの男は殺さなくちやならん！」と國王は膨れ面をして答へた。

「いや殺させぬ！」と私は答へた。「この男に指一本でも觸れたらその者を殺してしまふ。」

「きやつを擒へろ！」とツワラは處刑人に怒鳴つた。すると處刑人どもは吾々の方へ進んで來て、もじもじしてゐた。イグノシは鎗を取上げて、そんなにやすつぽく命を賣つてたまるものかと言ふやうな樣子をしてゐた。

「さがれ、犬ども！」と私は叫んだ。「この男の髮の毛にでも觸つたが最後、貴樣等の王の命はないぞ！」と言ひながら私はツワラにピストルを向けた。サー・ヘンリイもグッドもピストルを取り出した。サー・ヘンリイは處刑人の首長に銃口を向け、グッドはガゴオルの方へ銃口を向けた。

ツワラは私の銃口が、彼の胸のあたりへまつすぐに向けられてゐるのを見て、眼に見えるほど慄へた。

「さあどうだ、ツワラ！」と私は言つた。すると彼は「まあ魔法の筒はしまひなさい。今日はあんたがたを款待するやうに約束したのだからこの男は許すことにしよう。あんた方を恐れてゐるのぢやないのですぞ、おとなしく歸りなさい。」と言つた。

「よろしい」と私は無雜作に答へた。「吾々は人殺しを見るのには飽きて、眠くなつて來た。」「踊りはもう濟んだのかね？」

「もう濟んだんだ」とツワラは不機嫌に答へた。そして長い死骸の列を指ざしながら。「この死犬どもを兀鷹に投げてやれい！」と言つた。

やがて軍隊が解散し初めたので吾々も立ち上つて小舍へ歸つた。

小舍へ歸つてランプに火をつけて坐ると、ウンボバは吾々に向つて涙を流しながら言つた。「有難う御座いました皆様。この御恩は決して忘れはしません。」

「ところでインファドオスはどうしたんだらう」とグッドが言つた。

「今に來ますから待つてゐませう」とウンボバは答へた。

そこで吾々は煙草に火をつけて待つた。

第十一章　天の助けの月蝕

長い間、かれこれ二時間もの間、吾々は默つて坐つてゐた。餘りに恐ろしい光景を見たので吾々は物も言へなかつたのだ。そのうちに恰度吾々が寢ようと思つてゐたところへ、どや〳〵と跫音が聞えた。入口にゐる番兵が誰何してゐるらしかつた。しかしこれも無事に濟んだと見えて、跫音はずんずん近づいて來て、やがて、インファドオスは五六人の嚴めしい顏をした士官を連れてはひつて來た。

「皆様！　それからククアナの正當な國王イグノシ！　私はお約束通り、この方々を連れて參りました。」と言ひながら彼は首長等を指ざして言つた。

「この方々はいづれもその命令のもとに手足の如く動く三千宛の手兵を持つて居られます。私は自分の見たこと、聞いたことをこの人達にお話しゝておいたから、この人達にもお前の腰の圍りについてゐる聖蛇のしるしを見せてお前の身の上話を聞かせて上げなさい、イグノシ！　さうすればこの人達

はお前の下についてツワラ王に反逆するかどうかを決めなさるだらうから。」

返事をするかはりにイグノシは、また彼の腰帶を解いて、腰の圍りに刺青してある蛇を見せた。首長等はかはるがはる側へ寄つて薄暗いランプの光りでそれを調べて一言も言はずに引き下つた。

するとイグノシは腰帶をつけて、彼等に向つて今朝の物語りをもう一度繰り返した。

「お聞きの通り、かういふ譯なのですが、どうです皆さん、この人を助けて父親の王位に卽かせて下さる、かそれともお嫌ですか？」と話の終るのを待つてインファドオスは言つた。「人民はみなツワラを呪うてゐます。人民の血は泉から出る水のやうに流れてゐます。今夜もその血の流れるのを見ました。私がない〳〵當にしてゐた二人の首長も今では野獸の餌食になつてゐます。あなた方もぐづ〳〵してゐるとそれと同じ目に逢うでせう。で、どうしますか？」

六人の中で一番年長の、脊の低い、ずんぐりした、白髮の軍人が前へ進み出て答へた。

「あなたの仰言るとほりです。私の兄弟も今夜殺されてしまひました。しかし、これは一大事ですから、うかと信じる譯にもいきません。こちらの計畫が成就する前に、血の川を流さなくちやなりません。まだ多くのものは國王方へつきますからな。人間といふものはまだ昇らない太陽よりも、今空に輝いてゐる太陽を崇拜するものですからな。ところで、星の世界からおいでになつたこの色の白い客人は、大變魔法がお上手で、イグノシを助けて居られると云ふことだが、若しイグノシが正當な國王であるなら、この方々にそのしるしを示して、吾々にも國民にも見せて戴きたいものです。さうすれ

ば人民は白人たちの魔術に感歎して吾々の味方になるでせう。」
「諸君は蛇のしるしを見たではないかね？」と私は言つた。
「それだけぢやいけません、蛇はあの人の子供の時分からあるのですから、その他にしるしを見せていたゞきたい。私どもはしるしを見るまでは動きません！」
一同の者もこれに同意したので、私は弱つて、サー・ヘンリイとグッドとを振り返つて、此の場の事情を説明した。
「良い考があるから、ちよつと考へさしてくれとあの連中に言つて下さい」とグッドが言つた。
私がその旨を告げると首長等は退席した。彼等が出て行くとグッドは藥のはひつてある小函を開けて手帳を取り出し、その表紙の見返しについてゐる暦のところをあけた。「明日は六月四日ですな？」と彼は言つた。
吾々は日日はよく勘定してゐたので、さうだと答へた。
「しめた！　これを御覽なさい！　――『六月四日グリニッチ時八時十五分より月蝕皆既初まる。南アフリカのテネリフより見ゆ……』これですよ、彼等に明日の晩、月を暗くして見せると言つて見なさい！」
これは素的な思ひつきだつた。たゞ心配なことは、グッドの暦が正確かどうかと言ふ點であつた。若しこんなことで間違つた豫言でもしたものなら、吾々の化の皮は剝がれてしまひ、イグノシがクク

アナの王位につく機會もなくなつてしまふ譯だ。
「その暦は大丈夫かね？」とサー・ヘンリイはグッドに言つた。
「間違ひつこはありませんよ」と此の間に何か一生懸命に手帳に書いてゐたグッドは答へた。「月蝕の時間に間違ひのあつたことなどはこれまでにだつてありませんからね。それに特に南アフリカで見えるとまで書いてあるのですもの。私は今吾々のゐる場所の經度をほゞ見當をつけて計算してみましたが、それによると、こゝでは明日の晩のほゞ十時頃から月蝕がはじまつて、十一時半頃まで續くことになります。一時間半程の間は全く暗くなる譯です。」
「ではまあやつて見るか！」とサー・ヘンリイは言つた。
私も心許なくは感じたがそれに同意した。といふのはもし雲つた晩でゞもあつたら困るからだ。しかし一かばちかやつて見ることにして、吾々はウシボバに首長等を呼んで來るやうに言つた。彼等が歸つて來ると私は彼等に向つて次のやうに言つた。
「ククアナ軍の首長諸君、それからインフアドオスもよく聞きなさい。吾々はみだりに吾々の力を示すことは好まんが、今は一大事の場合止むを得んから、皆の者に見えるやうなしるしを示すことにするぞ。こちらへ來なさい」と言ひながら彼等を小舍の入口へ連れて行き、まさに沈まんとしてゐる月を指さした。
「あれは何だね？」

「あれは沈みかゝつてゐる月です」と一行の代表者が答へた。
「あの月が沈まない中に月の光りを消すことが人間の手で出來るかね？」
すると彼は少し笑つて言つた。「途方もない、そんな事は人間業では出來ません。月は人間よりも強いのですから。」
「ところが明晩夜中から二時間半ほど前に、吾々は一時間半ばかりの間あの月を消して見せる。地上をさつ暗にして見せる。それがイグノシがククアナの王であるしるしだ。さうすれば諸君は滿足するだらうな？」
「はつ！　その時には吾々は滿足致します」と老首長は微笑しながら云つた。皆の者も微笑した。
「實は明日の日没から二時間後にッワラはお客様方を招待して娘どもの踊りを御覽に入れることになつてゐます」とインファドオスが言つた。「そして踊りがはじまつてから一時間たつと、ッワラが、その中から一番美しいと思ふ娘を向うの山に坐つてこちらを見てゐる『無言の神』への犧牲として息子のスクラッガに殺させることになつてゐます」と言ひながらソロモン街道の終點になつてゐるといふ妙な形をした三つの峰を指ざした。「その時にお客様がたが月を暗くして、その娘の命を救つて下されば人民はすつかり信じてしまひます。」
「さうだ、なるほどさうすれば人民は信じる！」と老首長は微笑をうかべながら言つた。
宮殿から二哩ばかり離れてゐるところに」とインファドオスは續けて言つた。「新月のやうな陰な

した小山があります。私の部下の一聯隊とこの方々の指揮してゐなさる三聯隊とがそこに駐屯してゐます。それに、朝になるともう二三聯隊そこへ集まるやうに手筈をしておきます。で、若しあなた方が眞實に月の光りをお消しになるならば、その闇に乘じて私はあなた方を宮殿からそこまでお連れ申します。さうして私どもはッワラ王に對して戰を開くことに致します。」
「それでよし！」と私は言つた。「これから少し眠つて、魔法の支度をせねばならぬから、もう行きなさい。」
インファドオスは起ち上つて吾々に敬禮して首長等を連れて出て行つた。
「皆さん」と彼等の出て行くのを待つてイグノシが言つた。「あなた方は眞實にそんな不思議なことがおできになるのですか？　それともあの連中に出鱈目を言つたのですか？」
「確かに出來ると思ふんだよ、ウンボバ、いやイグノシ。」
「妙ですな。あなた方が英國人でなければ私は信じないのですが、英國の紳士は謊をつかんと言ふことですからね。若し今度の事がうまくいつたら私はきつとお禮をいたします。」
「イグノシ、たつた一事だけ約束してくれんか」とサー・ヘンリイは言つた。
「何でも約束します。どういふ約束です？」
「それはかうだ。若しお前がこの國の王になつたら、ゆうべみたやうな魔法狩りだけはよしてほしいのだ。裁判もせずに人間を殺すことだけは止してくれんか？」

私がそれを通譯するとイグノシはしばらく考へてゐたあとで答へた。
「黑人の習慣と白人の習慣とは違つてゐますし、黑人は人間の命を餘り尊重してはゐないのですが、私はその事を約束しませう。私の力でできる限り魔法狩りは禁止して、審問も裁判もせずに人を殺すことのないやうにしませう！」
「ではそれで約束は濟んだから少しやすまう」とサー・ヘンリイは言つた。
吾々はすつかり疲れてゐたので、すぐにぐつすり眠つてしまひ、十一時頃にイグノシが起してくれるまで眠り續けた。それから、吾々は起き上つて顏を洗ひ、腹一杯朝の食事をした。それがすむと、吾々は小舍の外を散歩して、ククアナ人の小舍の構造を調べたり、女の習慣を見たりした。
「月蝕がうまくあればいゝがなあ」とサー・ヘンリイはやがて言つた。
「若しなかつた日には大變だ」と私は答へた。「吾々が普通の人間であるつてことが判つたら、あの首長等はすぐに國王にすつかり話をするだらう、その時にはとんだ月蝕が起りますからな。」
そのうちに陽が沈んで、一二時間も經つと、八時半頃になつてツワラの使がやつて來た。そして、これから愈々娘どもの踊りが初まると告げた。
吾々は急いで鎖鎧をつけ、鐵砲と彈藥とを持つて大膽に出懸けて行つた。しかし私は心の中では恐ろしさに慄へてゐたのである。宮殿の前の廣場は昨夜とはがらりと樣子が變つてゐた。今日は兵隊の代りにククアナの娘どもが澤山隊をなして集つてゐた。着物はあまり著飾つてゐなかつたが、顏に花

冠をかむり、片手に棕櫚の葉をもち、片手には高い白百合の花を持つてゐた。ツワラ王はそのまん中に座を占め、その脚下にはガゴオルが蹲まつて居り、インファドオスと、スクラッガ少年と、外に十二人の護衛兵とがそばに立つてゐた。その外に二十人許りの首長らしい士官も列席してゐたが、その中には昨夜會つた連中も大部分まじつてゐた。
ツワラは、吾々には見かけだけは丁寧に挨拶したが、一つの眼で意地惡るさうにウンボバを睨んでゐた。
「ようこそ、星の國のお客さん！」と彼は言つた。「今夜の見ものは昨夜のとはまた違つたものです、昨夜のやうに面白いものぢやありません。女の接吻ややさしい言葉も良いが、軍人の鎗の音や血の匂ひとは比べものになりませんからな。どうですこの中にお氣にいつた娘はありませんか。あれば遠慮なく幾人でも連れて行きなさい。」
「有難う國王、だが吾々白人は吾々のやうな白人としか結婚しないのです。あんたの國の娘さん達も綺麗だが、吾々の女房には出來ないのですよ！」
國王は笑つた。「はゝゝ、さうですか。この國にはかういふ俚言がありますがな。『色は異つても女の眼に變りはない』てね。それからまた『そばに居る女と浮氣しろ。居ない女は當にならん』といふ俚言もあります。しかし星の國では譯が違ふでせうな。白い色の人間の住む國ではどんなことだつてありますからね。だがまあそれはさうとようこそお出でなさつた。それからそこにゐる黑いのもよう

來た。ガゴオルが强情を張れば今頃はお前の體は冷たくしやちこばつてゐたところだ。お前も星の國から來て果報ものだな、はゝゝ」

「僕が死ぬよりさきにあんたを殺して見せる。僕の手足が曲らなくなるよりも前にあんたの體が硬くなつてしまふよ」とイグノシは落ちついて答へた。

ツワラはぎよつとした。「お前はなか〳〵大膽なことを言ふな、餘り高言を吐かぬがよいぞ！」と彼はがみ〳〵答へた。

「眞實を語るものは皆な大膽だ。眞實は的を外れつこのない鋭い鎗だ。」

ツワラはしかめつ面をして一つの眼をぎろりとさせたがそれきり何も言はなかつた。

「さあ踊りをはじめろ！」と彼は叫んだ。すると花冠を冠つた娘等は、隊を作つてやさしい唄を歌ひながら、棕櫚の葉と白百合の花とをてんでに振りかざして前へ飛び出した。娘等は月の光りを浴びて踊り續けてゐたが、遂に踊りをやめて一人の美しい娘が列から飛び出し、吾々の前で爪先き立ちになつてぐる〳〵舞ひはじめた。その踊りは大抵のバレットの踊り子もかなはぬほど巧みであつた。やがて彼女が力が盡きて後へ退くと、別の女が現はれて次々に同じやうな踊りを踊つた。しかし美しさから言つても、踊りのうまさから言つても、第一の娘にかなふものはなかつた。

「どれが一番綺麗だと思ひますかね。色の白い客人？」と彼は訊ねた。

「一番はじめのが美しい」と私は何の氣もなしに言つた。がすぐにそれを後悔した。といふのは、イ

ンフアドオスが一番美しい娘が犧牲にあげられるのだと言ふたのを思ひ出したからだ。

「では、あんたの心と私の心とは同じだな。あんたの眼と私の眼とは同じだな。なる程あの娘が一番美しい。だがそれはあの娘にとつちや氣の毒だな、そのために死ななくちやならんのだから。」

「さうだ、死なねばならぬ！」とガゴオルが、まだ怖ろしい自分の運命も知らずに、他の娘の群から十碼ばかり離れた處に立つて、自分の花冠から神經質に花瓣をむしつてゐた憐れな娘の方をチラリと見ながら、金切り聲で叫んだ。

「それはどうしてだね、國王？」と私はやつとの事で怒りを抑へながら言つた。「あの娘は上手に踊つて吾々を喜ばしてくれたし、其上あの娘は美しいのに、それだから殺すといふのは酷いぢやないか。」

ツワラは笑ひながら答へた。

「それはこの國の習慣ですからな」と言ひながら彼は遠くに聳えてゐる三つのみねを指ざして「向うに默つて坐つてゐる神樣は、取るべきものを取らなくちやならんのだ。わしが今日一番美しい娘を殺さなければわしの一家に禍が來る。この國ではかう云ふ豫言が信じられてゐるんですわい『國王が娘踊りの當日に山の神に一番美しい娘の犧牲を供へなければその國王の一門は亡びてしまふ。』つてね。前の代にこの國を治めてゐたわしの、兄は娘の涙にほだされて、その犧牲を供へなかつたものだから、一家は沒落してしまつて、その代りにわしが王位についたわけだ。どうしてもあの娘は殺さなくちやならん」それから彼は護衛兵の方へ向いて「あの娘を此處へ連れて來い！　スクラッガ、鎗の

用意はよいか？」

二人の壯漢が前へ進んで行くと、娘ははじめて自分の身にさし迫つた運命を知つて、けたゝましい泣き聲をあげながら逃げようとした。しかし壯漢は彼女をしつかりつかまへて、泣きながらもがいてゐる娘を吾々の前へ連れて來た。

「お前の名は何と言ふのぢやな？」とガゴオルが言つた。「返事をしなければ國王の王子に仕事をはじめて貰はうか？」この言葉を聞くと殘忍な顏をしたスクラッガは一歩前へ進み出て、大きな鎗を取り上げた。その時、グッドの手が短銃の方へそつと下りて行くのを私は見た。哀れな娘は涙に曇つた瞳でぎらぎら光る刃物を見て、もう逃げようともがくのをやめ、兩手を痙攣的に握り締めながら、頭の頂きから足の爪先まで慄へて立つてゐた。

「見ろ！　この娘はわしの小さなおもちやを見たゞけで、まだその味もわからぬうちから慄へてゐる！」とスクラッガは有頂天になつて叫びながら鎗の身をたゝいた。

「今に見てゐろ！　どんな目に遇ふか、この小犬奴！」私はグッドがかう囁いてゐるのを聞いた。

「さあもう靜まつたからお前の名を言ふのだよ、良い子だ、恐い事はないからさあ名前を言ひな！」とガゴオルは憎々しげに言つた。

「お、お母さん！」と娘は慄へながら答へた。「妾はファウラタと申しまして、スコ家の者で御座います。お、お母さん、どうして妾は殺されねばならんのです？　何も惡い事はしないのに？」

「泣くな！　泣くな！」と老婆は毒々しい口調で續けた。「お前は向うの山に坐つていらつしやる神樣の犧牲として死なねばならんのだ。しかし苦しんで死ぬよりも、夜眠る方がよい。生きてゐるより死ぬ方がよいのだよ。それにお前は國王の王子に手づから殺されるのだぞ！」

娘のファウラタは苦悶のために兩手をねぢまげて大きな聲で叫んだ。「それは餘りです、妾のやうな若い者を、妾は何のとがで明日の朝日も、明日の晩の星も見られんやうになるのです？　露に濡れた花を摘むことも、水の笑ひ聲を聞くことも出來なくなるのです？　あゝもうお父さんの小羊も見られなくなり、お母さんに接吻をしても貰へなくなり、病氣の山羊を世話することも出來なくなるのです。戀人に抱かれて眼を見て貰ふことも出來なくなり、男の子を生むことも出來なくなるのです。あんまりです！　あんまりです！」

かう言ひながら彼女は再び兩手をねぢまげて涙に濡れた、美しい、絶望に沈んだ顏を空へ向けた。この姿を見たら、こゝにゐる三人の惡魔以外の人間なら、誰でもほろりとして許してやる氣になつたであらう。

護衛兵やその場に列席してゐた首長等の顏には憐憫の色が見えたが、ガゴオルと國王父子とはそんなことでは少しも動かされなかつた。グッドはひどく憤慨して今にも援けに行きかねまじきそぶりをしてゐた。女といふものは眼敏いもので、この哀れな娘はグッドの心の中を讀んだのか、すばやく身を動かして彼のそばへ駈けつけ、彼の「美しい白い脚」を兩手で摑んだ。

「お、星の國の旦那様、どうぞ妾をかばつて下さい！　あなたのお力で妾をお助け下さい！　あの殘酷な人々とガゴオルとから妾を守つて下さい！」

「よし來た、娘さん、わしが引受ける」とグッドは昂奮したサクソンなまりで言つた。「さあ立ちなさい、良い娘さんだね」と言ひながら彼は腰をかゞめて彼女の手をとつた。

ツワラは横を向いて息子のスクラッガに合圖をした。すると彼は鎗をとつて前へ進み出た。

「さあ今度はあなたの番だ。何をぐづ〳〵してゐるのです？」とサー・ヘンリイは私に囁いた。

「月蝕を待つてゐるんですがねえ、もう半時間もぢつと月を見てゐるんだが、まだちつとも變りがないのです」と私は答へた。

「だが今やらなければあの娘は殺されてしまふ。ツワラはもう癇癪玉を破裂さしてゐますよ。」

それは尤もだと思ひながら私は念のためにもう一度月を仰いで見た。どんな熱心な天文學者が自分の學說を證明するために天體に起る出來事を待つてゐるときだつて、その時の私ほどの熱心をもつて天體を見つめてはゐなかつたゞらう。しかし結果はやはり駄目だつたので、私は精一ぱいの威嚴を保つて、ひれ伏してゐる娘とスクラッガの突き出した鎗の穗尖との間へ進んで行つた。

「國王、そんなことをしてはいけない！、吾々は默つて見てゐる譯にいかん。この娘は許してやりなさい！」と私は言つた。

ツワラは驚いて烈火の如く怒りながら起ち上つた。その場にゐならぶ首長連や悲劇を見ようとして

だん〳〵吾々の方へすり寄つて來てゐた娘等の間から驚きの囁きが洩れた。

「そんなことをしてはいけないつて、この白犬奴！　ライオンの洞穴の前で吠えてゐる白犬奴、してはいけないだつて！　貴樣たちは氣が違つたのか？　よく氣をつけて物を言はぬと貴樣たちも捲きぞへを喰はすぞ、一たい貴樣たちは何者ぢや？　わしの邪魔をするなんて。下れ！　さあ、スクラッガあの娘つ子を殺してしまへ！　護衞の者ども此奴等をふん縛つてしまへ！」

この聲に應じて武裝した者どもが小舍の後から出て來た。前もつて用意してゐたものらしい。サー・ヘンリイと、グッドと、ウンボバとは私の兩側に並んで銃をとり上げた。

「やめろ！」と私は大膽と叫んだ。しかし心の中ではびく〳〵ものだつたのだ。「やめろ！　吾々星の國の人間の命令だ。その娘を殺してはならぬ。一歩でもこちらへ寄つたら、月の光りを消して下界をまつ暗にしてやる！」

私の脅しはきゝめがあつたと見えて、者どもはたぢ〳〵とした。スクラッガは鎗を持つたまゝ吾々の前に立つてゐた。

「は！　は！　は！」とガゴオルは金切り聲で笑つた。

「この詐つきは月の光をランプのやうに消すなんて、さあ消して見ろ！　消えたら娘は助けてやる。消えなかつたら娘もろとも殺してしまへ！」

私は絶望の眼で空を見上げた。すると嬉しや！　吾々は——いや吾々ぢやない曆は——間違つてゐ

なかつた。おほきな天體の周縁にかすかな影がさしはじめ、煙のやうな色が明るい月の面を蔽ひはじめた。

まつ黒な影はだん〳〵と明るい月の面に浸蝕してゐつた。群衆の間から深い恐怖の喘ぎが起つた。

「見よ！　國王！」と私は叫んだ。「見よ！　ガゴオル！　首長たちも、人民も、女どもも見よ。星の世界の白人の言ふことが誠か眞實かを見よ！

「月は汝等の前で暗くなつて行く。今にまつ暗になるだらう。滿月の夜に月がまつ暗になるのだ。お前たちは驗しを求めた。今それを見せてやる。おゝ月よ！　暗くなれ！　清らかなる聖なる月よ！お前の光りを隱してしまへ！　奢れる人の見せしめにこの下界をまつ暗にしてしまへ！」

恐怖の呻きが見物人の中から起つた。恐ろしさに茫然としてしまつたものもあれば、地べたに跪いて高い聲で叫んだものもあつた。國王はうす穢い皮膚の下でまつ青になつてぢつと坐つてゐた。ただガゴオルだけはびくともしなかつた。

「今にやんでしまふ！」と彼女は叫んだ。「わしはかういふことは前にも見たことがある。誰にだつて月の光りは消せはしない、元氣を出すんだ！　影は今に通りすぎてしまふ！」

黒い環はだん〳〵と月の面に廣がり、群衆は物も言はずにうつとりとして空を眺めてゐた。不思議な、呪はしい影が月の面を蔽うてゆくにつれて、四邊はしんと靜まり、森羅萬象は死の如く靜かになつた。この嚴肅な沈默の中に時は刻々と過ぎて行き、滿月はだん〳〵深く地球の影に沒して行つた。

影はます〳〵月の面に匍ひよつて、もはや月の面を半分以上も浸蝕して行つた。四邊は薄暗くなつて群衆の兇猛な顏も殆んど見えなくなつた。群衆の間からはごとりといふ音もしなかつた。

「あゝ月が死んで行く！　白い魔法使が月を殺してしまつた！」とたうとうスクラッガがわめいた。そして恐怖と怒りとの餘り鎗を振つて力一ぱいサー・ヘンリイの胸を目がけて突いた。だが彼は吾々が國王から貰つた鎖鎧を着物の下に着てゐることを知らなかつたのだ。鋼鐵の鎧は鎗を彈ね返した。そしてスクラッガが二度目に突きかゝつて來るまでに、サー・ヘンリイはスクラッガの手から鎗を奪つてそれを彼の體に突き刺してしまつた。スクラッガはごろりと仆れて死んだ。

これを見て恐怖にうたれた娘等はきやあ〳〵わめき聲をたてながら門の方へ逃げ出した。國王も護衛兵や首長等の一部分とガゴオルとを連れて小舍の中へ逃げこんでしまつた。あとには吾々と殺されかゝつたフアウラタと、インファドオスと、前の晩に會つた首長等の大部分とがスクラッガの死體と共に殘された。

「皆さん！」と私は首長等に向つて言つた。「吾々はしるしを見せました。これで滿足されたなら一刻もはやく昨日の話の處へ行かう。闇は一時間半ばかりも續く筈だから、その間に逃げて行くことにしよう」

「こちらへ」とインファドオスは先に立つて行つた。首長等も吾々もその後に續いた。グッドは、フアウラタの手を取つて行つた。

吾々が宮殿の入口まで着かぬうちに月はすつかり見えなくなり、まつ暗な空から星の光りが輝き出した。

てんでに手をつなぎ合せて吾々は躍きながら闇の中を進んで行つた。

第十二章　戰鬪の前

幸にもインファドオスと首長等とはこの大きな町の道をすつかり知つてゐたので、闇にもかゝはらず吾々はずん〳〵進んで行くことができた。

一時間餘りも歩き續けてゐるうちに、漸く月蝕は過ぎさつて、はじめに消えて行つた周緣の方が再び見えるやうになつて來た。五分間も經つと星の光りはだん〳〵鋭せて行つて、どうにか四邊が見える程明るくなつた。吾々はもう町の外へ出て、大きな頂きの平らな小山の方へ近づいてゐた。この小山は南アフリカにはよくあるもので、餘り高くはなく、一番高い處でせい〳〵二百呎位なものであつたが、馬蹄形をしてゐて、周圍は相當嶮しく、それに石だらけだつた。頂上の草原は廣々とした練兵場で少なからぬ軍隊がそこに駐屯することが出來た。平時はこの小山にゐる守備隊は三千人の兵員からなる一聯隊であつたのだが、吾々が嶮しい坂道を攀ぢ登つて、微かな月光で見ると、その晩には數個聯隊の兵がそこに駐屯してゐた。

やがて小山の頂きに着くと眠りから醒めた人々の群が、今しがた目擊した自然現象を恐ろしがつて

一處に集つて慄へてゐた。吾々は物も言はずにその中を通りすぎて、小山の中央にある小舍に着いた。そこには、驚いたことには、二人の男が吾々が慌てゝ國王の小舍の中に殘しておいて來た荷物を持つて來てくれてゐた。

「私がこれを取りにやつたのです」とインファドオスが說明した。「それからこれも持つて來ました」と言ひながら、彼は、長い間なくなつてゐたグッドのヅボンを取り上げた。

「まさかあの方は『美しい白い脚』をかくしておしまひにはならんでせうな？」とインファドオスは殘念さうに叫んだ。

しかしグッドはどうしても承知しなかつたので、それきりククアナ人は彼の美しい脚を見ることは出來なくなつたのだ。それから以後は彼等はグッドの片頰の髯と彼の透き通つた眼と、動く齒とだけで、彼等の審美的憧憬を滿足させねばならなかつた。

インファドオスはなほもグッドのヅボンを飽かず眺めてゐたが、やがて吾々に向つて、夜が明けるとすぐに首長等が叛逆をするに至つた顚末を說明し、正當な王位の繼承者イグノシを紹介するために各聯隊に整列するやうに命令しておいたと告げた。

そこで朝日が昇るとククアナ人の精華とも云ふべき約二萬の軍隊が召集された。軍隊は方形の三邊に厚い列を作つて整列し、吾々はその空いてゐる一邊に席を占めた。吾々の周圍には忽ち、主だつた首長と將校とが集つて來た。

インフアドオスはこれ等の軍隊を靜めて、一同に向つて力强い巧みな辯說をふるつてイグノシの父の物語り、彼がツワッ王のために卑怯な手段で殺されたこと、彼の妻子は追放されて飢ゑてゐたことなぞを話した。それから彼は人民がツワラ王の暴政の下に塗炭の苦しみを嘗めてゐることを指摘し、前夜の例をひいて多くの貴族たちが叛反人の名によつて虐殺されたことを指摘した。次で彼は星の世界の白人達がこの國を見下して人民の苦しみを眺め、長い道中をいとはずに遙々やつて來られたといふ次第を語つた。そして、彼等は追放されて困苦を嘗めてゐたククアナの眞の王イグノシを連れて、山を越えてこの國へお出でになり、ツワラの暴虐を見かねて、娘のフアウラタの命を救ひ、魔法をもつて月の光りを消し、惡魔の子スリラッガを殺して、これから吾々を助けてツワラを亡ぼし正當な王イグノシを王位につかせて下さるやうになつたのであると語つた。

彼が稱讚の囁きの中にこの演說を終ると、今度はイグノシが出て演說を初めた。彼は叔父のインフアドオスが言つた話を繰り返し、最後に雄辯をふるつて次のやうに言つた。「おゝククアナの將卒、並びに人民諸君、諸君は吾が言葉を聞かれた。諸君は吾と、吾が王座に坐つてゐる彼、兄を殺し兄の子を追放して殺さうとした叔父のツワラと何れかを選ばねばならぬ。吾が眞の國王であることはこの首長等が說明することになつてゐる。彼等は吾の腰の圍りにある蛇の姿を見たのである。若し吾が國王でなかつたならこの白人たちが魔法をもつて吾を助けて下さる筈はない。諸君、この白人たちはツワラを困らせ、吾々を無事に逃がして下さるために月の光りを消して下さつたのだ！」

「然り！」と軍人等は答へた。

「吾は國王である！　汝等に告げる、吾は國王である！」とイグノシは威大なる體軀をぐつと伸し、廣身の戰斧を頭上高くさし上げながら續けて言つた。「もし諸君の中にさうでないと言ふものがあるならば前へ進み出よ、吾はこの場でその男と雌雄を決し、戰ひの血祭とする」と言ひながら彼は大きな戰斧を振つた。斧の刃はギラ〳〵と日光を受けて輝いた。誰もこれに應ずるものがなかつたので、イグノシは更に言葉を續けた。

「吾とともに戰ふものはもし我軍に利あらば勝利と光榮をわれと共にするであらう。吾は諸君に牛と女とを與へるであらう。もし戰ひ利あらずばわれは諸君と共に仆れるであらう。

「吾は戰ひに先だつて諸君に約束する。もし吾が父祖の王座についたならば、流血の慘事はかたく禁ずる。諸君はもはや虐殺者を恨まなくてもよくなる。魔法婆に嗅ぎ出されて理由もなしに殺されることもなくなる。國法に觸れたもの以外は殺されることはなくなる。諸君は枕を高くして眠ることが出來るやうになる。ククアナの將卒及び人民諸君、決心はつきましたか？」

「吾々は決心しました、おゝ國王」と一同は答へた。

「よし、見よ、ツワラの傳令どもは首都の中を右往左往して吾と諸君とそれからこゝに居られるわが保護者とを仆すために大軍を集めてゐる。明日か明後日には彼は彼を奉ずる部下の大軍を率ゐて攻め寄せるであらう。ククアナの將卒及び人民諸君、これで話は終つた。めい〳〵小舍に歸つて戰の用

意をせられよ！」

暫らくすると一人の首長が手を擧げて「萬歳」と叫んだ。それは軍人等がイグノシが國王であることを承認したしるしだつたのだ。それから彼等は隊伍をつくつて進み出した。

半時間の後、吾々は軍事會議を開いた。その時には聯隊の首長は全部出席してゐた。遠からぬうちに敵の大軍が吾々を攻擊して來ることは明白であつた。小山の上から見ると軍隊が續々と召集され、傳令が櫛の齒をひくやうに市中を往來してゐるのが手にとるやうに見えた。疑ひもなく、國王は軍隊を召集してゐるのだ。吾々の味方には國内の粹をすぐつた七箇聯隊の兵が約二萬人居た。インファドオスと首長等との計算によると、國王の部下には現在少くも三萬から三萬五千の兵が集つて居り、明日の正午までには外に五千以上の援軍が集まるであらうとの事であつた。勿論その中には國王を見棄てゝ吾々の軍に投ずるものもあるかもしれないが、それは當にならないことであつた。その間にも吾々を鎭壓するための準備は着々と進んでゐた。既に小山の麓には武裝した强力な部隊が、吾々の動靜を偵察に來て居り、その外にも將に來らんとする攻擊の兆候は隨所に見えた。

しかしインファドオスと首長等との意見によると、その日は攻擊はないだらうといふことであつた。といふのは、いろ〳〵準備もあることだし、昨夜の月蝕によつて沮喪した軍隊の士氣を鼓舞する必要があつたからだ。彼等の意見によると攻擊は明日だらうと言ふことであつた。

吾々の方でも陣地を固めるために百方手段を講じた。男子は殆んど總出でその日の中にいろんなこ

とをした。小山へ登る道には石を積んで通れない樣にし、その他いろ〳〵な方法で上へ登つて來られないやうにした。山上の處々には石ころを積み重ねて敵が登つて來るときにそれをころがすやうに準備を整へ、各聯隊の受持場所をきめて、萬端の手筈を整へた。

丁度夕刻前に、吾々が憩んでゐると、國王の宮殿の方から小部隊の軍隊がこちらへ進んで來るのが見えた。その中の一人は軍使のしるしとして棕櫚の葉を手に持つてゐた。

彼が近づいて來るとイグノシとインファドオスと一二の首長と吾々とは山の麓へ下りて彼に會見した。彼は瀟洒たる風采の男で、豹の皮の正服を着けてゐた。

「國王に對して不屈きな謀叛を計るものどもへ國王から使に參つた。ライオンの踵につきまとふ豺どもへライオンから使に參つた。」

「用事を言へ！」と私は言つた。

「國王のお言葉だ！　もはや宣戰のしるしに黑牛の肩を引き裂いて、國王自から、この血に塗れた牛を陣地へ追ひ出された。大事に至らぬうちに國王に降伏したらどうだ？」

「ツワラはどう言ふ條件を出してゐるのだ？」と私は物好きに聞いて見た。

「國王の條件は大王にふさはしい極めて寛大なものだ。國王はかう仰せられた「わしは少しばかりの血で我慢する。十人につき一人づゝ殺して、殘りの者は許してつかはす。だがスクラッガを殺した白人と、わが王位を僭奪せんとする彼の從者の黑人と、吾に謀叛を煽動せるわが弟のインファドオス

とは無言の神の冒瀆者としてなぶり殺しにする。』これがツワラ王の慈悲深いお言葉だ。」

暫らく相談したあとで、私は一緒についてきた兵卒等にも聞えるやうに大聲で答へた。

「汝を使に寄來したツワラの許へとつとと歸つて言へ！　吾々ククアナの眞の王イグノシと、月の光りを消した星の世界の三人の賢者と、王族のインファドオスと將卒及び人民とは、この小山の上に集合してゐると告げい！　そして吾々は降伏等はせん、これから二度目の太陽が沈むまでに、ツワラの死骸はツワラの門前で硬くなり、ツワラのために父を殺されたイグノシが彼に代つてこの國を統御するのだと答へろ！　鞭で追ひ歸されん中にさつさと歸つて行け！　あとで貴樣の方から手を擧げて降伏しないやう氣をつけろ！」

すると軍使は大聲で笑つた。「そんな大言壯語に恐れると思ふか」と彼は叫んだ。「明日もその元氣でお目にかゝらうぜ。鳥に骨を啄かれるまではまあさんざんはしやいでゐるがよい。事によると明日は戰場でお目に懸るかもしれん。その時には星の世界へ遁げ歸らないでわしを待つてゐてくれ！　賴むぞ！」かうした毒言を吐いて彼が走つて行くとすぐに陽は沈んだ。

その夜はい忙しい夜であつた。吾々は疲れてはゐたけれども、月の光りを便りに明日の戰の準備を續けて行つた。吾々の會議をしてゐた處から傳令は織るが如くに行つたり來たりした。そのうちに眞夜半から一時間半ばかり過ぎると、準備はすつかり出來上つて陣中はひつそりと靜まり返り、時々歩哨の誰何の聲が聞えるばかりとなつた。サー・ヘンリイと私とは、イグノシと一人の首長とに伴はれ

て小山を下りて前哨陣地を視察した。吾々が進んで行くと、時々思ひ懸ない場所から月の光でギラギラ光る鎗の穂先が出たが、吾々が合言葉を言ふと又消えてしまつた。見張の者は誰一人として眠つてゐるものはない事がそれで判つた。それから吾々は澤山の眠つてゐる戰士の間を通つて歸つて來た。

恰度夜明け頃、私はインファドオスに起された。彼は國王の宮殿では既に大活動が始まつて、國王方の斥候は吾々の前哨線に出沒してゐると告げた。吾々は起ち上つてめい〳〵鎖鎧を着けた。これがあつたので吾々は非常に有難かつた。サー・ヘンリイは「鄕に入れば鄕に從へぢや」と言ひながら、インファドオスに賴んで土人の軍服を用意してもらつてそれを着た。士官の着る豹の皮の外套を首の圍りに結びつけ、額には高級將校だけのつける黑い駝鳥の羽根飾りをつけ、腰には白い牛の尾の腰帶を卷きつけた。足には革靴を穿き、犀の角の柄のついた重い戰斧を持ち、白牛の皮の裏打ちをした丸い鐵の楯を持ち、所定の投げ槍を携へ、その外に一挺の短銃をつけ加へた。野蠻な服裝ではあつたが、私はサー・ヘンリイ・カーチスのこの時の姿位立派な姿は餘り見たことがないと言はざるを得ない。實際彼がイグノシと二人で同じ服裝をして列んでゐる姿は實に堂々たるものだつた。グッドと私ともほぼ同じやうな服裝をして、鎖鎧を着け、槍と、楯と、二挺の投げ槍と、その外に銃を持つことにしたが、銃は彈藥も乏しくなつてゐたし、それに接戰の場合には間に合はんので、吾々の後から人足に持つて來てもらふことにした。

吾々は支度がすつかり終ると、大急ぎで食事を濟ましし、それから動靜を見に出懸けた。小山の上の

平地の一點に褐色の石で拵らへた小さな塔のやうなものがあつた。それは司令部にもなり、物見櫓にもなるやうに造つたものであつた。インファドオスはそこで部下の聯隊に取り卷かれてゐた。この聯隊は白髪聯隊と云つて、ククアナ軍の中でも最も精鋭な軍隊であつたのだ。この聯隊は豫備軍として控へてゐたので、兵卒等は草原の上に隊を作つて横はりながら、國王の軍勢が長い蟻の行列のやうな縱隊を作つて宮殿から匍ひ出してくるのを見てゐた。果しなく長い三つの縱隊にはそれ〴〵一萬一二千の兵卒が屬してゐるらしかつた。

これ等の軍勢は町を出ると聯隊に編成され、三隊に分れて第一の隊は右の方に進み、第二の隊は左の方に進み、第三の隊は徐々に吾々の正面に迫つて來た。

「敵は三方から吾々を攻め寄せるんだな！」とインファドオスは言つた。

これは甚だ重大な、情報であつた。といふのは、小山の上の吾々の陣地は、周圍が一半も哩あるので比較的劣勢な防御軍は出來るだけ兵力を集中することが必要だつたからだ。しかし吾々には敵がどの方向から攻めて來るか判らなかつたので、臨機應變の處置をとることにし、各聯隊はそれ〴〵部署を定めて別々の攻擊に對抗する準備をするやう命令しておいた。

第十三章　攻擊

三つの縱隊は急がず騷がず徐々に進んで來た。中央の縱隊は、吾々から約五百碼の地點迄來ると、

一まづそこに停止して、友軍が同じ位の距離まで達するのを待つてゐた。この作戰の目的は三軍が同時に攻擊するために相違なかつた。

「あゝ機關銃が一つあつたらなあ！」とグッドは眼下に迫つて來る敵軍を見ながら唸つた。「さうすれば二十分間にあの野原を綺麗にしてやるんだがなあ！」

「ないものは仕方がないさ、だがコオターメンさん、あんた一つ鐵砲を射つて見ませんかと」サー・ヘンリイは言つた。「向うに指揮官らしい男が立つてゐるでせう。あの男から五碼以内の處へ彈丸が落ちたら見物ですがなあ。」

これを聞いて私は憤然とした。そこでエキスプレス銃に彈丸を込めて、件の指揮官が吾々の陣地を良く見るために、一人の從卒を連れて本隊から十碼ばかり前へ進み出るのを待ち、私は銃を岩の上に載せて照準を定めた。この小銃は三百五十碼までしか照準がきかないのであるから私は首の邊りをねらへばちやうど胸に當るだらうと計算した。指揮官はぢつと立つてゐたのでねらひを定めるには非常に都合がよかつたのだが、風の工合か、それとも昂奮してゐたせゐか、彈丸は指揮官には當らないで、三歩ばかり左の方にゐた從卒が地べたに仆れた。私のねらつた士官はひどく慌てゝ從卒のそばへかけ寄つた。

「うまい！　コオターメンさん！　あんたはあの士官を吃驚さしたよ。」とグッドは叫んだ。

私はそれを聞くと癪にさはつた。といふのは私は皆の見てゐる前で鐵砲を射ち損なふなんてことは

實にいま〳〵しかつたからだ。人間が或る一藝に長じてゐる場合には、その一藝だけでは評判を落したくないものだ。一生鐵砲で渡世して來た私が、鐵砲を射ち損じたとあつては弓矢八幡に申譯けがない私は今の失敗にやつ氣になつて、亂暴にも、その士官が走つてゐる處を狙つて第二彈を放つた。すると哀れな士官は忽ち兩腕を伸して前へのめつた。

この白人の魔法を見て、聯隊の者どもは夢中になつて喜び、勝利のさいさきよしと言つてはやしたてた。それと同時に私のために射ち殺された指揮官の部下の聯隊は混亂して後へ下つた。サー・ヘンリイとグッドとも彼等の銃を取り出して射ち出し、私もそれから一二發射つて、何でも都合七八人の敵を仆した。

恰度吾々が銃を射つのをやめたとき、遙か右手の方から氣味の惡い喊聲が聞え、續いて左の方からも同じやうな喊聲が起つて來た。

この物音を聞くと、正面の凹地を進んで來た敵軍も、深い、咽喉から出る聲で歌を歌ひながら、駈足で吾々の方へ迫つて來た。吾々は銃を取つて續けざまに發砲し、イグノシも時々吾々に混つて射つたが、勿論この大軍に對しては大浪に向つて小石を投げるほどの效果しかなかつた。

彼等は喊聲をあげ、かち〳〵鎗の觸れ合ふ音をさせながら、吾々が小山の麓の岩蔭に伏せて置いた前哨隊の處まで肉薄して來た。そこまで來ると彼等の進み方は少し遲くなつた。それは吾々の方ではまだまじめな抵抗もしなかつたけれども、敵は小山の崖を攀ぢ上らなければならなかつたからだ。吾

吾防御軍の第一線は小山の中腹に陣取り、第二線はそれから五十碼ほど後方に陣取り、第三線は小山の上の平地の緣端に陣取つた。

敵は鬨の聲をあげてだん〳〵肉薄し、味方もそれに應じて鬨の聲をあげた。兩軍が接近するにつれて投げ槍がぎら〳〵光りながら前に後ろに飛び交ふのが見えはじめ、戰の火蓋は遂に切られた。

兩軍は一進一退した。そして彼等の軀は秋の木の葉のやうにバタ〳〵と仆れた。けれども暫くのうちに敵軍の優勢なことが判りはじめ、味方の第一線はヂリ〳〵壓迫されてあとに退り、遂に第二線と一緒になつた。第二線では最も猛烈な激戰が行はれたが、又もや味方は押し返されて戰が初まつてから二十分も經たぬ中に敵は第三線まで殺倒して來た。

しかしこの時までには攻擊軍もひどく疲れて、その上に夥しい死傷者を出してゐたので、堅固な第三線を突破することは容易でないことが判つた。暫らくの間、兩軍は一進一退、どちらが勝つとも判らなかつた。サー・ヘンリイは燃えるやうな眼で死物狂ひの爭鬪を見てゐたが、やがて物も言はずにグッドを連れて一番戰鬪の劇しい場所へ飛び込んで行つた。

そのうちに勝敗の數は漸く明かになつて來た。攻擊軍は勇敢に戰ひながらも寸一寸と山を下へ押し返され、やがて混亂して、後方に控へてゐる豫備軍の方へ退却して行つた。その時に傳令が來て左翼の敵も擊退したと告げた。私はこれで戰は一段落を告げたものと思つてやれ〳〵と喜んでゐると、右翼の防備に當つてゐた味方の軍隊は、敵に壓迫されて、山上の原の上をだん〳〵と吾々の方へ退却

して來るのが見えた。右翼では明かに敵が勝つたのだ。
私の側に立つてゐたイグノシはこの形勢をチラリと見てすばやく命令を發した。すると吾々の周圍にゐた豫備聯隊は忽ち陣形を整へた。
イグノシが再び命令を發すると、隊長等は直ちにこれを部下に復誦した。すると南無三！　私自身も荒れ狂ふ敵の攻撃の中に卷き込まれてゐたのだ。私はイグノシの大きな軀の後に身を隠して、ぶきつちよに防戰し、まるでわざ〳〵殺されるためのやうに蹌踉と前へ飛び出したりした。一二分もたつと味方の軍勢がどつと私のうしろのはうへ退却して陣形を立て直した。それから後のことは私はよくおぼえてゐないが、たゞ楯の衝突するのがガチヤ〳〵きこえたのを覺えてゐる。それから突然、眼の球の飛び出した大きな男が血鎗を揮つてまつ直に私に突きかゝつて來た。しかし私は起ち上つた。と言ふよりもこの場合身をかゞめたと云つたはうがよいかも知れぬ。その場に立つてゐれば殺されるにきまつてゐたので、私は巧みに身をかゞめたのだ。するとこの大男ははずみを喰つて私の上へのしかゝつて仆れた。彼が起ち上らない先に私の方が起ち上つて背中から骨もとほれと短銃を射ち込んだ。
それから間もなく私は誰かに打ちのめされたやうな氣がする。そしてそれきり私は何もおぼえてゐない。
氣が附いた時は、私は物見櫓に凭れてゐた。そしてグッドが私の前に身をかゞめて、水を入れた瓢

簞を持つて立つてゐた。
「どうです？」と彼は心配さうに訊ねた。
私は返事をする前に起ち上つて軀を振つた。
「有難う！　もう大丈夫！」と私は答へた。
「やれ〳〵、あんたがこゝへ連れ込まれた時には、もうてつきり駄目だと思つていやな氣がしましたよ。」
「今の所は大丈夫だ！　何でも頭を一つがんとやられて、それきり氣が遠くなつてしまつたやうだ。で戰爭はどうなりましたね？」
「敵は今の所、すつかり擊退されました。大變な死傷者です。味方の死傷は二千で、敵の死傷は三千はあるでせう。どうですこれは！」と言ひながら彼は夥しい死傷者を指ざした。各聯隊には十人宛の軍醫がゐて、負傷者の中で恢復の見込のあるものは後方へ移して看護を加へてゐたが、恢復の見込のないものは一人の醫師が診察するのだと言ふ名目のもとに動脈を鋭利なナイフで切つて一二分間のうちに何の苦痛もなしに殺してゐた。ずゐ分亂暴な話だが、どうせ助からぬとすれば結局それが本人にとつては情けであるのかもしれぬ。
「この恐ろしい光景から眼を轉じて、物見櫓の向う側を見ると、まだ戰斧を手に持つた、サー・ヘンリイと、イグノシとインファドオスと、一二名の首長とが額を集めて協議中であつた。

やれ〳〵、コオターメンさん、あなたはそこにゐたのですか、重大なことになつて來ましたわい。吾吾は敵の攻撃を撃退するには撃退したが、ツワラは多數の援軍を得て、こん度は吾々を包圍して兵糧攻めにするらしいでせー」

「それは困つたですな。」

「困つたものです。それになにより困るのはインファドオスが言ふやうに、水を供給する道がないのです。」

「さうですよ」とインファドオスは言つた。「泉の水ではこんな大部隊の人間を支へるには足りないし、それに泉ももう涸れかゝつてゐるのです。日が暮れるまでに吾々は渴を覺えて來るに相違ありません。一體どうしたもんでせう。ツワラは新手の軍隊をどん〳〵連れて來て補充してゐますが、彼は前の戰爭に懲りて、今度は容易に攻めて來ないらしいです。恰度蛇が羚羊を卷き殺すやうに、吾々を卷き殺さうとしてゐるらしいです。居ながら戰ふと言ふ戰法を取るらしいです。」

「さうですかなあ」と私は言つた。

「そこでマクマザンさん、吾々の取るべき道は三つしかないのです。飢ゑたライオンのやうに、こゝに待つてゐてのたれ死するか、圍みを破つて北の方へ脫出を計るか、それとも」と言ひながら彼は立ち上つて敵の密集部隊を指さしながら云つた。「吾々の方からまつ直ぐにツワラの咽喉笛を突くか、この三つしかないのです。サー・ヘンリイさんは最後の說を主張なさるですが、マクマザンさん、あなたはどうお考へですか。最後の決斷權は勿論國王イグノシにあるのですが、あなたのお考へも、透き通つた眼をしたお方の御意見も伺ひたいのです。」

「イグノシ、お前はどう思ふ？」と私は訊ねた。

「私は智慧にかけちやまだ子供ですから、まづ先にあなたの御意見を聞かして下さい」とイグノシは答へた。

そこで私は暫らくグッドとサー・ヘンリイ三人で相談した後で、大體次のやうな意見を述べた。

「こんな風に敵に圍まれてしまつた以上は、そして特に水の供給の道がない以上は、ツワラの軍勢に向つて攻撃をしかけるより外にみちがない。しかも攻撃は直ぐに始めるがよい。でないと首長の中に變心して、吾々を裏切つてツワラの許へ走るものが出來ないとも限らぬ」と私は言つた。

この意見には大體皆の者が贊成したやうであつた。しかし最後の決定權はイグノシにあるので、一同の者は今度はぢつと彼の方へ眼を注いだ。

イグノシは、その間ぢゆう深く思案してゐるやうであつたが、暫らく間をおいてから語り出した。

「勇敢なる白人の方々、叔父のインファドオス、それから首長諸君、私の心は決りました。今日これからツワラの陣地に突入して勝敗を一擧に決しようと思ふ。勿論、私の命も諸君の命もこの一戰にかかつてゐるのです！」

「判つた」と私は答へた。

「今は恰度正午で兵卒は食事をしたり、休息をしたりしてゐるが、陽が少し西に傾いたら、叔父さん、あなたはあなたの聯隊と外にもう一聯隊を率ゐて、まつすぐにツワラの宮殿に向つて進擊して下さい。ツワラがそれを見たら彼はきつとそれを粉碎しようと思つて部下の軍隊を差し向けるに相違ありません。けれどもこの正面は兩方の原から落ちこんで細長い凹地になつてゐますから、一度に一聯隊づつしかかゝつて來られません。だから一聯隊づつ各箇に破つて行けば良い譯です。それからヘンリイさんはあなたの聯隊に附いて行つていたゞきます。ツワラはヘンリイさんの今日の武者振りをよく知つてゐますから、あの方が戰斧を振りかざして白髮聯隊の先頭に立つて進んで下されば、きつと度膽を拔かれてしまふでせう。私は第二の聯隊に加はつて行きます。さうすれば萬一あなたの聯隊が破れても、まだ國王があとに殘つて戰ふことが出來るからです。それからマクマザンさんは私と一緒に行つていたゞきます。」

「承知しました國王」とインフアドオスは彼の聯隊が全滅するにきまつてゐるのを知りながら平然として答へた。實際ククアナの人民は驚くべき人民で義務のためになら、死を少しも恐れてゐないやうだつた。

「そしてツワラの軍隊の大部分がこの戰ひを見てゐる間に、生き殘つた味方の軍勢の三分の一は小山の右側から降りて、敵の左側をを襲ひ、他の三分の一は小山の左側から降りて行つて、ツワラ軍の右側を襲擊するのです。そして兩翼からの攻擊が始まるのを見て私は眞正面からツワラの本據を衝きま

す。そして運よく行けば夕方までに吾々はツワラ軍を山へ擊退して平和に國王の宮殿に入城することが出來ます。グッドさんは右翼軍に附いて行つて、光る眼で味方の隊長どもに元氣をつけてやつて下さい！」

攻擊の準備はすぐに開始され、一時間餘りの内に全軍は凡て食事を終つて、三箇師團に編成され、首長等にそれ〴〵作戰計畫が說明された。かうして負傷兵の收容のために殘された小部隊の守備兵を除く外は、約一萬八千の全軍が今や遲しと出動の用意をしてゐた。

暫らくするとグッドがサー・ヘンリイと私との處へやつて來た。

「左樣なら皆さん！」と彼は言つた。「私は軍令によつて右翼軍に加はる事になりました。もうお目にかゝれんかも知れませんから、お別れの握手に來ました」と彼は意味ありげにつけ足した。

吾々は默つて握手をした。だが英國人として餘りにはしたない、取亂した、女々しい樣子はしなかつた。

「妙な因緣ですなあ」サー・ヘンリイは少し顫へを帶びた、どつしりした聲で言つた。「實を言ふと私も明日の太陽が見られるとは思ひませんよ。私のついて行く白髮聯隊は兩翼の軍勢を敵に氣附かれないやうに側面へ迂廻させるために、最後の一兵まで戰はなくちやならんのです。だがそれは仕方がない男らしい死に方だと思つて諦めませう。さよならコオターメンさん。あなたの無事を祈ります。あなたは生きのびて、ダイヤモンドにありつきなさることを望みます。だがもし生きのびなさつても、

今後は決して吾々のやうな山師の相手にはならぬやうにしなさいよ！」

それから數秒たつと、グッドは吾々の手を握つて向うへ行つてしまつた。そこへインファドオスが來て、サー・ヘンリイを白髪聯隊の先頭へ連れて行つた。私はあれやこれやと樣々な不安を抱きながら、イグノシに附いて第二の攻擊聯隊の中へ加はつた。

第十四章　白髪聯隊の最後の奮戰

數分間經つと、側面攻擊の任に當つた諸聯隊は、ツワラの斥候の鋭い眼を避けるために、小山の蔭に沿うてひそかに進んで行つた。側面軍が一時間半許りもかゝつて指定の場所に着くのを待つて、白髪聯隊と、それを援助する聯隊とが進軍を始めた。この第二の聯隊は水牛聯隊と呼ばれてゐた。

この二つの聯隊は、その日まだ殆んど敵と戰を交へなかつたので、損害も極めて少なく、士氣は甚だ旺盛であつた。といふのは白髪聯隊は、朝の戰爭には豫備軍として小山の上に殘つてゐて、そこまで登つて來た敵とほんの少しばかり戰を交へたばかりだつたし、水牛聯隊の方は左翼軍の第三防禦線を受け持つてゐたので、殆んど敵の攻擊を蒙つてゐなかつたのである。

老練な名將インファドオスは、この樣な決死の戰鬪の前には、十分軍隊の士氣を鼓舞しておく必要があることをよく知つてゐたので、側面軍が進行してゐる間に、部下の軍隊に向つて、白髪聯隊が正面の戰線を引受けて星の世界の偉大なる白人の戰士と共に戰ふのは非常な名譽であるといふことを壯

重な口調で說明し、勝利の曉には生き殘つた者は陞進して、その上國王から澤山な牛の褒美に貰へると約束した。

私は羽根飾りの長い列を見ながら、これ等の勇敢な人々が、一時間も經たぬ中に死んでしまふのかと思つて吐息をした。彼等は死ぬにきまつてゐるのだ。そして彼等自身もその事を知つてゐるのだ。彼等の任務は、ツワラの大軍を引き受けて全滅するまで、或は側面軍が有利な攻擊の時機を見出すまで戰ふことにあつたのだから九分九厘までは既に死んだと同じである。けれども彼等は少しも躊躇しなかつた。また誰一人として恐怖を抱いてゐるなものはなかつた。彼等は、確實な死に向つて、日の光りに永久の別れを告げようとしてゐるのだ！　しかも彼等は泰然として彼等の運命を見ることが出來るのだ。私はこんな時にもかゝはらず、彼等の氣持と、私自身の氣持とを比べて見ずにはゐられなかつた。そして何とも言へないいやな私の氣持に引き比べて、彼等の勇敢を讚美し、羨望した。義務の爲に是程忠實で、而もその苦しい結果に對して是程無頓着な人達を私は曾て見たことがない。

「諸君の國王を見よ」と老將インファドオスはイグノシを指ざしながら激勵の演說を終つた。「國王の爲に仕れるまで戰ふのが勇敢な軍人の任務だ。國王の爲に死を恐れたり、敵に後を見せたりする人間は、永久に呪はれた奴等だ。士卒諸君、諸君の國王を見よ。さあ聖蛇に萬歲を唱へて、後に續け！吾とヘンリイ樣とは先頭に立つて進む。」

すると暫らく間をおいて、軍隊の間から、遠くの海鳴のやうな響きが起つた。それは六千の鎗で、

靜かに楯をたゝいた響きであつた。響きは次第に高まつて、遂には百雷の一時に落つるやうに鳴り響いたが、やがてそれも靜まつたときに、突然、國王に對する萬歲の聲が起つた。

イグノシは其日どんなに得意だつたらうと私は思つた。羅馬の皇帝だつて『まさに死なんとする戰士からこんなに心からの萬歲をさゝげられたことはないであらう。

イグノシは彼の戰斧を上げてこの萬歲に答へた。すると白髮聯隊は、約一千人宛の戰鬪員からなる三列に別れて進軍を始めた。白髮聯隊の最後の中隊から五百碼程離れて、イグノシは水牛聯隊の先頭に立ち、進軍の命令を下した。この聯隊も白髮聯隊と同じ樣に三列になつて進んだ。言ふまでもない事だが、私は無事に歸つて來られる樣に心から神に祈つた。私は是迄にも隨分妙な境遇に陷入つた事はあるが、この時ほど不愉快な、この時程安全に歸れる見込の少なかつた事はないやうに思ふ。

吾々が小山の緣端まで着いた時には、白髮聯隊は、既に小山の中腹まで進んでゐた。これを見るとツワラ軍の陣營は急にどよめいて、吾々が凹地の端まで行きつかぬ中に防ぎ止めるために、急に進軍を始めた。小山の下は、前にも言つたやうに細長い草原の凹地になつてゐて、一番廣い處で、幅四百歩程しかなく、狹い處は九十歩位しかなかつたのだ。

白髮聯隊が、この草原の一番廣い處まで着いて進軍をやめたとき、吾々の水牛聯隊は、小山のすぐ麓の、草原の狹い部分まで進んで、灰色聯隊の最後の列から百碼程後方に、豫備軍として控へてゐた。その間に吾々は、ツワラの全軍を見渡すことが出來た。ツワラ軍には援軍が加はつたと見えて、

朝の戰鬪でひどい損害を受けたにもかゝはらず、總數四萬を下らないやうに見えた。しかし草原の向う側の端まで來ると、一聯隊宛しか進めないので、暫らく躊躇してゐた。勇敢な白髮聯隊はこの大軍を向うにまはして、曾て三人の羅馬の勇士が數千の敵を向うにまはして橋を守つたやうに、敵の進軍を阻止しようとしてゐたのだ。

敵は暫らく躊躇してゐたが、やがて凹地にさしかゝる處で進軍を止めてしまつた。三列に並んで身構へてゐる勇敢な白髮聯隊と鎗を交へるのは餘り氣が進まぬらしかつた。しかし、忽ち頭に駝鳥の羽根飾りをつけた、長身の士官が大勢の首長と從卒とを從へて前へ進み出た。それは外ならぬツワラ自身であると私は思つた。彼が聲を勵して命令を下すと、第一聯隊は白髮聯隊に向つて突擊して來た。白髮聯隊は默々として動かなかつたが、敵が四十碼の處まで進んで來ると、兩軍の間に風を切つて無數の投げ槍が往來し始めた。

ついで突然喊聲をあげて、勇躍しながら、彼等は鎗を振つて肉薄して來た。二つの聯隊の間に猛烈な白兵戰が開始された。楯と楯との觸れ合ふ音は雷のやうに吾々の處まで聞え、草原はギラ〳〵燦めく鎗の光りでまるで生きてゐるやうに見えた。兩軍は一進一退して戰を交へてゐたが、戰はそんなに長くは續かなかつた。攻擊軍は見る〳〵人影が疎らになつて、やがて完全に擊滅された。しかし白髮聯隊ももはや二列しか殘つてゐなかつた。三分の一は戰死してしまつたのだ。

白髮聯隊の殘軍は、再び默々として次の攻擊を待つてゐた。サー・ヘンリイの黃色い髯が味方の軍勢

の間からちら〳〵隱顯してゐたので私はやれ嬉しやと思つた。まだ彼は生きてゐたのだ！

その間に吾々の聯隊も戰場の方へ近く進んで行つた。戰場には死んだり、死にかけたり、負傷したりした、約四千の人間の體が文字通り朱に染つて倒れてゐた。イグノシは、敵の負傷者を殺してはならぬといふ命令を發し、その命令は忽ち全軍に傳へられた。しかも吾々の見た限りでは、この命令は嚴守されてゐたやうであつた。それは實に人の心をうつ情味にあふれた光景であつたが、その時はそんなことを考へてゐるひまなどはなかつた。その中に白い羽根飾りを附けた、第二の聯隊が、白髮聯隊の二千の殘軍に對して進擊して來た。白髮聯隊は、再び敵が四十碼の處まで近づくのを待つて、敵軍に向つて突擊し、前と同じやうな悲劇が繰り返された。併し今度は勝敗は容易に判らなかつた。暫らくの間は白髮聯隊の方に勝味が無いやうに見えた。白髮聯隊の戰鬪員は、四十歲以上の古兵ばかりで、攻擊軍は皆血氣の青年であつたが、初めのうちは古兵の方がじり〳〵と押されて行つた。戰は猛烈を極め、一分毎に數百人位の割合でばた〳〵倒れて行つた。

しかし完全な訓練と不撓不屈の勇氣とは、奇蹟を現出する事ができるものだ。一人の古兵は、良く二人の若兵に當る事が出來た事が間もなく判つて來た。ちやうど吾々が白髮聯隊はもう駄目だと思つて、代つて進擊しようと準備してゐたときに、喧しい叫喚の中からサー・ヘンリイのどつしりした聲が聞え、彼が羽根飾りの上へ振り上げた戰斧のひらめきがチラリと見えた。形勢はもち直して、白髮軍は荒れ狂ふ敵に對して、まだ磐石のやうに抵抗してゐたのであつた。やがて白髮軍は今度は逆襲に轉

じた。火器が使はれてゐないので戰場には煙が少しも上つてゐなかつたから、戰鬪の模樣は吾々の處からでも手に取るやうによく見えた。暫らくすると戰鬪はだん〳〵靜まつて來た。「あゝ實に勇ましい軍隊だ。きつとまた勝つだらう！」と私の側に昂奮して齒嚙みをしてゐたイグノシが叫んだ。

突然、攻擊軍は白い羽根飾りを風に靡かせながら算を亂して退却し、後には白髮聯隊の勇士たちが殘つた。それはもう聯隊ではなかつた。戰鬪の初まる時には三千人もあつたこの聯隊の中でほんの四十分程しか經たない今では、せい〳〵六百人位の者が血に塗れて殘つてゐるに過ぎなかつた。殘りの者は凡て地上に倒れてゐたのだ。けれども彼等は鎗を振つて萬歲を唱へ、それから吾々の方へ引き返して來るかと思ふとさうではなくて、反つて逃げて行く敵を追うて百碼ばかり前進し、小高い丘を占領してその周りを三重に圍んで環狀の陣形をつくつた。有難いことには、その丘の頂きにサー・ヘンリイと吾々の老友インファドオスとの姿が見えた。だが、そのうちにッツラの聯隊は三度盛り返して來て、又もや戰ひが始まつた。

この物語りを讀まれる諸君はかねて承知の筈だが、私は正直なところ少々臆病者で、しば〳〵不愉快な立場にたつて人間の血を流さねばならぬ事はあつたが、元來戰爭などは嫌ひで、自分の血の分量も出來るだけ粍らさないやうに心掛け、時としては、三十六計の奧の手にたよつて、敵に後を見せて逃げ出したこともあるのだが、この時ばかりは私の一生で初めて胸の中に鬪志がむら〳〵と起つて來るのを覺えた。これまで恐怖の爲に半ば凍つてゐた私の血は活潑に脈管を流れだし、むやみに人を殺

したい野蠻な慾望が湧き起つて來た。私はちらりと振り返つて後に列んでゐる士卒の顏を見ると、皆な私と同じやうに、手を握りしめ、眼をぎらぎらと輝かして勃々たる戰志に燃えてゐた。たゞイグノシだけはいつもの通り冷靜な容子をしてゐたが、さすがの彼すらも齒軋りをしてゐた。

「吾々はツワラが吾々の兄弟を向うで屠殺しにしてしまつてゐるのに、こゝに根の生えるまで立つてゐるのかね、ウンボバ――いやイグノシ？」と私は訊ねた。

「いや、マクマザンさん」と彼は答へた。「今こそ好機逸すべからずです！」彼が語り終らぬ中に敵の新手の聯隊は例の丘の側面を通り過ぎて、こちらへ迂廻し、丘をかこんで周圍から白髮聯隊の殘り少ない殘軍を攻擊し始めた。

この時、イグノシは戰斧を振り上げて進軍の合圖をすると、水牛聯隊は、ククアナ軍特有の鬨の聲をあげながら怒濤の如く突擊した。

その次に起つた光景は、私の筆では到底書き盡せぬ。私の記憶してゐる事は大地を搖がすやうな、すさまじい、しかも秩序ある前進と、急に眞正面から敵に衝突かつて恐ろしい衝突が初まり、鈍い呻き聲がきこえ、血煙りの中に閃めく鎗の光りが見えただけであつた。

私がはつきりと吾に返つた時には、私は白髮聯隊の殘軍に混つて、丘の頂きの近くにゐた。そして私のすぐ後にゐたのはほかならぬサー・ヘンリイであつた。私はどうしてこんな處まで行つたのか少しも覺えてゐないが、あとでサー・ヘンリイに聞くと、水牛軍の最初の猛烈な攻擊の時に、殆んど彼

の足許まで進んで、また敵の逆襲によつて追ひ返されたのを、彼が圍みの外へ脫け出して私をそこまで曳きずり上げてくれたのだと言ふことであつた。

その次に起つた戰の模樣は到底筆紙で現はすことの出來るやうなものでなかつた。刻々に頭數の減つて行く、白髮聯隊の殘軍に對して、勇敢な敵は味方の死骸を乘り越え乘り越えて、或る時は吾々の鎗を避ける爲に死骸を前にかざしながら進んで來た。しかし彼等は結局死骸の山を堆高くするだけであつた。老將インファドオスはこの激戰の中にあつて、まるで觀兵式でもやつてゐるやうに、落ち着き拂つて命令を下したり、敵を罵つたり、冗談を言つたりさへして、殘り少なくなつた味方の士氣を勵まし、敵が攻擊して來る度に一番戰鬪の猛烈な處へ進んで行つて敵に應酬してゐた。けれどもサー・ヘンリイの武者振りはそれよりももつと勇ましかつた。彼の駝鳥の羽根飾りは鎗の爲めに折れてしまひ、黃色い長髮は後へ振り亂れ、手も鎗も戰斧もすつかり血に塗れて、巨人の如く、當るを幸ひ敵を薙ぎ倒してゐた。

この時、不意に「ツワラだ！　ツワラだ！」と叫ぶ聲が聞えた。すると一眼の巨人、ツワラ王が鎧を身に纏ひ、戰斧と楯とを持つて、群衆の中から躍り出した。

「そこにゐるのは息子のスクラッガを殺した白人だらう。どうだ、おれが殺せるか？」と叫ぶと同時に彼はサー・ヘンリイを目がけて投げ鎗を投げつけた。しかし幸にも彼はそれを見て楯で受け止めたので、投げ鎗はさつと楯に突き刺さつた。

ツワラはまつ直ぐに彼に躍りかゝつて、戰斧を振り上げて楯の上に打ち下した。その力の彈みをくつただけで、さすがのサー・ヘンリイも蹌踉として膝をついた。

ちやうどその時に、攻め寄せて來た敵の聯隊の中から、困つたやうな叫び聲が起つて來た。上を見上げるとその原因が判つた。

凹地の左右にある原つぱから一時に無數の戰士の羽根飾りが見えて來たのだ！　側面軍が吾々の救援に來たのだ！　それは絶好の好機會であつた。ツワラの軍勢はイグノシが豫言したやうに白髮聯隊と水牛聯隊との殘軍を攻擊するのに夢中になつてゐて、側面軍が押し寄せて來るのを、すぐ側に近寄るまで知らずにゐたのだ。そこで彼等が陣形を立て直すひまもなく、側面軍の士卒は獵犬のやうに彼等の横つ腹に襲ひかゝつて來たのだ。そのために、ツワラとサー・ヘンリイとの一騎討ちはそれきりお終ひになつた。

五分間のうちに戰の運命は決せられた。ツワラの軍勢は、正面から白髮聯隊と水牛聯隊との猛擊を受け、今また左右の兩側から新手の軍勢の攻擊を受けて、算を亂して退却し、吾々に對つてゐた敵の部隊はまるで魔法にでもかゝつたやうに潰滅してしまつて、やがて大浪の引いた後の岩のやうに味方の軍隊だけが跡に殘つた。しかしそれは何と言ふ光景だつたであらう！　吾々の周圍には累々たる死屍が横はり、白髮聯隊の生存者は僅か九十五人になつてゐた。この一戰で、白髮聯隊だけで三千五百の兵士が仆れたのだ。

「諸君」とインファドオスは腕に受けた傷に繃帶を卷きながら、落着き拂つて言つた。「諸君は、諸君の聯隊の名譽を傷つけなかつた。今日の戰ひは諸君の孫子の代までも語り傳へられるであらう。」それから彼は、サー・ヘンリイ・カーチスの手を握りしめて「あなたは偉大なお方だ」と率直に云つた。「私は長い軍人生活の間に、ずゐ分勇しい人を澤山見たが、あなたのやうな勇ましい方をつひぞ見たことがありません。」

この時に水牛聯隊は、吾々の陣地のそばを通り過ぎて、宮殿へ通ずる道の方へ進軍を初めた。その時一人の軍使がイグノシの命令を傳へて來た。それはインファドオスとサー・ヘンリイと私とに、水牛聯隊と一しよに來て貰ひたいと言ふ命令であつた。そこで白髮聯隊の九十人の殘軍には負傷者の收容方を命じておいて、吾々はイグノシと共にツワラの宮殿へ攻め寄せて、勝利を完全にし、できるならツワラを俘虜にしようといふ意氣ごみで進軍した。吾々がまだ幾程も進まないうちに、私は突然グッドが百碼ばかり離れた岡の上に坐つてゐるのを發見した。彼の側には一人のククアナ人の死骸が横はつてゐた。

「グッド君は負傷したに相違ない」と、サー・ヘンリイは心配さうに言つた。彼がさう言つた時に、大變な出來事が起つた。死骸だとばかり思つてゐたククアナ人が急に立ち上つて、グッドを打ち下し彼の身體を鎗で突き始めた。吾々が呀つと言つてそばへ駈けつけて見ると、鳶色の兵卒が地べたに仆れてゐるグッドを何べんも突いてゐるのが見えた。グッドは突かれる度に手足を宙に上げて苦しんで

ゐた。ククアナ人は吾々が來たのを見ると最後に一突き猛烈に突いておいて、一目散に逃げ出した。グッドは見動きもしなかつたので、吾々は彼はもうてつきり殺されてしまつたものと詮らめた。悄然として彼の側へ寄つて見ると、驚いたことには、彼はまつ蒼な顏をして、ひどく弱つてはゐたが、まだ眼鏡を掛けたまゝで、晴れやかな微笑を浮べてさへゐた。

「實にすばらしい鎧ですよ。」と彼は吾々の顏を見て言つた。そして、それきり氣絕してしまつた。しらべて見ると彼は追擊の時に投げ鎗で脚に重傷を負うてはゐたが、鎖鎧のお蔭で鎗で突かれた傷はほんの擦過傷位しかついてゐなかつた。だが此の際彼の看護をしてゐる譯にも行かないので、吾々は彼を楯に乘せて一緒に連れて行くことにした。

宮殿の門前まで行くと、イグノシの軍に歸服した一聯隊の兵が宮殿の警護にあたつてゐた。町の他の入口も、それ〴〵別の聯隊が警護してゐた。そして聯隊長等はイグノシを國王として迎へ、ツワラの軍隊はすつかり城内へ逃げ込み、ツワラ自身もこの中へ逃げてしまつたが、軍隊の士氣はすつかり阻喪してゐるから多分降伏するだらうと言つた。そこで、イグノシは吾々と協議した結果、各城門へ傳令を派遣して、開城するやうに命じ、武裝を解除すれば全部生命は許してやると約束した。その效果は忽ち現はれて、やがて水牛軍歡呼の中に濠に橋が下され、城門はぎいつと開かれた。

吾々は萬一裏切り者のあるのを十分警戒しながら町の中へ進んで行つた。道の兩側には意氣阻喪した戰士等が、首を下げ、楯と鎗とを脚下に投げ出して、イグノシの通るのを見て國王の萬歲を叫んで

ゐた。吾々はまつ直にツワラの宮殿に進んだ。一兩日前に、觀兵式や魔法狩りの行はれた廣場に着くと、そこには人つ子の影も見えなかつた。いや全く見えなかつたのではない、といふのは、ずつと彼方の國王の小舍の前に、ツワラ自身が、たゞ一人の從者ガゴオルと二人で坐つてゐたからだ。

彼が戰斧と楯とを側において、頤を胸につけ、老婆一人を友として坐つてゐるのを見ると、憎い奴ではあるにもかゝはらず、私はそゞろに惻隱の念を催した。彼の率ゐる全軍の中で、一人の兵卒も、數百の宮臣の中でたゞの一人の宮臣も、たゞ一人の后も、今では彼と運命を共にしようとするものがないのだ！　憐むべき蠻王よ！　彼はその時人心の賴みなさをしみ〴〵と感じたに相違ない。人間と言ふものは信用を失つたものには見向きもしないものだ、沒落せんとするものには友もなければ慈悲もないものだといふことを、彼はつく〴〵と感じたに相違ない。しかもこの場合には彼にとつてはそれが當然だつたのだが。

吾々は宮殿の門をくゞつて前國王の坐つてゐる廣場へ進んだ。國王から五千碼ばかりの處まで來ると聯隊は止まり、吾々は少しばかりの護衛兵を連れて、彼の側へ進んで行つた。ガゴオルは吾々を見ると何か口ぎたなく罵つてゐた。吾々が側へ寄ると、ツワラは初めて頭を上げ、ぢつと押へてゐた怒りのために、額に着けてゐるダイヤモンドと同じやうに光る一つの眼で、イグノシをぢつとにらみつけた。

「國王、お目出度う！」と彼は苦々しい嘲るやうな口調で言つた。「おれの稷を食みながら、白人の魔法

の援けをかりて、おれの軍隊を唆かした國王、お目出度う。これから一體おれをどうするつもりだ？」
「汝がわが父に與へたと同じ運命を汝に與へるのだ！」とイグノシは嚴然と言ひ放つた。
「宜しい！　おれが死に方を敎へてやるから後學のために良く覺えておけ！　この次にはお前の番がくるのだぞ！　見よ！　太陽は地の下へ沈んで行く！」と言ひながら彼は戰斧を取り上げて沈む夕陽を指ざした。「おれの太陽はもうこれがお終ひだ。ところで國王、おれはこれから死ぬんだから、ククアナの法律に從つて最後の恩典を許してもらひたい。おれは戰つて死にたいのだ！　それを拒絶する譯には行くまい。それを斷つたら今日お前の軍隊に追はれて逃げて來た卑怯な奴等にすらお前は合せる顏がないのだぞ！」
ククアナでは國王が死刑に處せられる時には、誰か相手を一人選んで、どちらかゞ死ぬ迄果し合ひをすることが許されてゐたのだ。
「承知した！　誰を相手に選ぶか？　わしは遺憾ながらお前と闘ふ譯には行かん。國王は戰場以外では闘ふ事ができない事になつてゐるのだから。」
ツワラの物凄い眼は吾々の隊伍の中をぎろ〳〵搜し廻つた。時々彼の眼は私の上にも落ちた。若し彼が最初に私を相手に選んだら、どうしよう？　六呎五吋もある死物狂ひのあの蠻人と闘つて私に勝味は絶對にない。いつそ一思ひに自殺する方が餘程ましな位だ！　私は慌たゞしく、心の中で、たとひククアナ人からどんなに嘲られても彼の挑戰には應じまいと決心してゐた。戰斧で頭を割られる

よりも笑はれた方がましだと私は思ふのだ。
やがてツワラは言つた。
「おい、そこにゐる白人！　晝間に始めた格闘の結末をつけようぢやないか？」
「いけない！」とイグノシが慌てゝ言葉を挾んだ。「この人と闘ふ譯には行かん！」
「恐ろしいのか？」とツワラは言つた。
運惡くも、サー・ヘンリイはその言葉の意味が判つたと見えて、滿面に朱をそゝいで言つた。
「わしはあいつと闘ふ。わしが恐れてゐるかどうかを見せてやる！」
「どうぞあんな命知らずと闘ふことはよして下さい。今日のあなたの働きを見た人は誰だつてあなたが臆病者だ等と思ひはしませんから」と私は賴んだ。
「わしは闘ふ！」と彼は不機嫌に答へた。「生きてゐる人間に誰だつてわしを臆病者だとは言はせん」と言ひながら彼は戰斧を取つて前へ進み出た。
「そんなことをしてはいけません！」とイグノシはサー・ヘンリイの腕を輕く叩いて言つた。「あなたはもう十分戰つて來られたのですから、あなたの身に萬一の事があつたら、私のこの胸が裂けてしまひます！」
「いやどうしても闘ふよ、イグノシ！」とサー・ヘンリイは答へた。
「では仕方がありません。闘ひなさい！　あなたは勇しい方です。きつと立派に闘ひなさるでせう。

おい、ツワラ、この方が望み通りお前の相手をなさるさうだー」

前國王は獰猛に笑つて前へ進み出で、カーチスと面を向き合せた。暫らくの間彼等は眞赤な夕陽を浴びて棒のやうにそこにつゝ立つてゐた。實にそれは好箇の取り組であつた。

暫らくすると彼等は、互ひに戰斧を振り上げて、相手のすきをうかゞひながら、ぢり〳〵と詰め寄つた。

突然サー・ヘンリイは、ツワラに躍りかゝつて恐ろしい一擊を加へた。ツワラは一歩横へ身をかはした。餘りに猛烈な打擊であつたので、打つた方が却て力のはずみで少し蹌けた。するとツワラはすかさずこの好機に乘じて、大きな戰斧を眞向に振りかざして打ち込んで來た。私は心臟が口へ飛び出すやうな氣がした。もう駄目だと思つた。ところが豈圖らんや、サー・ヘンリイは素速く左の腕を擧げて戰斧と自分の體との間に楯を挾んで防いだ。楯の緣は少し毀けて戰斧は彼の左の肩を辷り落ちた。その次にはサー・ヘンリイが二度目の打擊を加へ、ツワラはそれを楯でがつしと受けとめた。かくして交る〳〵打擊が交されたが、雙方共に巧みに身をかはしたり、楯で受け留めたりした。昂奮は益々高まり、固唾をのんでこれを見てゐた聯隊の者どもは軍紀を忘れて思はず前へにじり寄つた。そして打擊が交されるごとに、叫んだり呻いたりしてゐた。ちやうどその時、私の側に寢てゐたグッドは、正氣に返つて、その場の出來事を知ると忽ち起ち上つて、片足でピョン〳〵跳びながら私の手を引いて、サー・ヘンリイに盛んに聲援を浴せた。

「そこだ。うまいぞ、あぶない。」等と彼は叫びたてた。

やがてサー・ヘンリイは渾身の力を振つてツワラに打つてかゝつた。さしもの楯も鎖鎧も通つて彼は肩に深傷を受けた。彼は傷を受けると益々猛り狂つて、又もや骨も碎けよと許り打つてかゝつた。その力で犀の角で造つたサー・ヘンリイの戰斧は、眞つ二つに割れてしまひ、彼は顏に傷を負うた。

吾々の勇士の戰斧の頭がぽろりと地上に落ち、ツワラが再び武器を振りかざして叫びながら打ちかつて來た時、水牛聯隊の勇士たちは呀つと叫んだ。私は眼を閉ぢた。目を開いて見ると、サー・ヘンリイは楯を地上に捨てゝしまひ、たくましい腕でツワラに組みついてゐた。二人の巨漢は熊のやうに、右に左に巨幹を搖ぶつてゐた。その内にツワラは金剛力を出して、サー・ヘンリイを倒し、二人は地上に上になり下になり轉げ廻つた。ツワラは戰斧でカーチスの頭を打たうとし、サー・ヘンリイは腰から投鎗を拔いて敵の鎧を刺さうとしてゐた。

「戰斧を取つてやれ」とグッドが叫ぶと、その聲はサー・ヘンリイにも聞えたと見えて、彼は投げ鎗を棄てゝツワラの手首に水牛の革で結びつけてあつた戰斧に手をかけ、尙も喘ぎながら猫のやうに轉げ廻つた。突然水牛の革はびり〳〵破れて、戰斧はサー・ヘンリイの手にはひつた。と思ふと次の瞬間に彼はすつくと起ち上つた。顏からは血が瀧のやうに流れてゐた。ツワラの顏も同樣であつた。彼は腰から大きな投げ鎗を拔いてカーチスに向つて跳びかゝり、それを彼の胸に突き刺した。的は外れなかつたが、投げ鎗は鎖鎧のために跳ね返されて終つた。ツワラは再び恐ろしい聲で呻きながら鋭利な

投げ鎗を突き刺したが、やはりまた跳ね返された。そしてサー・ヘンリイは後へ蹌踉とよろめいた。ツワラはまたもや彼に飛びかゝつて行つた。するとサー・ヘンリイは滿身の力をこめて大戰斧を振り上げ、敵の腦天を目がけて發矢と打ちおろした。數千の見物人はけたゝましい叫び聲をあげた。と、どうだらう！　ツワラの頭はまるで肩から彈かれたやうに飛んで行つて、地上に落ち、ごろ〳〵轉げて行つて、ちやうどイグノシの脚下のところで止つた。死體は暫らくの間直立してゐたが、やがてどさりと地面に仆れ、首にかけてゐた黄金の頸鎖は首から拔けてあたりに散亂した。それと同時にサー・ヘンリイも力が盡きてしまつて、ツワラの死骸の上にどしんと重なつて仆れた。

人々は彼を抱き起して顏に水を注ぎかけた。すると彼の灰色の眼はパッチリ開いた。彼は死んではゐなかつたのだ！

陽は今しがた沈んだところであつた。私は薄暗がりの中にころがつてゐる、ツワラの頭の側へ行つて、死者の額からダイヤモンドを外してそれをイグノシに渡した。

「これがククアナの正當な王のしるしだ！」と私は言つた。

イグノシはこれを額に結ひつけ、前へ進み出て首のない敵の死骸の胸のあたりを足で踏へて、勝ち誇つた聲を張り上げて、朗かに凱歌を歌つた。それは實に勇しい歌であつた。私は嘗て或る學者が、立派な聲でギリシヤの詩人ホオマーの歌を原文で朗讀したのを聞いたことがある。それを聞いた時には、歌の意味は判らなかつたが呼吸塞るやうな氣がしたものだ。今歌つたイグノシの歌も、意味はよく

解らなかつたが、このホオマーの詩を聞いた時と同じやうな氣がした。ククアナの言語も、古代ギリシヤ語に劣らず美しい言語だと私は思ふ。

第十五章　グッドの病氣

戰ひがすむと、サー・ヘンリイとグッドとはツワラの小舍へ運ばれて行き、私もそれについて行つた。彼等は二人ともひどい疲れと出血のための貧血とでぐた〳〵になつてゐた。私とても大した相違はなかつた。私は元來丈夫な人間で、體の輕いせゐや、長い間獵で鍛へあげて來たせゐもあらうが、疲勞に對しては人一倍抵抗力をもつてゐた。しかしその晩は眞實へと〳〵になつてしまつた。そして疲れた時はいつでもさうだが、ライオンに囓まれた古瘡がちく〳〵痛み出して來た。それに今朝打たれた頭の打撲傷が劇しく痛むのだ。およそ、その晩の吾々三人ほど慘めな三人は容易に見附かるものではない。吾々のたゞ一つの慰めは、今朝元氣よく起きて行つた數千の勇士が、今夜は野原に死骸となつて横はつてゐるのに、吾々はやつと生きのびて、自分の慘めさを感じる事が出來たことであつた。

ファウラタは、吾々が彼女の命を助けてやつてからといふもの、ずつと吾々の女中のやうになつて、特にいろ〳〵グッドの世話をしてゐたが、この娘の手を借りて、吾々のうちの二人までの命を救つてくれた鎖鎧を脱がした。私の思つた通り鎧の下には恐ろしい打撲傷がついてゐた。鋼鐵の鎖だから刃物こそ貫通しないが打撲傷を拒ぐことは出來ないからだ。サー・ヘンリイとグッドとはまるで打

撲傷の塊りだつたと言つてもいゝ。そして私とてもそれをまぬがれてゐた譯ではなかつたのだ。ファウラタは打撲傷の藥だと言つて匂の良い何とかいふ草の葉を搗き碎いた膏藥を持つて來てくれた。それを傷に當てると大分痛みは和らいだ。

しかしサー・ヘンリイやグッドの受けた刀傷に比べると打撲傷位は何でもなかつた。グッドは彼の『美くしい白い脚』の肉の部分に貫通症を受けて出血の爲にひどく貧血して居り、サー・ヘンリイはツワラの戰斧の爲に頤の上に深い傷を受け、その他にも數ケ所の傷を受けてゐた。幸にもグッドは外科の心得があつたので、小さい藥箱を取り寄せると、早速傷口を洗つて、先づサー・ヘンリイの傷口を縫ひ、次に自分の傷口を縫つた。それから傷のところに消毒用の軟膏を塗つて、その上をハンカチの片で縛つた。

その間にファウラタは、スープを拵らへて來てくれた。吾々は疲れてゐたので堅いものを食ふのも臆劫であつたのだ。吾々はこのスープを飲んで毛皮の蒲團の上に寢ころんだ。運命といふものは皮肉なもので、ツワラを殺したサー・ヘンリイがちやうどその晩ツワラの蒲團で眠ることになつたのであつた。

だが眠ると言つたつて容易に眠る譯に行かなかつた。夫や息子や兄弟を失くした女達の泣き聲がそこらぢゆうから聞えて來た。それも無理はないのだ！　この日の恐ろしい戰ひでククアナ軍の略五分の一にあたる一萬五千の人が死んだもの。寢ながら歸らぬ人のために泣いて居るのを聞いてゐると胸

が迫るやうだつた。だが夜半頃になると、女達の泣聲も段々少なくなつて、たうとうひつそりとしてしまつた。併し時々この沈默を破つて、數分間毎に、鋭い、長い呻聲がすぐ吾々の隣りの小舍から聞えて來た。それは後から解つた所によると、死んだツワラ王を嘆くガゴオルの泣聲であつたのだ。

そのうちに私も少しばかり眠つたが、時々吃驚して目を覺した。恐ろしかつた晝間の夢を見たのだ。だが夜はどうにか過ぎ去つて行つた。夜が明けて見ると仲間の者も私と同じやうに眠れなかつたことがわかつた。グッドはひどい熱を出し、頭が少し變になつて、おまけに血を吐きはじめた。これには私も吃驚したが、きつと前日、ククアナ軍の戰士のために鎖鎧の上からむやみに突かれた時に內出血を起したのであらう。しかしサー・ヘンリイは、顏にうけた傷のために笑ふこともできず、物を食ふにもかなり骨が折れるやうではあつたが、大分元氣を恢復してゐた。

八時頃になると、インファドオスがやつて來た。彼は吾々を見て大へん喜んで心から握手をした。だがグッドの容體を見てひどく心配した。彼はサー・ヘンリイに對しては非常な敬意を表して、彼をたゞの人間ではないと思つてゐるらしかつた。實際、サー・ヘンリイは、ククアナの國では神と思はれてゐたのである。軍人等は、口をきはめて彼の勇氣をたゝへてゐた。晝間にさんざん激戰をしたあとで、國ぢゆうで一番强いツワラの首を、たゞの一打ちで打ち飛ばすやうな人は此の世に二人とないと言つて彼等は感歎してゐた。その後ククアナの國では、ひどく物を打つ場合には『ヘンリイの打擊』と呼んでゐたものだ。

インファドオスの話によると、ツワラの聯隊はみなイグノシに降伏し、ツワラがサー・ヘンリイに殺されたので、もう騒ぎはこれ以上起こるまいとのことであつた。といふのは一人息子のスクラッガも殺されてしまつたので、生きてゐるもので王位に卽く權利のあるものはなかつたからだ。

私はインファドオスに向つてイグノシは血の海を泳いで權力の岸へ泳ぎついたやうなものだと言ふと、彼は肩をすくめて答へた「さうですよ、だがククアナ人は時々血を流さないと溫順しくならんのです。多くの者が殺されましたけれど、女は殘つてゐますから、すぐに代りの者が生れて、それが大きくなると死ぬ人に代つて復讐するのです。そして又暫くの間國内は平穩に治まつて行くのです。」

その後でイグノシがちよつと吾々の小舍へ訪ねて來た。彼の額にはダイヤモンドの王冠が載つてゐた。私は、彼が從者を連れて嚴めしく進んで來る姿を見て、數ケ月前に、ダーバンで、吾々の從者として使つて欲しいと賴みに來た脊の高いズル人の姿を思ひ出して、今更運命の數奇を感じずにはゐられなかつた。

「よう國王お目出度う！」と私は立ち上つて言つた。

「貴方がたのお力でやつと國王になれました」と彼は答へた。

彼の話によると、萬事が順調に運んだので、二週間も經つたら卽位の大典をあげたいと思つてゐるとの事であつた。

私はガゴオルはどう處分することになつたかと訊ねた。

「あれは惡い老婆だから、弟子の魔法使どもと諸共に死刑にすることになりました」と彼は答へた。

「でもあの老婆は物識りだね。」と私は答へた。「知識を集めるのは骨が折れるが、知識を亡ぼすのは雜作ないものだね、イグノシ！」

「さうです」と彼は感慨深く言つた。「あの老婆はむかうに聳えてゐる『三人の魔女』と『無言の神』との祕密を知つてゐるのです。そしてこの祕密を知つてゐるのはあの老婆だけなのです。」

「それにダイヤモンドの事もあるね。約束を忘れちやいけないよ。イグノシ。吾々をダイヤモンド坑まで連れて行つてくれなくちや困るよ！」

「その事は忘れはしません。」

イグノシが出て行くと、私はグッドの樣子を見に行つた。彼は熱に浮かされて譫言ばかり言つてゐた。四五日の間が最も危險な時期だつたので、ファウラタがその間骨身を惜まず看護してくれなかつたら、彼はきつと死んでしまつたに相違ないと私は堅く信じてゐる。

何處の世界へ行つても女は女だ。皮膚の色によつて變りはないものだ。彼女はまるで熟練した病院附きの看護婦のやうに、病人の枕元について何かと看護をしてゐた。初めの一晩は、私は彼女の手傳ひをしようとした。サー・ヘンリイも身體が動けるやうになると、彼女の手傳ひをしようとしたが、彼女は吾々が世話をやくのを好まなかつたと見えて、吾々がざわ〳〵動き廻ると病人が落着かないから、病人の看護は彼女一人に任せてもらひたいと言つた。吾々もそれはもつともだと思つた。日とな

く夜となく彼女は彼の病床につききつて看護した。そして牛乳の中へ一種のチュウリップの莖から採つた汁を混ぜた解熱劑を服ませたり、彼の身體に蠅がとまらないやうに追拂つたりしてゐた。グッドはあちこちへ轉げまはり、顏はひどくやつれて、大きな眼は爍々光り、しよつちゆう何かべちやべちやしやべつてゐた。彼女は小舍の壁に背を凭せて、彼の側に立つてゐた。そのやさしい眼には病者に對する限りないやさしさがこもつてゐるやうに見えた——ことによるとそれは同情以上の何物かであつたかもしれない。

二日の間、吾々は彼は死ぬに相違ないと思つてゐた。そして心配さうに度々樣子を見に行つた。

たゞフアウラタだけはさう信じてゐなかつた。

「あの人はきつと助かりますよ！」と彼女は言つた。

ツワラの宮殿から三百碼以内の地域内には全く人聲が聞えなかつた。といふのは國王の命令で、サー・ヘンリイと私との外は、凡ての者が他の場所へ撤退してゐたからだ。それは病人の耳へ人聲が聞えないやうにするためだつた。グッドが病氣になつてから五日目の晩に、私はいつものやうに、床につく前に彼の樣子を見に行つた。

そつと小舍の中へはひつて行くと、薄暗いランプの光りでグッドの姿が見えた。彼はもうばたくく騷ぐのを歇めておとなしく寢てゐた。

たうとう最期だなと思ふと、私は胸が迫つて思はず啜り泣きを洩した。

「しつ！」とグッドの頭の後の方から誰かゞ言つた。

側へ寄つて見ると、彼はまだ死んでゐたのではなくて、白い手でフアウラタの細い指をかたく握り締めながら、すやく眠つてゐたのだ。もう危機は通りすぎて彼の命は助かつたのだ。彼はそんな風にしてもう十八時間も眠つてゐたといふことであつた。私はこんなことを言ふと譃だと思ふ人があるかも知れないから言ひたくないのだが、この十八時間の間ぢゆう、この忠實な娘は自分が動いたり、手を放したりすると病人が目を覺しはしないかと思つて、ずつとそのとほりにしてゐたのだ！　ひもじい位の事は何でもないとして、どんなに彼女は手足が疲れ、痺れたことであらう。實際彼が目を覺した時には、彼女は手足が硬ばつて動けなかつたので、人手を借りて運んで行つて貰はねばならなかつたくらゐだ。

一度危機を通り過ぎると、グッドの恢復は非常に速く且つ完全であつた。サー・ヘンリイは、グッドが餘程恢復するまでフアウラタの心をこめた看病のことを話さなかつたが、彼女がグッドの目を覺しては惡いと思つて、彼の側に十八時間も立ち通してゐたのだと話したときには、正直なこの水兵の兩眼には涙が溜つた。彼は早速、フアウラタが晝食を準備をしてゐた小舍へ眞直ぐに駈けて行つた。言葉の通じない場合に通譯するために私も一緒に蹤いて行つた。

「私はあの女のために命が助かつたのだから、あの女の親切は一生忘れませんと言つて下さい」とグッドは言つた。

私がそれを通譯すると彼女は淺黑い皮膚の下で、さつと顏を赤らめたやうであつた。

彼女はまるで小鳥が飛ぶときのやうな素早い、それでゐて、しとやかな身振りで彼の方を向き、大きな鳶色の瞳でちらりと彼を見ながら言つた。

「どういたしまして、あの方は忘れていらつしやるのよ、あの方こそ私の命を救つて下さつたのでありませんか。それに私はあの方の下女ぢやありませんか？」

この娘は、どうやら、彼女の命を助けた時にはサー・ヘンリイや私も與つて力があつたことなどはけろりと忘れてゐるらしかつた。しかし女といふものは皆さうしたものだ！　私の親愛なる女房もその通りだつたことを私は覺えてゐる。私は厄介なことになつたと思つて、鬱いだ胸を抱いて、この小さな會見から身を退いた。ファウラタのやさしい眼附がどうも氣になつたのだ。といふのは、水兵といふ人間は一たいに女にあまいものなのだが、特にグッドと來てはそれが甚だしかつたからだ。

この世の中に避ける事の出來ない事が二つある。ズル人に戰爭をさせないこと、水兵にちよつとしたことで、すぐに女に惚れるのをやめさせること、がそれだ。

それから數日經つと、イグノシは、國民會議を召集して、正式にククアナ國の國王として承認された。その時には軍隊の觀兵式も行はれて非常に盛大な祝典だつた。白髮聯隊の殘軍は、この日、軍隊の前で整列して、正式に大戰の時の赫々たる武勳を感謝され、殘存者は凡て國王から多くの家畜を賜り、悉く士官に昇進して新しく編成される白髮聯隊の指揮官になつた。また全國に布令を發して、

吾々がこの國に滯在する間は、吾々三人には、國王と同樣の待遇をするやうに命令され、吾々は生殺與奪の權を與へられた。それからイグノシは今後審問せずして人を殺すことを嚴禁し、魔法狩りは今後絕對に禁止することを公約した。

式がすむと吾々は、イグノシを訪ねてソロモン街道の終點にある坑山を探檢して見たいと告げ、その後この坑山について何か樣子が判つたかと訊ねた。

「かういふことが判りましたよ」と彼は答へた。「この土地で『無言の神』と言はれてゐる三つの巨像は、その坑山の側にあるといふことです。『無言の神』と言ふのは御承知の通り、ツワラが少女のファウラタを犧牲に供へようとした神なのです。そこにはまた大きな深い洞窟があつて、その中に歷代の國王の屍が埋られてゐるのです。ツワラの國王もそこに埋められてゐる筈です。そこにはまた深い竪坑があつて、それはずつと昔の人が掘つたものださうですが、ことによるとそれはあなた方の仰言る寶石を目當てに掘つたものかもしれません。また國王の墓場には、祕密の窟があつて、それを知つてゐるものは國王とガゴオルとだけなのです。けれどもそれを知つてゐたツワラは死でしまつたし、私はその窟も知らなければその窟に何があるかも知らないのです。けれどもこの土地の傳說によると、ずつと昔一人の白人が山を越えて一人の女に伴はれてその祕密の窟へ案內され、その中に藏つてある寶物を見せてもらつたと言ふことです。だがその白人がその寶物を取り出す前に、その女が彼を裏切つたので、彼はその當時の國王のために山の方へ追ひ返され、その後は誰もその窟へ行つたことはな

いと言ふことです。」
「その話は眞實だ。吾々は山の上でその白人の死體を見て來たんだから」と私は言つた。
「さうです吾々は見ました。そして私はあなたに約束しました。もしあなた方がその窟へ行くことが出來て、そこに寶石があれば――。」
「寶石があるつてことは、お前の額につけてゐる石の寶石で判つてゐる」と私がツワラの死體から取つて彼に與へた大きなダイヤモンドを指さしながら言つた。
「若しあればあんた方は持てるだけお持ちになつて良いのです。」
「まづ第一にその窟を見附けなければならん」と私は言つた。
「そこへ貴方がたを御案内出來るものは一人しかありません。それはガゴオルだけです。」
「で、もしあの老婆が案内してくれなかつたら？」
「その時にはあの老婆は死刑です！」とイグノシは嚴肅に言つた。「私はたゞそれだけのためにあの女を生かしておいたのです。お待ちなさい。あの老婆がどう言ふか聞いて見ませう。」かう言ひながら彼は從者に命じてガゴオルにすぐに出頭するやうに告げた。
暫らくたつと、彼女は二人の護衛に急きたてられて、その護衛の者を口ぎたなく罵りながらはひつて來た。
「その女を殘しておけ」と國王は護衛に向つて言つた。

彼女は支へるものがなくなると、その場にぐたりとへたばつてしまつた。
「何か用かねイグノシ？」と彼女は嗄れ聲で言つた。「お前はこのわしに指一本も觸ることは出來ないのだぞ。もし觸つたらお前をこの場で殺してやる。わしの魔法に氣をつけるがよいよ！」
「お前の魔法でもツワラを助けることが出來なかつたでないか。狼婆！　わしをどうすることも出來るもんか」と彼は答へた。「まあ聞け！　用事と言ふのはかうだ。光る石のある窟を吾々に敎へるのだ！」
「は！　は！」と彼女は嗄れ聲を出した。「それを知つてるのはわしだけだ。そのわしは決してお前に敎へはしないぞ。白人の野郎共はこゝから手ぶらで歸らせてやる。」
「どうしても言はなくちやならん。わしはお前に言はせて見せる！」
「何だつて、國王？　お前は成る程偉いかも知れんが、お前の力ではわしの口から眞實を言はせることは出來ないよ！」
「それは難かしいだらう。だがわしは言はせて見せる。」
「どうして言はせるのだね、國王？」
「かうするのだ。もしお前が言はないと、お前をじり〳〵嬲り殺しにしてやる。」
「殺すつて？」と彼女は恐怖と憤怒の餘り金切り聲で叫んだ。「お前はわしに手を觸れる事は出來ないと言うたではないか。お前はわしをどんな人間か知らないのだね。わしの年齢は幾つだと思ふ？　わ

しはお前の父親も、お前の父親の父親の父親も知つてるのだよ。わしはこの國の若い白分からこゝにゐたのだ。そしてこの國が年をとるまでゐるつもりだ。わしは偶然戀死でもすれば別のこと、人手にか、つて殺されたり何かはしないよ！」

「それでもわしは殺して見せる。おいガゴオル、お前だつてもうそんな年をして生きてゐる樂しみもないだらう。髮は脫け、齒は落ち、體の恰好も顏の形も何もかも無くなつて、たゞ惡心と意地惡い眼とばかりになつてゐるお前のやうな惡婆が生きてゐて何の樂しみがあるのだ？　一思ひに片附けてやつた方が却つてお前のためでないか。」

「莫迦！」と鬼婆は叫んだ。「お前は生きてゐる樂しみは若い者だけしかもつてゐないと思ふのか？　さうぢやないんだよ。そんなことを思つてゐるから人間の心が何一つ判りはしないのだ。若い者は、時とすると死にたい氣もするだらう、若い者には感情があるからな。若い者は戀をしたり、苦しんだりするからな。戀人が死で行くのを見るのなんざあ、ずゐぶんつらいもんだからな。だが老人には感情はないのだよ、戀もないのだよ、は！　は！　老人は他人が死んでも笑つてるのだ、は！　は！　世の中で惡いことが行はれるのを見て笑つてるのだ！　老人の好きなものは何よりも命だよ。命と暖かい陽の光りと、良い空氣とだ。寒いのと、死ぬのとは老人には禁物だよ。ひ！　ひ！　ひ！　かう言ひながら老婆は地べたにのた打ちながら氣味惡く笑つた。

「へらず口はやめて返事をしろ！」とイグノシは怒つて言つた。「お前は一體石の在りかを敎へるのか

敎へないのか？　若し敎へないのなら今この場で殺してやる。」

「敎へるもんか。お前はわしを殺すことなんか出來はしないのだ。わしを殺すと災が降りかゝつて來るぞよ。」

イグノシは鉞をとり上げてそれを段々下の方へのばし、たうとう地面に蹲踞つてゐる襤褸の塊をちくりと刺した。ガゴオルはギャッと呻いて跳び上つて、またぐたくと地面に、へたばつた。

「敎へます！　敎へます！　命ばかりはお助けを！　陽なたに坐つて肉の片をしやぶらして下されば、それでよい、敎へてあげます！」

「よし、かうしてやればお前は言ふことをきくんだな。明日インファドオスと白人のお客樣とをそこへ案內せい！　道を間違へぬやうに氣をつけるがよいぞ！　若し案內することが出來なかつたら、なぶり殺しにしてやるぞ！」

「間違へつこはないよ、イグノシ。わしは約束だけは必ず守りますよ。以前に一度、或る女が一人の白人をその窟へ案內したことがある。ところがその白人に災が起つたのだぜ！」と言ひながら彼女は意地惡い眼をぎろりと光らせた。「その女の名前もガゴオルと言つたのだ。ことによるとその女はわしだつたかもしれないて。」

「嘘を吐け！」と私は言つた。「それは十代も前のことぢやないか！」

「さうだつたかもしれん。餘り長生きをすると忘れつぽくなつてな。では多分その話はわしのお祖母

さんから聞いた話だつたのぢやらう。そのお祖母さんの名前もたしかにガゴオルと言つたつけ。だがその光る石のある處に石を一ぱい入れた皮の袋が一つあるよ。その石はその男が入れたのだ。しかし、石を集めるには集めたが持つて歸ることは出來なんだのぢや、災が起つて來てな。災がだよ。多分、この話はわしのお祖母さんから聞いたのぢやらう。きつと今度の旅は樂しい旅ぢやらうて。途中で戰爭で死んだ者の死骸も見られるしな。もうその死骸の眼玉は失くなつてゐるぢやらうて。肋骨はがらん洞になつてるぢやらうて、は！　は！　は！」

第十六章　國王の墓場

それから三日目の日が暮れたときには、吾々は既に『三人の魔女』の麓の小舍に停つてゐた。ソロモン街道は、そこまで來てゐるのだ。一行は吾々三人と吾々――特にグッド――の世話をしてゐたフアウラタと、インファドオスとガゴオルとであつた。ガゴオルは駕籠に乘せられて、その中で始終ぶつぶつ呟いたり罵つたりしてゐた。その外に護衛兵と若干の從者とが蹤いて來た。三つの山、といふよりもむしろ一つの山にある三つの峰――は前にも云つたやうに三角形を形造つてゐて、その基點になる峰が吾々の方を向いて聳えてゐた。左右に一つ宛の峰があつて、中央の峰が吾々の眞正面にあるのだ。その翌朝、朝日を浴びて高く聳えてゐる三つの峰を見たときの光景は、忘れられないものであつた。雪を冠つた山頂は高く〳〵青空に聳え、雪線の下はヒースのやうに紫色に染つてゐた。吾々

の前には、ソロモン街道が、白いリボンのやうに、眞直ぐに約五哩ほど先きにある中央の峰の麓まで、爪先き上りに走つて、そこで終つてゐた。

だがさうしたことは諸君の想像に任せることにする。たうとう吾々は、三世紀以前にポルトガルの老人の慘めな死の原因となり、その何代目かの後裔であつた私の知つてゐる不運な男の死の原因ともなり、ことによるとサー・ヘンリイ・カーチスの弟のヂョーヂ・カーチスの死の原因ともなつたかも知れない不思議な坑山に近づいた。吾々は果してそこから無事に歸つて來られるだらうか？　老婆のガゴオルは彼等に災が降りかゝつたのだと言つた。吾々にもその災が降りかゝるだらうか？　私は歩きながらも幾らか氣がかりになつて來た。グッドも、サー・ヘンリイも同じだつたと思ふ。

一時間半ばかりも、路傍にヒースの生えた道を歩いて行くと、少し遲れて蹤いて來たガゴオルが嗄れ聲を出して吾々に止まれと叫んだ。

「もつと悠つくり歩くんだよ。」と彼女は草を編んで拵へた籠の簾の間から顏を突き出して言つた。

「寶物を捜しに行くものには、皆が皆災が降りかゝるのだぜ。そんなに走つてまで、わざ〳〵災を背負ひ込みに行かなくたつていゝだらう！」そして彼女は恐ろしい聲で笑つた。彼女の笑ひ聲を聞くといつでも私は脊筋が寒くなつた。

だが吾々は尙も進んで行くと、遂に吾々の前に大きな四角い坑が見えた。坑の周邊は勾配になつてゐて、深さ三百呎、周圍はたつぷり半哩もあつた。

「これは何だか判りますか？」と私は、この大きな竪坑を呆氣にとられて見てゐたサー・ヘンリイとグッドとに訊ねた。

彼等は首を振つた。

「ではあんた方はまだダイヤモンドの本場のキンバアリイでダイヤモンドを採掘する所を見たことがないのですね。これはきつとソロモンのダイヤモンド坑に相違ありませんよ。御覽なさい」と私は坑の四邊を蔽うてゐる草の中にまだ見える硬い青土の層を指しながら言つた。「全然同じですよ。」

ポルトガルの老人の地圖に記してある竪坑に相違ない。この坑の周邊で街道は二つに岐れて、その坑をぐるりとかこんでゐた。この周圍の道の處々はすつかり石で出來てゐた。それは坑のふちが崩れるのを防ぐためらしかつた。坑の反對側に立つてゐる三つの塔のやうなものが見えるが、あれは何だらうと好奇心に驅られながら、吾々は道を急いだ。だん〳〵近づくにつれて、それは三人三樣の形をした三つの巨像であることが判つた。それこそククアナの人民が非常に畏れてゐる『無言の神』であらうと吾々は推測したが、果してその通りであつた。しかし、この三つの巨像の莊嚴さはその側へ行くまでははつきり判らなかつた。

生殖器崇拜教の粗笨な象徴を彫り附けた大きな石の臺の上に、約二十歩づゝの間隔をおいて、三つの巨像が坐つてゐた。二つは男で、一つは女で、何れも頭の上から臺の上のところまで十八呎ほどあつた。女の像は裸體できりつとひきしまつた中々の美人であつたが、長い年月の間風雨にさらされ

てゐたために、顏は大分破損してをり、額には角髪のあとがあつた。これに反して二つの男の像は身に布を纏ひ、恐ろしい形相をしてゐた。わけても右の方の像は惡魔のやうな顏をしてゐた。左の方の像は靜かな顏つきをしてゐたが、その靜かさは身顫ひするやうな靜かさだつた。

この『無言の神』を見てゐるうちに、誰がこんなものをこしらへたのだらう、それからこの竪坑を掘り、あの街道を造つたのは誰だらうと言ふ疑念が吾々の心に起つて來た。ふと私は舊約聖書にソロモンが異國の神を追うて彷徨ひ歩くところを思ひ出した。その三人の神の名前を私は覺えてゐた。シドニヤ人の女神アシトレトとモアビタ人の神ケモシと、アンモンの子供等の神ミルコムとだ。そこで私はこの巨像はその三人の神をかたどつたものではなからうかと連れの者に言つた。

「ふむ」と古典學者のサー・ヘンリイは言つた。「さうかも知れんね。ヘブライ人のアシトレトはフェニキヤ人のアスタルテで、これはソロモンの時代の大商人だつたのですよ。そして、それが後にギリシヤのアフロヂットになつたのです。この神には半月形の角がありましたが、この女の像にも角の跡がありますからね、ことによるとこの巨像はフェニキヤの役人が考へついたものかもしれませんね」

吾々がこの古代の遺物をすつかりしらべ終らない中に、インフアドオスがやつて來て、無言の神に鎗を擧げて敬禮した。そして吾々に向つて、これから直ぐに國王の墓場に行くか、それとも晝の食事を濟ますまで待つかと尋ねた。若し直ぐ行くならガゴオルが案内するといふことであつた。まだ十一時前ではあるし、吾々は早く目的地が見たくてたまらなかつたので、直ぐにこれから行きたいと言つ

た。そして私は、もし遲れた場合の要心に少し食物を持つて行くことにした。やがてガゴオルの駕籠がその場へ運ばれ、ファウラタは私の頼みで若干の乾肉と、水を入れた二つの甕とを葦で造つた籠の中へ入れて持つた。ガゴオルは駕籠の中から出ると、じろりと吾々を見て杖にすがつて巨像の五十歩ばかり後に立つてゐる八十呎もある嶮しい岩の斷崖の處まで踰躑しながら行つた。吾々も彼女の後からついて行つた。そこには坑道の入口らしいアーチ形の狹い門があつた。

ガゴオルは氣味の惡い笑を浮べながらそこで吾々を待つてゐた。

「さあ、さあ！」と彼女は嗄れ聲で言つた。「皆用意はよいかな。どれ、それではこれから國王の命令通り光る石のところへ案内することにしよう、は！　は！　は！」

「用意は良い」と私は言つた。

「よしよし！　氣をたしかに持つて何を見ても吃驚せんやうにするがいゝぜ、さあインファドオス、國王を裏切つたお前さんも道づれになるかね？」

インファドオスは眉をひそめて答へた。

「いや、わしは行かん、わしには用がない！　だがガゴオルよく氣をつけろ！　お客樣がたの髮の毛一本でも傷つけたら、お前の命はないのだぞ、いゝか？」

「判つたよ、インファドオス、わしはお前を知つとる。お前はいつも大きなことを言ふのが好きだつた。お前はまだほんの赤ん坊の時に、お前の母親をおどかしたのを覺えてゐるよ。それはまだほんの

此間のことだつたからな。だが心配せんでもいゝ、わしは國王の命令をはたすだけのために生きのびてゐるのだからな。わしはこれまでにも澤山の國王の命令通りに働いて來たが、しまひにはどの國王も皆わしの命令を聞くやうになる、は！　は！　どれ、これから昔の國王の顏でも見て來ようか！

外套の下からあやしげな燈芯を出して灯を點けた。

「お前も行かないかね、ファウラタ？」とグッドはこの娘のお蔭で大分上手になつたククアナ語で訊ねた。

「怖いわね」と娘はおづ〳〵答へた。

「では僕がその籠を持つて行かう。」

「いゝえ、あなたの行きなさる處なら、どこへでも一緒に行きますわ！」

「これや愈々困つたことになつたわい」と私は心の中で思つた。

ガゴオルはさつさと道の中へはひつて行つた。道は二人でたつぷり並んで歩けるほど廣かつた。そして眞つ暗だつた。吾々はこは〳〵老婆の嗄れ聲のする方へついて行つた。すると、不意にばたく羽搏きの音がした。

「おや、あれや何だらう？」とグッドは叫んだ。「何か僕の顏にあたつたぜ。」

「蝙蝠だよ」と私は言つた。

かれこれ五十歩ばかりも來たと思ふ頃、吾々は道が少し明るくなつて來たのに氣がついた。それから暫くたつと、吾々は實に驚くべき場所へ來てゐた。

讀者諸君は諸君がこれまで見たことのある一番大きい伽藍を想像して欲しい。だがその伽藍には窓はなくて、上の方に、恐らく外へ通ずる竪坑があつて、そこから微かな明りが通つてるのだ。そしてアーチ形の屋根は、床の地面から百呎も上にあるのだ。かういふ伽藍を想像すれば、略、吾々のはひつて行つた洞窟の大體の見當がつくだらうが、たゞ異つてる點は、この自然にできた伽藍は人間のこしらへたどの伽藍よりも高くて廣いといふ點だ。しかしこの場所の不思議さは、たゞ大きいといふばかりでなくて、その中には一見氷のやうな、大きな柱が澤山竝んで建つてゐたのだ。それは鐘乳石の柱なのだ。この白い柱のすくすくと竝んで立つてゐる光景は到底筆紙でつくしがたい雄大なもので あつた。中には起本部の直徑が二十呎もあつて天井まで續いてゐる柱もあつたし、中にはいま現に形成されつゝある柱もあつた。岩の床からできかゝつてのゐるのは古代ギリシヤの寺院の壞れた柱そのまゝで、上の屋根から下つてるのは大きな氷柱そのまゝであつた。

吾々が見てゐる中にもこの柱は刻々に出來つゝあつた。といふのは上の方の氷柱から下の柱の上へ時々小さい水滴がぽたり、ぽたりと落ちてゐた。中には二三分間に一滴位しか落ちないのもあつた。こんな割合で高さ八十呎直徑十呎もある大きな柱が出來るには何年かゝるかを計算して見るのも興味のあることだらう。

鐘乳石といふものは時々妙な形になることがある。それは水の雫が同じところへ落ちないためにさうなるのであらう。或るものは大きな說教臺のやうな形をしてゐた。

この大きな洞窟の側壁には、ところどころに道が通じて、小さい洞窟がその先きに開いてゐた。だが吾々はこんな美しい洞窟もゆつくりしらべてゐるひまはなかつた。といふのは、ガゴオルは鐘乳洞などには無頓着で、早く自分の仕事を濟ましてしまはうとしてゐたからだ。特に私はどうして洞窟の中へ明りがはひるのか、それは自然にさうなつてゐるのか、或はまた人間の手でさういふふうに造つたのかを調べて見られなかつたのを殘念に思つた。だが吾々は歸りにゆつくり見て行かうと思つて、それで諦めて不愛想な案內者の後を蹤いて行つた。

ガゴオルのあとへついて眞直にこの洞窟の突き當りまで行くと、そこにはまた入口があつた。この入口は初めの入口と違つて、上がアーチ形でなく、四角で、ちよつと埃及の寺院の入口に似たところがあつた。

「さあこれからいよ〳〵國王の墓場へはひるんだぜ、用意は良いかね？」とガゴオルは訊ねた。明かに吾々をわざと氣味惡がらせるつもりらしかつた。

「いゝから行け！」とグッドはちつとも恐くなんかないといふことを見せようとしながら嚴かに言つた。實際吾々はみなさういふふうを裝つてゐたのだ。たゞファウラタは別で、彼女はグッドの腕につかまつてかばつて貰つてゐた。

少し氣味が惡くなつて來たねえ」とサー・ヘンリイは暗い道を覗きこみながら言つた。「さあ行きませう、コオターメンさん、あの婆が待つてゐるから。」

ことり〳〵とガゴオルは杖の音をさせて無氣味な聲で笑ひながら歩いて行つた。だが私はまだ何となく薄氣味が惡いのでもぢ〳〵してゐた。

「早く來なさい」とグッドは言つた。「でないとあの綺麗な案内者を見失ひますよ。」

こんなふうに言はれたので、私も仕方なく道を降りて行つた。かれこれ二十歩ばかりも行くと、陰氣な暗い部屋の中へ着いた。その部屋は長さ四十呎、幅三十呎、高さ三十呎位あつて、明らかに人間の手で岩を掘り拔いて造つたものであつた。この部屋は前の大きな鐘乳洞のやうに明るくはなかつたので、初めて見た時には、部屋の中に大きな石の臺があつて、その上に巨大な白い像が立つて居り、その周圍に人間位の大きさの白い姿が立つてゐるのが見えただけであつた。その次に私は蒸色のものが一つ中央の臺の上に坐つてゐるのを發見した。それからだん〳〵眼が光りになれてくるにつれて、そこにあるのが何であるかゞ判つて來た。

私は元來あまり神經質な人間ではない。それにあまり迷信などは信じない方だ。だがこの光景を見た時ばかりは私は仰天してしまつた。そしてサー・ヘンリイが私の素首を掴んで止めなかつたら、私はきつとこの鐘乳洞の外へ飛び出してしまひ、キンバーリーのダイヤモンドを殘らずくれると言つても二度とその中へはひる氣にならなかつたゞらうと思ふ。だが、サー・ヘンリイがしつかり掴んでゐて

どうにもできなかつたので、私はその場に止つてゐた。しかし暫らくすると彼の眼も暗になれてきたと見えて、サー・ヘンリイは私を掴んでゐた手を放して額の汗を拭きはじめた。グッドは微かな聲で神を祈り、ファウラタは彼の頸に抱きついてけたゝましく泣き叫んだ。

たゞガゴオルだけは大きな聲を出して長く笑つただけだつた。

それは實に氣味の惡い光景であつた。長い石の臺の端に、骨だけの指で大きな白い鎗を持ちながら死の神が坐つてゐた。それは高さ十五呎もある大きな人間の骸骨の形をしてゐた。この骸骨は頭の上へ鎗を振りあげて、今にも突かうとするやうな身構へをして居り、片手は石の臺の上に載せて、今にも起ち上るやうな樣子をしてゐた。上體は前こゞみになつて頭蓋骨を前に突き出し、空洞の眼でぢつと吾々を凝視め、頤を少し開いて、今にも物を言はうとするやうな風をしてゐた。

「一體あれは何だらう？」とたうとう私は微かな聲で言つた。

「それから、あの周りにあるものは何だらう？」とグッドは臺の周りに並んでゐる多くの白いものを指ざしながら訊ねた。

「それがらあれはなんだね？」とサー・ヘンリイは臺の上に坐つてゐる蒸色のものを指ざしながら言つた。

「ひ！　ひ！　ひ！」とガゴオルは笑つた。「國王の墓場へはひるものには災が降りかゝつて來るのぢや。ひ！　ひ！　ひ！」

「さあお出で、戰爭では勇しかつたヘンリイとやら、こちらへ來てお前が殺した相手を見るんだ」と老婆は干乾びた指でカーチスの上衣を引つぱつて臺のところへ連れて行つた。吾々はそのあとから蹤いて行つた。

やがて彼女は立止つて、臺の上に坐つてゐる鳶色のものを指ざした。サー・ヘンリイはそれを見ると呀つと叫んで後へ跳び退つた。それも無理ではない、といふのは、臺の上には、カーチスが戰斧で首と胴とを切り放した、ククアナの前王ツワラのやつれた死骸が裸のまゝで坐つてゐるではないか。しかも首は膝の上へのせてあつて、切られたあとの頸の肉は縮んで、脊柱が一吋ばかり上へ突き出てゐたのだ。おまけに死骸の表面には薄い透明な膜が出來てゐるので、益々薄氣味が惡かつた。なぜそんなものが出來たのか初めの中は良く判らなかつたが、よく見ると天井からポタリ〳〵と水滴が死骸の頸の處へ落ち、それが體軀の表面を傳はつて、臺の小さい穴から岩の中へ流れてゐるのであつた。それで薄い膜の出來てゐる譯が判つた。ツワラの死骸は刻々鐘乳石になりつゝあつたのだ。

この氣味の惡い臺の周りを取り圍んで坐つてゐた眞白な人間の姿を見た時に、この見解は益々確實なものとなつた。そこに竝んでゐるのはみな人間の身體なのだ、といふよりも嘗て人間だつたのが、今では鐘乳石になつてしまつてゐるのだ。こんなふうにしてククアナの人民は太古の昔から、國王の屍體を保存してゐたのである。

この國王たちの屍體の長い列は實にこの上なく物凄い見物であつた。二十七の屍體が悉く氷のや

うな屍衣を纏うて、死の神を主人としてその無氣味な臺の周りに列んで坐つて居り、透明な屍衣を透して、微かに顏の輪郭を見ることが出來た。この屍體の數から推して考へても、この習慣は餘程昔から行はれてゐたに相違ない。國王の平均在位年限を十五年としても、四百五十年は經つてゐるのだ。

しかし死の神の巨像の方は、それよりもずつと古いものに相違ない。これは例の三つの巨像をこしらへたのと同じ藝術家の手になつたものであらう。この像は天然の鐘乳石を切つて造つたもので、解剖學の心得のあるグッドの說によると、この骸骨は小さい骨の形や配置にいたるまで、解剖學的に完全なものだとのことであつた。

私の考へによるとそれは多分古代の彫刻家が氣紛れに造つたのを、ククアナ人が見て、その周圍へ國王の死骸を安置しようと考へついたものであらう。それともことによるとその先にある寶窟へ闖入しようとするものを恐れさすために造られたものかも知れぬ。

それは何れにしてもこれが白い死の神と白い屍體との正體であつたのだ。

第十七章　ソロモン王の寶窟

吾々がやつと恐れから鎭まつて、氣味の惡いこの墓場を調べてゐる間に、ガゴオルは別なことをしてゐた。彼女はどうにかかうにかして大きな臺の上へ匍ひあがり、ツワラの死骸の坐つてゐる傍まで行つて何か無氣味なことをしてゐた。ことによると、彼の死骸がもうどれだけ石化したかをしらべて

ゐたのかも知れぬ。それから蹌けながら後へ退つて鐘乳石の屍衣を纏つた白い一つ二つの屍體の前で立ち止つて昔馴染にでも物を言ふやうに、何か判らぬことを喋つてゐた。それがすむと彼女は、白い死の神の脚下にうずくまつて何か祈りをさゝげてゐるらしかつた。多分、良くない祈願をしてゐたものだらうと思ふ。吾々はそれを見るとぞつとして早くこの場から出て行きたくなつた。

「さあ、ガゴオル、寶窟へ連れて行け！」と私は低聲で囁いた。

老婆はすばやく臺の上から匍ひ下りた。

「怖くないかね？」と彼女は私の顏を見上げながら言つた。

「さあ行け！」

「よし、よし」と言ひながら、彼女は杖にすがつてよちよちと死の神の後の方へ廻つた。「寶窟は此處にあるのだ。ランプに火を點けてはひりな」かう言ひながら彼女は油壺を下において洞窟の壁に凭れた。私は燐寸を取り出して燈芯に火を點け、入口を搜して見たが、前には堅い岩ばかりで入口らしいものはどこにもなかつた。ガゴオルは無氣味に笑つた。「そこが道だよ、は！　は！　は！」

「お前は吾々をからかつてゐるな！」私はきつとなつて言つた。

「からかつてるんぢやないよ、よく見な！」と言ひながら彼女は岩を指ざした。

ランプを差し上げて見ると、石の塊が徐々に床から上へあがつて、上の岩の中へ消えてしまつた。きつとその石のはひる窪みが上に出來てゐたのだらう。その石は高さ十呎幅五呎もあつてかなり大きな扉ぐらゐの大きさのものであつた。重さは少くも二三十噸はあつたらうと思ふ。それが簡單な仕掛けで、雜作なく動くやうになつてゐたのだ。多分近代の窓を上下するのと同じ仕掛けだつたらうと思ふが、無論吾々にはどういふ仕掛けになつてゐるのか判らなかつた。

この大石がしづ〳〵とひとりでに上へ上つて、すつかり見えなくなると、その跡に眞暗な坑が現はれた。

いよ〳〵ソロモンの寶窟へ來たんだな、と思ふと私は昂奮のために身體がぞく〳〵して來た。吾々は一ぱいかつがれたのかな、それともダ・シルヴェストラの書いたことに間違ひはなくて、この暗い坑の中に寶物がどつさりあつて、吾々は世界一の金持になれるのかな？　それはもう一二分でわかるのだ。

「そこへはひるんだよ」とガゴオルは入口から中へ進みながら言つた。「だが、その前にこのガゴオルの言ふことを聞いておきな。このさきにある光る石は、無言の神の立つてゐる竪坑の中から掘り出して、こゝへしまつてあるのだ。誰がさうしたのかわからないがね。こゝに寶物がしまつてあるといふ噂は、この國の人民に代々言ひ傳へられてゐるのだが、誰もそのありかを知るものもなく、祕密の入口を知つてゐるものもないのだ。しかしずつと以前に一人の白人が、山を越えて、この國へやつて來て、その當時の國王から大變款待を受けたことがある。——多分その白人も昼の國からでも來たのだらう。この白人が、この國の一人の女と一緒にこゝまでやつて來て、その女が偶然この祕密の扉を見

附けたのだ。お前さんたちが千年かゝつて捜したつて見附かりつこはないのだよ。そこでその白人は女を連れて中へはひつて、光る石を見出だし、その女が辨當袋に持つて來た、小さい山羊の皮に石をいつぱい詰めこんだのだ。そして愈々窟を出ようとするときになつて、もう一つ大きな石を拾ひ上げて、それを手に持つたのだ」こゝまで言つて彼女は話を切つた。

「ふむ、それでダ・シルヴエストラはどうしたんだね？」と私は深い興味を感じて呼吸もせずに訊ねた。

老婆は、私がシルヴエストラの名前を言つたのを聞いて吃驚した。

「お前はどうしてその死んだ男の名前を知つてるのだね？」と彼女は鋭くきゝとがめた。そして答も待たずに續けて言つた。

「それからかうなんだよ。その白人は急に怖くなつて、小山羊の皮包を下へ落して、手に持つてゐた石を一つだけ持つて逃げ出してしまつたのだ。その石がツヲラの額についてゐた石なのだ。」

「それから誰もはひつたものはないのかね？」と私は暗い道を覗き込みながら訊ねた。

「それからは誰もはひつたものはないのだ。入口の祕密は嚴重に保たれてゐて、國王だけは、それを開けて見るのだが、中へはひつたものはないのだ。この中へはひると一月の間に死でしまふといふ傳說があるのでね。白人ですらも山の上の洞穴の中で死んでしまつたのだからね。それで國王でも中へはひらないのだ。は！　は！　これはまつたくだよ。眞實だよ。」

吾々はこれを聞いて互ひに眼と眼を見交した。どうして一體この老婆はこんなことを知つてるのだらうと思ふとぞつと寒氣がして來た。

「さあはひるんだ、わしの言つたことが眞實なら、石を包んだ山羊の皮が、まだ床の上にあるだらう。それからこゝへはひつたものは死ぬと言ふ事が眞實かどうかは後になれば思ひあたるだらうて、は！　は！　は！」かう言ひながら彼女は手燭を持つてよち〳〵坑の中へはひつて行つた。白狀するが、私はまた彼女の後から蹤いて行くのを躊躇した。

「大丈夫だ！　あんな婆の言ふことを恐れてたまるものか」と言ひながらグッドは、ガゴオルの後についてて坑の中へはひつて行き、吾々も澁々その後に續いた。數碼進んで行くと、ガゴオルは立ち止つて、吾々の來るのを待つた。

「こゝを見い」と彼女は手燭をさし上げながら言つた。「こゝへ寶物を藏ひ込んだ人たちは、萬一祕密の入口を見附けた者があつても、中へはひれないやうに、こんな設備をしておかうと思つたのだが、間に合はなかつたのだ」かう言ひながら、彼女は、二呎四方もある四角な石が道の上に積み重ねてあるのを指ざした。その傍にもそれと同じ大きさの石がおいてあり、何よりも不思議な事には、漆喰と、鏝とが側においてあつたことだ。その鏝は、今日の職人の使ふものと同じやうな形をしてゐた。

こゝまで來ると、フアウラタは、恐ろしくなつてもうこれから先きへは行けないからそこで待つてゐると言つた。そこで吾々は彼女をその造りかけの壁の上に坐らせ、食料品を入れて來た籠を彼女の

傍に置いて、彼女を後に殘して進んで行つた。

十五歩ばかり行くと、突然、精巧な彫刻をした、木の扉に突きあたつた。その扉は開け放してあつた。この前にはひつた者が、それを閉めるひまがなかつたのか、それとも閉めるのを忘れたかに相違ない。

この扉の閾の上に、山羊の皮で造つた皮袋が落ちて居り、その中には小石が一ぱいはひつてゐるらしかつた。

「ひ！　ひ！　どうだね？」とガゴオルは笑つた。「わしの言つた通りだらう。こゝへ來た白人が慌てて逃げだして、女の皮袋をあそこへ落して行つたのだよ！」

グッドは身をかゞめてそれを拾ひ上げた。それは重くてざく〳〵音がしてゐた。

「きつとこの中にはダイヤモンドがいつぱいあるんだね」と彼は眞顏になつて言つた。誰だつて、ダイヤモンドのはひつた、山羊の皮袋を見ては眞顏にならざるを得ないだらう。

「さあ行け！」とサー・ヘンリイは焦々しながら言つた。「その手燭を貸せ」と言つてガゴオルの手からランプを取つて、部屋の中へはひり、燈りを高く頭上にさし上げた。

吾々も、ダイヤモンドの袋のことは暫らく忘れて中へはひつた。たうとうソロモンの寶窟へ著いたのだ！

薄暗い燈火で見ると、それは天然の岩をくりぬいてこしらへた十呎四角位の部屋であつた。部屋

の中には床から天井まで立派な象牙が積み重ねてあつた。吾々の眼に見えただけでも、最上等の象牙が四五百本位あつた。この象牙だけでも、吾々は一生裕福に暮してゆくことが出來る。ソロモン王は、こゝにある材料で、世界無比の有名な「象牙の玉座」をこしらへたのであらう。

部屋の反對側には、赤く塗つた二十許りの木の箱があつた。

「あそこにダイヤモンドがあるにちがひない。燈りをこちらへちよつと」と私は叫んだ。

サー・ヘンリイは手燭をさし上げて一番上の箱の側へ近寄せた。箱の蓋は、こんな乾燥した場所でも腐蝕して、緣がくだけてゐるやうに見えた。多分、ダ・シルヴエストラが壞したのだらう。蓋の穴の中から手を入れて中味を一掬み取り出して見ると、それはダイヤモンドではなくして、吾々のまだ見たこともない形をした金貨で、その上には、ヘブライ文字らしいスタンプが捺してあつた。

「これでとも角、手ぶらで歸らなくてもいゝ譯だ。」と私は金貨を側へ置きながら言つた。「箱の中には金貨が二千宛位はひつてゐるに相違ない。そして箱の數は十八ある。これは多分、職人や商人に支拂ふ金だつたのだらう。」

「ダイヤモンドは、あのポルトガル人が皆な袋の中へ入れてしまつたんだな」とグッドは言つた。

「あの一番暗い處を見るがいゝぞよ」とガゴオルが吾々の顏色を讀みながら言つた。「あの隅つこに、石の箱が三つある。二つは封がしてあつて、一つは開いてゐる！」

これをサー・ヘンリイに通譯する前に、私は一人の白人が三百年も前にこゝへはひつてから、其の後

誰もはひつた者はないのに、どうしてガゴオルがそんなことを知つてゐるかを訊ねて見ずにはゐられなかつた。

「星の世界の人間は、岩の中を見抜くものがあるつてことを知らないんだね？　は！　は！　は！」と嘲けるやうに答へて彼女は笑つた。

「あのすみつこを搜して見なさい、カーチスさん」と私はガゴオルのさし示した場所を指さして言つた。

「おや、こんな處に押入れのやうなものがある」とサー・ヘンリイは叫んだ。

吾々は急いで彼の立つてゐる處へ走り寄つた。この凹んだ場所の壁際に、二呎立方ばかりの三つの石の箱が置いてあつた。二つの箱には石の蓋がしてあつたが、三番目の箱は蓋が取つたまゝで開いてゐた。初めのうちは、銀色の光りがちら〳〵して、眼がくらんでよく判らなかつたが、だん〳〵眼がなれてくると、中には箱の七分目位のところまで、まだ琢きを入れないダイヤモンドがぎつしりはひつてゐた。私は身をかゞめてその中の幾つかを取り上げた。實にそれは紛れもないダイヤモンドだつた！　そのことはすべ〳〵した石鹸のやうな手ざはりで判つた。

「これで吾々は世界一の金持になつた！」と私は言つた。「モンテ・クリストだつて到底吾々にはかなはぬだらう。」

「市場にダイヤモンドの洪水を流してやらう」とグッドは言つた。

「まづ早くそれを取ることだね」とサー・ヘンリイは言つた。

吾々は世界中で最大の果報者である筈だのに、何だかまるでこれから罪を犯さうとする謀叛人かなんぞのやうに、眞青な顏をして手燭の燈りで燦々光る寶石の前に立つて、互ひに顏を見合せた。

「ひ！　ひ！　ひ！」と老婆のガゴオルは、大蝙蝠のやうに飛び廻りながら後の方で笑つた。「お前さんたちの大好きな光る石がそこに欲しいだけある！　だがそれは取つても指の間からこぼれてしまふぞ。食つてしまふか？　ひ！　ひ！　それとも呑んでしまつたらどうだ？　は！　は！」

その時私はダイヤモンドを喰つたり呑んだりすると言ふ考が妙にをかしくてたまらなかつたので大聲をあげて笑つた。他のものも譯が判らずに笑つた。だが暫らくすると急に笑ふのをやめた。

「他の箱も開けて見ろ！」とガゴオルが嗄れ聲で言つた。「きつとその中にはもつと澤山はひつてるよ。澤山持つて行くがいゝ。存分に持つて行くがいゝ、は！　は！　は！」

かう言はれたので吾々は外の二つの箱の蓋を開けにかゝつた。そして何だか冒瀆するやうな氣持で箱の封を切つた。その箱の中にはやはりダイヤモンドがいつぱい塡つてゐた。少くも二番目の箱からは、ダ・シルヴェストラが取り出さなかつたので、箱の緣まで溢れるほどはひつてゐた。三番目の箱には四分の一位しかはひつてゐなかつたが、それはみな色の變つた石だつた。二十カラット以下のものは一つもなく、或るものは鳩の卵位の大きさだつた。この大きなのは燈火で透して見ると少し黃味を帶びてゐた。本場のキンバーリーでは、かういふのを「色變り」と言つてゐる。

たが吾々は、その間にガゴオルが殘忍な眼附きで吾々の方を睨みながら、蛇のやうにこの寶窟を脱け出して、暗い道を通り拔けて、大きな岩の祕密の扉の方へ匍つて行つたのを氣が附ずにゐたのだ。

＊　＊　＊　＊　＊

忽ち續けざまに泣き叫ぶ聲が暗い道の方から聞えて來た。それはファウラタの聲だ！

「あゝ眼鏡の方、皆さん！　助けて下さい！　助けて！　石が落ちて來ます！」

「おや、あの娘の聲だ！　では――」

「助けて！　助けて！　婆さんに突き殺されます！」

吾々はすぐに暗い道の中へ駈け下りた。手燭の光りで見ると、大へんだ！　大きな岩の扉が徐々に下へ下りつゝあるのだ。もう床から三呎しかない。その側でファウラタとガゴオルとが摑みあつてゐる。ファウラタの赤い血は彼女の膝までたれてゐたが、勇敢な娘は山猫のやうな老婆に尙もしがみついてゐた。あつ！　老婆は逃げた！　ファウラタはぱつたり仆れた。ガゴオルは地べたに身を投げて蛇のやうに身をねぢつて石の扉の下をすり拔けようとした。扉はその時に彼女を身體を上から挾んだ。ガゴオルが下になつたのだ！　あ！　もう駄目だ！　もう駄目だ！　彼女は石と石とに挾まれて苦悶の叫びをあげた。三十頓の大石がだん〳〵下へ下りて來て、彼女の骨だらけの體軀を徐々に下の岩の上へ壓へつけた。けたゝましい叫び聲も遂にやんでめり〳〵と骨の碎ける音が聞え、吾々がそこ

へ駈けつけた時には扉は下まできちんと接いてゐた。

それは四秒間位の出來事だつた。

それから吾々は、ファウラタの方へ向き直つた。可哀さうな娘は、胸を突き刺されて仆れてゐた。もう助かる見込のない事が私にはすぐに判つた。

「あゝ！　ブウグアンさま（グッドのことを彼女はかう呼んでゐたのだ）妾は死にます！」と美しい娘は喘ぎ〳〵言つた。「あのガゴオルが外へ匍ひ出して行きましたときには、妾はちやうど氣絕してゐたので氣がつきませんでした。――すると扉が少しづゝ下へ落ちて來るのです。その時あの老婆はまた中へ引返して來ました。上の方を見上げると、あの老婆が少しづゝ下へ下りてくる扉をくゞつて、中へはひつて來たものですから、妾はいきなりあの老婆に武者振りついて止めてやりました。すると、あの女は妾を刺したのです。この通り！　妾はもう死にます、ブウグアンさま！」

「かはいさうに！　かはいさうに！」とグッドは叫んで、どうすることも出來なかつたので、下へ身を投げて彼女に接吻した。

「ブウグアンさま」と彼女は暫時してから言つた。「マクマザンさまはそこにいらつしやいますか？妾はもう眼が見えなくなつてしまひました！」

「私はこゝにゐるよ、ファウラタ！」

「マクマザンさま。暫時の間お願ひですから妾に代つてブウグアンさまに申上げて下さい。あの方に

は妾の言葉は判らないのですが、妾は死ぬ前にたつた一語申上げたい事があるのです。」
「何でも言ひなさい、フアウラタ。私が通譯してあげる。」
「ブウグアンさまに言つて下さい。――妾があの方を愛してゐると言つて下さい。妾は死で行くのが嬉しいのです。さうすればあの方は妾のやうな者と關はりがなくつてしまひますから、太陽と闇とがつり合はないやうに、白と黑とはつり合ひません。あの方を初めて見た時から、妾は時々まるで胸の中に鳥がゐて、いつかこゝから飛び去つて、何處かへ行つて歌ふやうな氣がしました。今では妾は手を擧げることも出來ませんし、妾の頭は冷たくなつてゐますけれど、それでも妾の胸は死ぬやうな氣がしないのです。妾の胸は愛のためにいつぱいで、千年も、若くて生きてゐられるやうな氣がするのです。どうぞ、あの方に言つて下さい、若し妾が生れかはつたら、ことによると星の世界でお目にかゝれるかもしれません、マクマザンさま、どうぞたつた一言、妾が愛してゐるとだけ言つて下さい――おゝブウグアンさま！　もつと強く、強く抱きしめて下さい。妾にはもうあなたのお腕が判りません、あゝ！」
「彼女はたうとう死んでしまつた――死んでしまつた。」とグッドは悲しみの餘り起ち上つて叫んだ。彼の正直な顏には涙が傳つてゐた。
「もうあの女のことを悲しまなくてもいゝよ、グッド君」とサー・ヘンリイは言つた。
「いえ！　それはどう言ふ意味です？」とグッドは詰つた。

「それはね、君ももうすぐにあの娘といつしよになれるやうなると言ふことさ。判らないかね、吾々は生き埋めにされたんだ！」
サー・ヘンリイがかう言ふまで、吾々はかはいさうなフアウラタの最期の光景に氣を取られてゐたので、吾々が現在どう言ふ立場に陷いつたかを氣がつかなかつた。しかし彼の言葉を聞いて、その恐ろしさがやつと判つて來た。重い石の扉は閉されてしまつたのだ。しかも多分永久に閉ざされてしまつたのだ、といふのはその祕密を知つてゐるたゞ一人の人間は、その下になつて粉微塵に碎かれてしまつたからだ。このやうな扉は、强力なダイナマイトでも用ゐなければ到底開く望みはない。しかも吾々はその扉の惡い方に閉ぢ込められてゐるのだ。
數分間吾々は恐怖にうたれてフアウラタの死骸の側につゝ立つてゐた。元氣も何もすつかりなくなつてしまひ、これから徐々に慘めな最期をとげるのだと思ふと、吾々は呆然としてどうしてよいか判らなくなつた。今になつて吾々はすつかり合點が行つた。これはあのガゴオルの惡魔が最初から仕組んだ事に相違ない。あの老婆はどういふものか吾々をひどく憎んでゐたが、その吾々三人が日頃欲しがつてゐた寶物ともろともに、飢ゑと渴とで徐々に死んで行くのを見て、彼女は樂まうと考へてゐたのだ。彼女がダイヤモンドを食うとか呑むとか言つて吾々を嘲つた意味が、今になつて私には判つて來た。恐らくあの憐れなポルトガル人も、吾々と同じやうな目にあひかゝつて、寶石の一ぱいはひつた皮袋を棄てたまゝ、慌てゝ逃げ出したものに相違ない。

一ぐづ〳〵してゐても仕様がない」とサー・ヘンリイは嗄れ聲で言つた。「ランプはすぐに消えてしまふから、あの扉を動かす仕掛がそこらにあるかどうか搜して見よう。」

吾々は死物狂ひになつて、血の沼の中をあちこち歩き廻りながら、扉や、道の兩側の壁を手さぐりして見たが、仕掛けらしいものは何も見つからなかつた。

「駄目だ！」と私は言つた。「仕掛けは内側にある筈はない。もし内側にあるのならガゴオルは慌てゝ匍ひ出さうとしなかつたに相違ない。あの老婆が、大きな石の下に敷かれるのもかまはずに逃げ出さうとしたのは、内側には仕掛けのない事を知つてゐたからに違ひない。」

「とに角、吾々はこの扉をどうすることも出來んから、もう一度寶窟の中へ引き返さう」とサー・ヘンリイは言つた。

そこで吾々は、後へ引返した。行きがけに、中途にある造りかけの壁の側で、憐れなファウラタが持つて來た食物を入れた籠を見附けたので、それを吾々の墓場となるべき寶窟の中へ持つて行つた。それから吾々は引返して、ファウラタの屍體を鄭重に寶窟の中へ運んで、金貨の箱の側へ置いた。

そして吾々は、寶石のはひつた三つの石の箱に凭れてどつかと坐つた。

「これから食物をなるたけ永く續かせるために今の中に三人で分けておかう」とサー・ヘンリイは言つた。そこで吾々はそれを分配した。少しづつ食べれば一人前四回分宛位の分量があつた。それから乾肉の外に、六合づつ位はひる水を入れた瓢簞が二つあつたのである。

「さあ、明日は死ぬんだからこれから食つたり飲んだりしよう」とサー・ヘンリイは苦笑しながら言つた。

吾々はめい〳〵少量の乾肉を食ひ、少しばかりづつ水を飲んだ。いふまでもないことだが、吾々はひどく空腹を感じてはゐたのだが、食欲は餘り無かつたのだ。それでも食事をするといくらか氣分がよくなつて來た。それから吾々は起ち上つて、何處かに出口はないかといふ微かな希望を持つて、この牢獄の壁を系統的に隅から隅まで檢べて見た。床も同じやうに注意深く檢べた。

だが出口は何處にもなかつた。考へて見れば寶窟などに出口のありさうなわけもないのだ。

ランプはだん〳〵薄暗くなつて來た。油はもう殆んど盡きてしまつたのだ。

「コオターメンさん」とサー・ヘンリイは言つた。「今何時ですか？　——あんたの時計は動いてゐますか？」

時計を取り出して見るともう六時であつた。吾々が洞窟の中へはひつたのは十一時だつから、もう七時間たつたわけだ。

「インフアドオスが待ちあぐんでゐるでせう」と私は言つた。「若し吾々が今夜ぢゝに歸らなければ朝になつたら彼は吾々を搜しに來るでせう。」

「いくら搜しても判るまい。あの男は扉の祕密も知らなければ、扉が何處にあるのかさへも知らないのだから。昨日までは、生きた人間で、扉の祕密を知つてゐるものはガゴオル一人しかなかつたので

す。今日はもう誰も知つてゐるものはないのです。たとひあの男が扉を見附けたとしても、あれを壞すことは出來はしない。ククアナの軍隊が總掛りになつたつて厚さ五呎もある岩を壞すことは出來はしない。もうかうなつては神樣にすがるより外はありませんよ。考へて見れば寶物を搜しに來たものは皆非業の最期をとげたが、吾々も矢つ張りその仲間の數を增やすだけですよ。」

ランプは益々暗くなつて來た。と思ふと急にぱつと燃え上つて白い象牙の積み重ねたのや、黃金の箱や、その前に橫はつてゐる哀れなフアウラタの死骸や、寶物の一ぱいはひつてゐる山羊の皮や、ダイヤモンドの鈍い光りや、そこに坐つて餓死を待つてゐる三人の白人のやつれた凄い顏やを、一時に明るく照した。

そして焰は消えてしまつた。

第十八章　絕望

その晩の恐ろしさは私の筆では十分に描きつくせぬ。だが有難いことにはその恐ろしさは時々眠りのために途切れた。こんな恐ろしい境遇にあつても疲れきつてゐると時々睡魔が襲つて來るものだ。けれども少くも私は餘り多く眠ることは出來なかつた。世界中の最も勇敢な人間でも吾々の眼前にさし迫つてゐるやうな運命には氣がくじけてしまふに相違ないのに、私は決して勇敢な人間ではないのだ。しかしその事は別としても、その場の餘りの靜けさだけでも、眠ることを許さなかつたのだ。讀者諸君は、夜、床の中で眼が醒めて四邊の靜けさが妙に恐ろしくなる時があるに相違ない。だが諸君は、完全な靜けさと言ふものがどれ程恐ろしいものかはまだ知るまい。地球の表面では常に何かの音、何かの運動があるものだ。ところがこゝではさういふものが絕對にないのだ。吾々は雪を戴いた大きな峰の內臟の中へはひつてるのだ。數千尺の上には淸らかな風が眞白な雪の上を吹いてゐるだらう。だがそんな音は此處まではとゞきはしない。吾々は死人の坐つてゐる恐ろしい墓場からですらも長い隧道と五呎も厚さのある岩の扉とで隔てられてゐるのだ。しかも死人は音などさせるものでない。世界中の砲兵隊が一度に大砲を放つたつて、この生きた墓場の中にゐる吾々の耳にはとゞく筈がない。吾々は世界のあらゆる響から絕緣されてゐるのだ。——既に死んだも同じなのだ。

それに吾々の皮肉極まる立場が妙に强く私の胸を打つた。吾々の周圍にはいゝ加減な國の國債を支拂つたり、艦隊を建造したりするに足る位の富が橫はつてるのに、吾々はそんなものはいらないから少しでも逃げ出す機會があればよいと思つてるのだ。今にきつとそんな寶物よりも一片の食物、或ひは一ぱいの水の方がほしくなつて來るだらう。そして最後には、一思ひに苦しみを縮めて死んでしまふことが出來れば、そんな寶物はいらないといふ氣にもなることだらう。實際人間が一生を費して得ようとする富なんていふものは、最後の時になるとまつたく價値のないものだ！

こんなことを考へてゐるうちに、夜はだん〳〵更けて行つた。

「グッド君、燐寸は何本殘つてゐるかね？」とたうとうサー・ヘンリイが言つた。その聲は恐ろしい

靜寂の中にがん〳〵響き渡つた。
「八本です。」
「一本擦つて時間を見よう。」
彼が燐寸をすると漆黑の闇に馴れてゐた吾々の眼は、眼がくらむほどまぶしく感じた。私の時計は五時だつた。吾々の遙か頭の上では、今、美しい曙の光りが雪の峰を染めてゐるに相違ない。そして、心地よい微風が、夜の靄を吹き拂つてゐることだらう。
「何か少し食つて元氣をつけることにしよう」と私は言つた。
「物を食つたところで何になるんだ？」とグッドは答へた。「もう早晩死んでしまふんだもの？」
「でも生きてゐるうちはまだ希望がある」とサー・ヘンリイは言つた。
そこで吾々は乾肉を食ひ、少しばかり水を飲んでまた暫らく休んだ。その時サー・ヘンリイは出來るだけ扉の近くへ行つて大聲を出せば誰かゞ外で聲を聞きつけるかもしれないと言ひ出したので、長い間の海上生活で鋭い聲を持つてゐるグッドが、手さぐりで隧道を歩いて行つてわめきはじめた。彼の出した聲は實に大きな聲だつた。しかし外側へは蚊のなく程にも聞えなかつたことであらう。
暫らくすると彼は斷念してすご〳〵歸つて來た。しかもそのために咽喉が渴いて少し水を飲まねばならなかつた。それで吾々は水がなくなつてしまふのをおそれてもうわめくのはやめた。
吾々はまた用もないダイヤモンドの箱に凭れて何もせずにつくねんとしてゐた。この何もせずにゐ

るといふことが、また吾々にとつては何よりつらいことの一つであつた。私はもうすつかり絶望してしまつた。サー・ヘンリイの廣い肩の上に頭をもたせて、私は思はず涙をこぼした。片一方の肩では、グッドが涙をのみ込んでゐるのが聞えた。
その時ほど私は、サー・ヘンリイのやさしさと勇氣とをしみ〴〵感じたことはない。吾々二人が物に恐れた子供で、サー・ヘンリイが乳母だとしても、彼はこれ以上吾々をやさしくすることは出來なかつただらう。彼は、彼自身も同じみじめな境遇にあることは忘れてしまつて、力のあらん限り吾々を慰めたり勵ましたりしてくれた。そして吾々と同じやうな境遇にありながら奇蹟的に助かつた人の話をしたり、それでも吾々が浮きたゝなくなると遂にはもう苦しむのも暫くの間ですぐに樂になる、疲れきつて死ぬのは樂しいものだ（これは誡だが）等と言つたりして吾々を慰めた。
その中に夜が明けたと同じやうに日が暮れて行つた。こんな暗闇の中では晝と夜との區別はないのだが、燐寸をすつて見ると時計は七時になつてゐた。
吾々はもう一度喰ひ且つ飲んだ。さうしてゐるうちに私の心のうちに一つの考へが浮んで來た。
「この空氣は重苦しいが、それでもいつまでも新鮮なのはどういふ譯だらう？」と私は言つた。
「さうだ。そのことは氣がつかなかつた」とグッドが跳び上つて言つた。あの石の扉から空氣がはひつて來る譯はないから、何處か他のところからはひつて來るに相違ない。空氣が通はないとすれば、吾々はこゝにはひつた時に窒息してゐる筈だから、きつとある、搜して見よう。」